痴人

著者：滝川寛之

＊

太陽は海原の地平線先にある東から上がり、それから時間をかけて森林が生い茂る丘側の西へと消えてゆく。生まれてこのかた日常からなる毎日がそうだと思っていた。

眩しい昼下がりの陽光に垂れ下がる港町の光景は、潮の香りが見えたようでいて、どことなく生命のたくましさを感じるものがあった。突きだしの軒先から覗かせた木材群宿。その片端から水滴なようなものがしたり落ちていた。コツコツとしたコンクリートの路面にいくつかの水たまりがある。そこから映し出された窓のようなものは、果てしなく青くて澄んでいた。

今日は日曜日である。日曜日と言えば、教会の日でもあった。材木屋の角を曲がったところから数百メートルも歩けば、パプテスト教会が顔をのぞかせてお迎えしてくれる。今日も”おはようございます”と、あいさつをする信教者らの姿があった。何人かは老婆で、何名かは若い女性。その群像の中にひとり、牧師の女房が立っていた。

「おはようございます！」

一人の少女が発する通った声は辺りじゅうに響きわたり、さらに色濃く礼拝のしらせを伺い知ることが出来た。

建物へ入る。教会の中は空調が整っており、室内温度は快適そのもの。老人や車いすのビジターらを考慮した自動扉の入り口直ぐから少し間をとった応接間と茶室がある。その奥を通ずると、天井は高くだだっ広い礼拝堂がある。

少女の名前は田名部生来（タナベセイラ）。

セイラはとてもポピュラーな顔立ちで、可愛いではあるのだが、特別抜きんでていると言うわけではない普通の女の子。今日も母親である田名部富子（タナベトミコ）と手をつないでここまで来た。

礼拝はおおよそ三十分後から始まる。それまでセイラは、応接間の壁側へある長くやわらかい革製のソファーに居た。礼拝が始まるまでの間、母親は彼女をここへ置いてからいつもどこかへ消えていく。しかしながらセイラはそれを気にすることが無かったものだから、富子は気兼ねなく自由がきいたと言ってよい。セイラは教会で仲良くなった友達と応接セットの本革製ソファーであそぶ。彼女は母親に”壊れるから絶対に飛び跳ねちゃだめよ。”とだけ注意されていた。

「あのさあ、セイラのおかあさんって美人だよね。いいなぁ♪」

「秋ちゃんのおかあさんだって、とっても、とっても、とーっても、きれいじゃない♪」

「あ、り、が、と♪」

「どういたしまして♪」

友達の秋ちゃんとは同じ年でいっしょの幼稚園。だけども、詳しく知りあったのはこの教会がはじめてであった。彼女は狐顔で肌がとても白かった。礼拝が始まる。セイラのおかあさんが戻ってきた。行動は神妙にそそくさとしているのだが、どことなく上目づかいで、唇を緩ませているよう。それについてセイラは、なにかしら異変を感じ取っていた。

牧師が壇上にあらわれる。いよいよピアノが鳴ると、まずは讃美歌から始まった。演奏が終わる。皆、着席した。キング牧師が聖書を片手に説教を始める。彼はアメリカの日系人。

キング・アーネスト・滝川”が牧師のフルネームである。礼拝は一時間で終わるけども、セイラからしてみれば、途方もなく長いように感じられたものだから、彼女はいつも落着きが無くてモジモジしていた。それを注意するおかあさん。非常にありきたりの母子。父親は大の宗教嫌いで礼拝などには参加しないどころか教会へ足を運ばなかった。そのため日曜日は常に母子の二人。帰り道でのことである。

「おかあさん、きょうもおとなのぎしきをしていたの？」

この言葉を向けるのは、いつものこと。おかあさんは少しだけ動揺した。それを逃さないセイラ。やっぱりなんかあるんだ……。そんなことを考える始末。田名部家は東海岸が望める少しだけ丘になった場所にあった。しかし海岸からあまり距離のない所なものだから、そこまで高台ではない。教会からの帰りも坂道はだいぶゆるかった。夜のことだ。

「今日の晩ご飯はなんにしましょうか？」

母が訊く。

「ハンバーグがいい！」

「そうね。いつもの煮込みハンバーグつくりましょうね♪」

トロトロのやわらかい煮込みハンバーグは、セイラの口の中で宝石箱のようにまばゆくはじけた。本当においしい美味しいハンバーグ。ねえねえねえ！　あしたも作って♪　だーめ。ほら、サラダも残しちゃだめよ。そんな会話が交わされる。父親は留守。たぶん、ゴルフコンペの帰りに酒場寄っているのでしょうね。富子はそう話していた。

「御ねんねの時間ですよ。ほら、セイラ。パジャマに着替えなさい」

はーい。セイラは寝間着へ着替える。彼女は本当のところ、もう少しだけ起きていたかった。父親の帰りをお母さんと一緒に待ちたかったのだ。おとうさん、おそいな……。父親とは最近ろくすっぽ会話を楽しんでいない。それこそやけっぱちになって存在を遠のいたものに置きたいくらい。セイラは寝たふりをした。まだ心は留守番なのだ。おとうさんがかえってきたら、だきついてやるんだもんね♪　それでー、ホットココアのむの♪　それからねむりましょ♪　やがて父親が帰ってくる。しかしそのころには、セイラは完全に寝てしまっていた。朝になると父はいない。早出という当番だとお母さんから聞いたけれど、そんなことはどうでもよかった。あいたい、あいたい、あいたい。そして会話がしたい。毎日、毎日、そう考えていたものだから、もはや心は窮屈に隙間が無くなっていた。きょうはぜったいにかえりをまつんだから！　お母さんに逆らってそう発した。富子は困った表情を浮かべる。セイラはけっきょく、今夜も会えなかったけれど、明日の朝はいつもよりももっと早く起きてやるんだもん。自身に言い聞かせて眠りにつく。翌朝になる。

「セイラ、セイラ、おきなさい」

富子が優しくセイラを起こす。う、うーん。と、眠気眼で目を覚ますと、お母さんは満面の笑みでほほえんでいた。

「ほら、”あした、おこして”って言ってたでしょ？」

「うん……」

「お父さん、もうじき朝ごはんたべて、出るわよ。いそいで、セイラ」

「あっ！　そうだった！」

二人は子供部屋を出るとお父さんの居る居間へと向かった。父、三郎は新聞を流し読みしながらテレビを耳で確認している。彼は既に着替えてあって、ネクタイとスラックスをきれいに着けていた。黒縁のメガネが特徴的で、光沢のあるカーボン製である。

「おはよう、おとうさん」

三郎がセイラを観やる。すぐに新聞へ顔を戻した。
「おはよう。今日は早いな、セイラ」
「うん」
これ以上の会話はない。父は新聞を置いてからテレビを消すと、玄関口へと消えて行った。母と会話しているのが聞こえる。いってくるよ。いってらっしゃい。今日も遅くなる。わかってる。フレンチキスをしてから二人は別れる。セイラは居間奥の通路からそれをみていた。母が居間に戻ってくる。
「どうしておとうさんはセイラにいってきますしないの？」
母は何も返せないでいる。カチンときたセイラは、“おとうさんなんかしらない！”と吐き捨てた。
「セイラ！」
「なに？」
「おとうさんはね、私たち家族のために一生懸命お仕事を頑張ってるの。その言い方は良くありませんよ！　わかった？」
「……ごめん、なさい」
セイラは到底理解できなかったが、そう発して謝った。しかし曇ったようにすっきりしない。どうしてどうしておとうさんはせいらをむしするの？　どうして？　分からない。理解できなかった。子供部屋に戻った彼女は再び寝ようとする。無理。脳がすっかり覚醒されていた。仕方ない。やっぱり、おきようっと。そうきめて居間へ向かう。カウンターキッチンでセイラの朝ごはんを作る母。そんなにたいそうな品ではないが、紅鮭と納豆、味噌汁、ツナサラダを用意していた。
「おかあさん、たまにはあさごはんでね、ミートスパゲティーとか食べたい」
「だーめ。朝ごはんは大事なのよ。やっぱり和食じゃなきゃ。今日も残さずに食べなさいね」
「はーい」
セイラはすっかり父のことなど忘れていたものだから、富子はほっとしたに違いなかった。彼女にはさびしい思いさせているものね。その分、わたしが優しくしてあげなきゃ。愛情をこめて。毎日毎日そう考えていることなどセイラは知る由もない。彼女はまだ幼稚園生。仕方のないこと。支度を済ませて母親と幼稚園へ徒歩で向かう。富子は迎えにも来てくれるものだから、セイラは何も心配いらない。幼稚園へ着く。秋ちゃんは先に来ていて玩具で遊んでいた。あきちゃーん！　あっ！　せいらちゃん！　仲間に入る。ねえねえねえ、これもまぜてみようよ。ほら、こうしてこうしてそうやってのせちゃうの？　えー？　このつみきものせるの？　いいけど、それじゃくずれちゃうかもぉ！　だいじょうぶよ。はい、おかあさんにまかせてください？　おかあさんじゃないもん。えへへ。あはは。幼稚園はとても楽しかったし、なんといっても友達が多かったものだから、さびしいおうちからの通園は、毎日、毎日、とても楽しみにしているひとつ。ノンストレスだったと言っていい。ラジオ体操も、玩具遊びも、砂遊び、お歌の練習も、ぜんぶ全部大好き。やがて、おひるごはん時間になり、昼寝タイムを過ぎると、帰宅時間だ。お母さんが迎えに来る。今日もなかよく手をつないで帰る。今日もたのしかった？　うん！　何をして遊んだの？　うんとね、あれと、これと、それと――。まあ！　たくさん遊んだのね。よかったわ？　お給食はなんだったの？　ミートソーススパゲティー！　あらあ！　それじゃあ、今日の朝ごはんはそれじゃなくてよかったわね？　やっぱり朝ごはんはご飯にお味噌汁しましょう

ね。はーい♪

セイラは自分が家にいないとき、母がなにをしているのか全く知らない。それが例えば、想像もできない未知の世界の出来事であったならどうだろうか？　しかしながら、そんなこと（勘ぐること）は幼児で考えもしなかったものだから、富子は果たして一安心しているのだろうか？　いったい、彼女の闇とは――？　後日のこと。

この日はお母さんのお迎えが遅く、セイラはやきもきしたものだ。結局のところ、居残りで夕方五時まで待たされた。そのときからだ。セイラも一人で帰れるようになりなさいね。と言われたのは。それについてセイラは、なんてことのない課題のように思われた。幼稚園から家までの距離は一キロほどである。曲がり角も大してなかった。セイラもだいぶ道を覚えている。帰りは難なく帰れるはず。ええっとぉ、ここをあるいてぇ、それでそれで、あそこをまがってぇ。もちろん、途中まで誰かと一緒に帰りたい気持ちはある。友達の中でも自分で帰れる子はたくさんいたし、その中から同じ帰宅路を通るものを探せばいいだけ。秋ちゃんは帰宅路が異なる。彼女は正反対の道だ。また、秋ちゃんのおかあさんはちゃんとお迎えに来てくれた。ふーん、うらやましいなぁ。なんでセイラのおかあさんはおむかえにこなくなったのかなぁ？　時々考えていた。セイラ、お母さんもたくさんやることがあって忙しいのよ。分かってくれる？　お母さんのその一言になにも口答えできなかった。彼女もだいぶ言葉を理解できるようになっていた。しかたないなぁ。おかあさんはいそがしいからっていうし、あきちゃんはちがうみちだし。おなじみちかえるこいないかなぁ？　あっ！　あきらくんがいるぅ！　そうだ、あきらくんとかえろっと♪　明君は容姿の良い子で性格もあかるくてなじみやすかった。セイラは彼に、いっしょにかえろうよぅ♪　と訊き、明君は気前よく承諾してくれた。これでかえりはこわくないもんね！

セイラは明君と歩いた。空は透き通るように良く晴れており、昼下がりながら照りつける陽光はとてもまぶしい。彼女は今風の麦わら帽子で、彼は野球帽。プロ野球選手になりたいなぁ。と、こぼしているのを聞いたことがある。だけども、野球練習する年頃ではまだなかったものだから、プーカーボールというやわらかい球で父親と遊んでいるのだと言う。バットは丸みのかかったお土産用でよく見るメガホンらしい。棒切れでは遠くに飛びすぎてしまうためだ。後処理が厄介になる。やがて分かれ道に差し掛かった。道端にはタンポポの黄色い花がたくましく咲いていた。セイラは明君とさよならする。またあしたねぇ♪　バイバイ♪　その角から家までは大して距離はない。おおよそ五十歩くらいで着く。上等な二階建てコンクリート住宅が見えた。油性ペンキで白色に塗ってある。そこがセイラの家。たどり着くと、鋼鉄製の門扉を開いて閉めなおす。玄関ドアの鍵が開いていないのでインターホンを鳴らした。お母さんはすぐに出てきた。おかえりなさい。ただいまぁ。だが、次の瞬間。男のひとがいる事に気が付く。荷物屋さんらしい恰好をしていた。宅配屋だ。それについてセイラは何やら直感的な事を巡らせた。おかあさん、だれ？　そして、なにをしてたの？

「こんにちは、お嬢ちゃん」

「こ、こんにちは……」

「宅配の人よ。ほら、暑いでしょう？　それで麦茶をごちそうしていたのよ」

「ふーん」

「それじゃあ、そろそろ仕事に戻ります。今日はありがとうございました！」

「いえいえ、こちらこそありがとう」

男は出て行った。セイラは何だか悔しくなった。悔しくて悔しくて仕方なかった。おか

あさん、なにかいけないことしてない？　おかあさん、おとうさんにみせないかおしてたし、とてもうれしそうだった。ねえ？　どうしてなの？　たのしかったの？　しらないおとこのひととはなすのがたのしくてしょうがなかったの？　己で己のクエスチョンを整理する。分からなかった。答えはループに無言を貫く。知りはしない。大人の世界など分かるはずもなかった。彼女は荷物をポンと置くと子供部屋へと向かう。お母さんには何一つ言及してはいない。少しだけ呆れていた節もあったけれど、とにかく歩き疲れていた。きょうはけっこうたのしかったな。セイラの胸の内はいつのまにか楽しいことで夢中になる。幼児だ。当然の話。嫌だと感じたことは一切深くかんがえないし、思いもしなかった。それでいい。それでいいのだ。お母さんが部屋に来る。つかれたでしょう？　と。そうでもない。と返した。見えきった嘘。富子はジュースを入れるわねと言うと、部屋を後にした。やったー！　内心そう思う。ケーキもついているかな？　ううん、きっとおかあさんのことだからついているにきまってる。だって、だって、せいらのおかあさんだもん。

今日のことは内緒にしててね。お父さんが聞くと誤解するから。わかった？　母はいう。うん、わかった。セイラは気さくにそう返した。とはいえ、今日の出来事は何だか忘れられないものになった。存在を消せない記憶になった。それが色々な出来事にまつわる不幸の原点になるかも知れない。核かもしれない。まさに原子そのものに違いなかった。いや、元凶ともいうべきか。日曜日のことだ。

いつもの教会へ歩く。朝は本当に気持ちが良い。連なる木材屋さんもこの日は休みで大きな入口が引き戸で閉まっていた。木の香りがする。ほんのりと残された感じ。途中、堤防が切れている。そこが一文字の漁港入り口。顔をのぞかせてみる。しごく透明な海面の上をサユリたちが群れを成して泳いでいた。今日は乾いている。朝露どころか、朝立ちすらない。この前の水たまりはすっかりと消えてなくなっていた。角を曲がって教会へと着く。

「おはようございます！」

その挨拶はいつものこと。ありきたりに感じるかもしれない。だが、それがまたよかった。建物の一階部分は保育園で、礼拝堂へと向かうには外階段を上がらなければならない。富子とセイラは手をつないだまま、ゆっくりとそれを上った。中に入る。実に快適な空調はこの時もいらっしゃいませを発しているかのよう。しごくひんやりとして気持ちよい。お母さんは今日もセイラを置いてどこかへ消えてしまった。秋ちゃんがいる。ふたりはいつものようにして応接間で話した。

「ねえ、おかあさんたちいるじゃない？」

「うん」

「いつもなにしてるのかな？」

「えっと……。わかんない！」

これ以上は話さない。別の話題に移る。ああでもない、こうでもない。それはよかった、よくないもん。だってあれでしょ、そうでしょう。いろいろ話し込む。やがて礼拝の時間が迫ってきた。秋ちゃんとセイラのおかあさんが戻ってくる。この時も上目使いで上機嫌だった。礼拝が始まる。

セイラの親子は最前列の席に並んだ。壇上に居る牧師とは近い。賛美歌を合唱する。着席した。牧師の説教が今日も始まる。〝ハレルヤ〟。時折、唱える。そして、この言葉が届いたときの話だった。はうっ……。セイラは確かに聞こえた。微声なのだが、お母さんは確かにそう発していた。おかあさん？　セイラは小声で訊く。な、なんでもないのよ。富子

はそう返すだけだった。”ハレルヤ”。はうっ……！　おかあさん――？　ちょ……、ちょっと、トイレに行ってくるわ。すこしだけ待ってなさい。ロングスカートをはいた富子はそう言うと、そそくさに礼拝堂から出て行った。なんだろう？　おかしなおかあさん。やがて礼拝が終わる。

あれから富子は戻ってきてなかった。セイラが応接室へ向かうと、なにやら若い男と談笑しているお母さんが出口あたりにいることがわかった。おかあさん！　呼ぶ。富子は、しつれいします。と男に会釈してからセイラのもとへと歩いてきた。ごめんね。まってた？　ううん、いいの。だれ？　ああ、宣教師の一人よ。つぎの部の。ぶ？　この教会に牧師は一人だけじゃないのよ。ほら、一日に何回も礼拝しているから、牧師さんが何人も必要なの。わかった？　へぇ……。それじゃあ、かえりましょう～　うん……。なんだか納得がいかないまま、何かをはぐらかされていると言うか詰まるものを感じたセイラは訊こうとした。謎を。しかし、訊けなかった。

今日の昼は外食で、”リンガーハット”という長崎ちゃんぽん屋。魚介と野菜のだしがしごく美味くて、セイラはとてもこの店を気に入っていたものだから、富子は迷わずそこへと向かった。今回も大人サイズのちゃんぽん麺を注文した。行列が出来るほどごった返していたので、早めに食事を済ませてから店を後にする。帰宅はタクシーを拾った。家に着く。

お父さんに関して、休日はゴルフで必ずと言っていいほど家にはいない。それを心底さびしいと思うセイラは、とにかくお母さんに甘える始末。きょうはおやつを贅沢なものにしてもらった。家で作るミルク金時だ。富子はそれをぜんざいを作ることからしたのだから贅沢以外の何物でもなかった。愛情たっぷりのデザートはとてもおいしかったし、なによりも、セイラは甘いものが大好きである。お代わりもした。

体が冷えると気分が悪くなるのは子供も一緒で、セイラもまた菌が脳に届いたようにズキズキと頭痛をさせ、子供部屋で倒れこんだように眠ってしまった。おかあさんは彼女が完全に寝るまでそばから離れはしなかった。それがセイラはうれしいとおもう。暫くしてからのこと。

季節はなだらかな秋を越えて凍える冬になった。衣替えは今月で済ましてある。ことしも街中にある衣料スーパーで新しい衣料を購入していた。セイラは年々サイズが大きくなっている。古着はバザーにでも出しましょうね。富子は彼女に言い聞かせた。このふくはおきにいりなのぅ！　やだぁ！　駄々をこねても駄目ですよ。あくる月曜日のこと。

セイラは下校のみならず登園時もひとりで行けるようになった。最初のうちは不安で仕方がなかったが、明君と待ち合わせするようになってからというもの、それは一気に解消された。明君はとても頼りになる。おい、おまえらつきあってんのかよぅ！　そんなヤジが飛ぶほど明君とセイラは仲良しで、いつもくっついて幼稚園内を遊んでいた。その日の帰り、明君と待ち合わせ場所でバイバイして家に着くと、玄関口でインターホンを鳴らした。あれ？　おかあさんでてこないなぁ。家中に居るであろう富子の反応が無くて困ってしまったセイラはその場に座り込んだ。おかいものいってるんだぁ？　そっか、そうなのよ。そんなことを考えて。待つこと何分。せかせかしいセイラは”もしかしたら”と思い、何回かインターホンを鳴らしなおした。そのときだ。

”嗚呼……！　いい……！”ハッとした。なんだろう？　このこえは聞いたことのない狂ったような声で、おかあさんは何かを叫んでいる。はたして……。おかあさーん！　おかあさん！　チャイムを鳴らし続ける。声が止まった、と思った。確かに聞こえなくなっている。”はい、セイラ？”インターホンから聞こえる。うん、ずっとまってるんだから！　はや

くあけてぇ！　玄関が開く。お母さんと、そしてなぜかは知らないが宅配屋までもがいる。セイラは“あっ！”と発してから口をつぐんだ。
「ごめんね。お荷物屋さんと話し込んでて気が付かなかったの」
「うん……」
「それじゃ、奥さん。きょうはこのへんで」
「はい」
ドアが閉まる。
「おかあさん、げたばこにいたの？」
「ちがうわ。今いっしょに下駄箱へ来たのよ」
「そうなんだ……」
「さあ、ストーブつけてあるから、なかに入って体あたためなさい」
きょうの外気温は冬の始まりらしく八度で、足の爪先から凍えた。セイラは毛糸のマフラーをしていて、それをお母さんが解いてくれる。手袋は子供用コートのポケットだ。彼女は忘れないようにそうした。コートを脱ぐ。おかあさん、さっきへんなこえがきこえたよぅ？　どうしたの？　訊いた。訊けなかった。温かいホットミルク飲みましょうね。”　その言葉が先だったから。セイラは“うん……。”と応えることしかできない。おかあさんはいけないことしているのよ。そうよ。きっと、そうだよ。あのおにもつやさんとおしおきごっこしているんだもん。でも、おしおきごっこって、なに？　そうだ！　セイラがおかあさんとかせんせいのいうことときかなかったときにおやつとりあげられるゲームよ。そっか。それでおかあさんはさけんでいたんだ。いちごのしょーとけーきがほしいって。なんだ、そっか。それじゃあ、おかあさんはわるくないのね。わるいことしているのはおにもつやさんよ。あのひとおとこのひとだから、ケーキをよこどりしたのよ。それで、おのみものもかってにのんだの。おかあさんのだいすきなミルクティーを。もう、どうしよう。それじゃあ、セイラはおかあさんにほっとみるくあげたほうがいいのかなぁ？　でもそうよね。おかあさんならもうひとつじぶんのぶんもつくるはずだからだいじょうぶよ。きっとそう。それで、れいぞうこのなかにもっとたくさんケーキはあるの。すてき――”　黙り込んじゃって。何を考えているの？　なんでもない。そう、それならいいけれど。ケーキもあるわよ。たべる！　はいはい”　用意しましょうね”
お砂糖の入ったホットミルクは、ほっぺたが落ちそうなほどおいしかった。セイラはケーキ用スプーンを宙に躍らせてからショートニングに手を付ける。少しずつ少しずつケーキを丸裸にするのが彼女の食べ方。そんなはしたない食べ方いけませんよ。母はよく注意したがセイラは言うことを聞かなかった。だってそうでしょう？　これはセイラのシンデレラ姫ケーキなの。セイラの言うとおりにしなさい、ケーキちゃん”　うふふ、とっても素敵ですよ”
きょうも無事一日を終えて、セイラは子供部屋で寝る時間になった。
セイラはすやすやと眠りにつく。しかしながら、それは今夜に限って容易なことではなかったものだから、彼女は内心ひやひやとしていた。居間では、帰ってきたお父さんとお母さんの夫婦喧嘩が起こっていたのである。正直こんなに怖い思いをしたのは初めて。何かを叩きつける音と罵声。奇声に発狂。なにやらこの世の地獄を感じたものだ。ここは幸せな場所ではないの？　それって不自然かしら？　天使がささやくと、神は容赦なく雷を落とす。やがて雷様が現れて地獄行きだ。おそろしいおそろしい針の山である。事の発端はゴミ箱にある使用済みコンドーム。それをお父さんが見つけてしまった。おまえ、浮気

しているのか？　と。富子は万事休した。それから殴られっぱなし。罵倒されっぱなし。ああ、おかあさんがかわいそう。何も知らないセイラは心底そう思った。

翌朝、おかあさんの顔を見ると、おもわずゾッとする。額にはおにぎり三個分のコブができており、そのてっぺんからは血が噴き出していた。目は両方とも真っ黒。それは動物園で観たパンダさんのよう。口元もほっぺたへ向けて青い。ほんとうに、ほんとうにセイラのおかあさんなの？　訊いた。そうに決まってるじゃない。なにを言っているの？　その声はガラガラに枯れ果てていた。昨夜、叫びすぎたのだろう。酷いもんだ。お化けのように醜かった。風船化け物。

セイラはその日、幼稚園を休んだ。とてもじゃないがそんな心境ではない。酷いありさまのお母さんから離れたくはなかった。午前十時ころ、二人で買い物へと出る。富子はサングラスに白いマスクを。それをまねてセイラもマスクをした。買い物帰りに通っている教会へ寄った。お母さんは牧師と何かを相談するらしく、セイラはいつものことね。と、応接室でソファーに座っていた。この日の教会は人もいなくて非常に静か。話し相手のいない彼女は絵本を手渡されていたので、それを読む。つまんない。一冊しかないので、すぐに飽きる。そうだ！　おかあさんがなにはなししているかききにいこうっと♪　そう企むと、そそくさと茶室の方へと向かった。そのときだ。

「嗚呼！　らめぇ！　らめぇなのぅ――！」

なんだか呂律のまわっていないような奇声が耳に届いたものだから、セイラはびっくりして口を両手でかくした。なに？　いまのこえ、おかあさん？　なに？　なにしてるの？　答えは分からないまま。彼女はたまらなくなりその場から逃げて応接室へと戻った。それから何事もなかったようにして今までの出来事を忘れる。できなかった。

もういちど、もういちどだけ。聞き耳を立てにあそこへと行きたい。そんな気持ちが支配していた。しかし、迷っているうちに母は上目の上機嫌で戻ってきた。サングラスとマスクはしていない。まあ、なんてひどい風船お化けなんでしょう。セイラは母親の顔を見るなり拒絶反応のような、それとは少し異なる同情心ともいうべきか、訳が分からないままに心がいっぱい。かわいそう。おかあさんがかわいそう。きのうもきょうもおしおきごっこしていじめられてるんだわ。でもだいじょうぶ。セイラがたすけてあげるんだもん。でも、どうやって？　うんとね、うんとね、わかんない。

「さあ、セイラ。帰りましょう」

富子はそういうとサングラスとマスクをつけた。その姿はまるで月光仮面。セイラはあわてて自身もマスクをつける。たいちょう、かんりょうしました！　掛けてあるボンボン時計が時報を鳴らす。ごんごんごん……。時間の分だけ鳴り響く。”最後の晩餐”の油絵が物静かそうにしてこちらを見ていた。二人は教会を出る。

ゆうがたの帰り道は港の方から。あの木工所が軒を連ねている海辺道だ。かーらーすー♪　なぜなくのー♪　からすはやーまーにー♪　お母さんとセイラはそろって歌を唄った。手はつないで歩いている。セイラ。うん、なに？　おかあさん。いえ、何でもないのよ。へんなおかあさんですね。そうかしら？　そうよ。そうかもね。えへへ♪　うふふ♪

今夜の晩御飯はお手製のとんかつ定食。肉厚にふっくらとしていてカリッと香ばしい。それを口へほうると肉汁がじゅわっと噴き出す。とてもとても濃厚な特製ソースもお手製。林檎と蜂蜜が入っている。

リビングはフローリングで床の木目が素敵。それから壁紙はまっしろのクロスが貼られている。台所はカウンターキッチンでコンロはＩＨ。その下には特注のおおきなオーブン

レンジ。おおよそ丸鳥は二匹は入る。クリスマスはそれで焼く。テーブルは一枚板のフランス製。椅子は木製だが回転式でもあった。掛け時計は鳩サン時計で、時報のしらせはポッポッと鳩が飛び出す。

昨夜あった出来事が無ければ幸せな家庭。何一つ不自由などしていない。ないとすれば父親の愛情だけ。それはいい。そんなつまらないことでセイラはいじけなかったし、思い出したその場ですぐ忘れた。昨日のことだってそう。全部忘れてしまいたかった。

畳敷きの居間にだけ大きなテレビがある。それは襖を取り除いた状態なものだから、番組をリビングから容易と眺めることができた。会話が途切れた時、セイラはよくテレビにくぎ付け。けれどもあまり言葉が分からない。なものだから、夕方五時過ぎには理解できる番組がなかったけれど、本当にその場しのぎ程度でだが、映像を見入った。

「ニュース番組にしてよい？」

お母さんが訊いてくる。うん、いいよ。だっておもしろいばんぐみおわっちゃってるもん。セイラはいつもそう返した。ふと、彼女は思い出したようにして宅配屋さんのことを考える。今日は来ていない。それについてだ。ねえ、おかあさん。おにもつやさんさ、まいにちきてるの？　母は少しだけ微動だにしてうろたえた様子。なにを言っているの。そうじゃないでしょう？　毎日お荷物が来るほどお父さんはお偉いさんではありませんよ。ふーん。そうよ。そっか。そ、う。もう！

夜の九時がセイラの就寝時刻。お母さんは彼女を子供部屋へ連れて行くと童話を読み聞かせした。そして寝る。それからいったいどれくらい時間が経っただろうか？　セイラは中途覚醒して目を覚ました。やはり昨夜のことがあった後だ。中途覚醒するほど精神はひそかに張りつめていた。ねむけ眼でふらつきながらリビングへと向かう。お母さんがテレビも点けずに無音で椅子に腰かけているのが見えた。

「おかあさん……」

「あら、おきてきたの？」

「うん……。おとうさんは？」

「それなのだけれど……」

「それなのって？」

「それね。お父さん、きょうから出張みたいなの。遠くへお出かけという意味」

「遠くへお出かけ？」

「そうよ。だからしばらくは帰ってこないのよ」

「しばらく？」

「そう、しばらく。我慢できる？」

セイラはここで感極まった。なにがどう整理されたのかよく解らなかったが、なんとなくお父さんはもう帰ってこないような気がした。うわん！　と泣きじゃくる。それを見かねてお母さんは椅子から立ち上がり彼女をやさしく抱きしめる。よしよし、いい子ね。大丈夫よ。お父さんは帰ってくるから。セイラの大好きなお土産を持って。ときどきあったでしょう？　今日が初めてではないもの。出張はさびしい？　うん。そうね、さびしいわよね。お母さんも同じ気持ちよ。

泣きわめいて感極まったほてっている表情をいやすように、お母さんはセイラにバニラのラクトアイスを食べさせた。口の中はオアシスの泉のようでいて中いっぱいに甘く口溶けるそれは、セイラにとって女神様みたいな感情に陥れられた様子。とにかくおいしくてたまらない。そして彼女はほほえむ。おかあさんも、はい、どうぞ❣　身の乗った銀色のス

プーンさじの先をお母さんの口にあてがう。あーんと口を開けて食べてくれたお母さんも緩い表情へと変わっていた。

＊

セイラはことしセーラー服の中学生に上がった。

鉄筋コンクリートの壁から錆がにじみ出ているような古びた校舎。その三階がこの学年の学び舎。広々とした窓を全開にして湿った海風を教室へとなだれ込ませると、壁掛けの扇風機がガラガラと鳴った。今日も暑い。今年は春先からこれだ。これが夏になればさらに悲惨さへなると思うと、とてもじゃないが授業に身が入らない。しかしながら、ことしから冷房の空調設備が整うと言うから、生徒たちにとってこれほど朗報はなかったものだ。ゴールデンウィーク中に突貫工事をすると言う。非常に楽しみ。

体育館の屋根は鉄製で、全面、夕日みたいに赤く錆びていた。きょう全体朝礼で学年問わずして皆集合。校長の頭のてっぺんは丸禿だったのだが、それを揶揄するものは一人とていない。

セイラには意中の異性がいた。ひとめぼれ。男は同年同クラスの子。彼女は幼稚園からの幼馴染である彼氏の明君のことなどそっちのけで美男子に釘づけ。"おい、セイラ。おまえ最近、俺に冷たくないか？"野球部へ入部した明君が、夜、電話越しで発してきた。セイラは"なにが？"と、ごまかすしかなかったものだから、彼は"何だ、きのせいか。"と返してくるだけ。ときどき親友の秋ちゃんと恋話で相談したことがある。わたし、別の人が好きになったの。と。でも、それは絶対にいけないことだとも思っていたし、別れて告白すると言う事もなかった。

彼女は処女だ。いったいそれがどうしたと言うの？　わたしはこれでもクリスチャンなのよ。そんなかんたんに裸を男のひとに見せるのなんて。それもそうだろう。セイラはまだ中学一年生。だからどうした？　時代はどんどん若返りを見せているし、萌とは相対的にマセてきてもいる。小学生でセックスをしているカップルは山ほど。セイラは小学五年生の時に初潮を迎えた。くらくらとして寝込んでしまったのは記憶に新しい。それから六年になると、ためしに膣へ中指を入れてみたりもしていたものだから、おおよそオナニーというものに関して中学頃からは抵抗が無くなっていた。嗚呼、かみさま。こんなはしたない少女を慰めてください。わたし、わたし、もう我慢できないの。おねがい、明君。いれて……。いや！　そんなに乱暴にしないで！　わたしは処女なの。そう、聖女なのよ。それをお食べになるには儀式が必要よ。そう、ペッティング。上手に舐めまわして。わたしのからだを。乳首を。お尻の穴を。膣までもあなたの舌できれいにしなきゃ駄目――！

いけないセイラはひとめぼれの相手である美男子のことも忘れてはいなかった。彼の名前は東みつる。名前は地味だが、すごく女子にもててかっこよい。彼女はみつる君のことでもオナニーを行う。嗚呼、いけない子。いけない子。でも、それでも指が止まらないの！　嗚呼……。嗚呼、嗚呼、嗚呼！　そして絶頂を迎えると、逝く――！　と、激しく潮を吹く。

いま、セイラのベッドは潮を吹いた透明のおしっこで水浸し。どうしよう、こんなに吹いちゃった。でも、とりあえずあれね。ドライヤーで乾かしましょう。でも、延長コードがないわ。やだ！　お母さんに見つかっちゃう。でもでも、お母さんならわかってくれるわ。だって、だって、お母さんの方が淫乱なのだものね。いつもいつもセックスセックスセックス。いい加減にしてほしいとも思う。だけれど、お母さんはさびしいのかしら？　お

とうさんが今でも帰ってこないことが。そうよ、きっとそう。
　しかし、セイラはセックスを交えた大人の男女交際を一生したくないとも思う。じつはいうと彼女はセックスに対してトラウマ。それはどうして？　母の不倫における不幸がセイラの精神に異変を生じさせたのは言うまでもないこと。セックスはしたいけれどいけないとも思う心が錯綜とした中で、彼女は何度も何度も路頭に迷った。嗚呼、ほんとうはわたし、なにがしたいのかしら？　そしてなにがほしいの？　自問する。だが答えが探せない。結局のところ、交際すら嫌になることさえある。悩むくらいなら最初からそう言うことを断ち切りたかった。明君と小学高学年の際、正式に付き合ったわけだが、そんな簡単なことではなかったものだから、彼はほとほと疲れていただろう。それ位にセイラにとって交際とは厄介な代物。それもすべて両親のせいにしたかった。できなかった。
　ときどきお母さんが哀れに思う。元をたどればすべてお父さんが悪い。そんなことは分かっているし、それを理解することのできる年齢になってもいた。お父さんも可哀そう。家族のために仕事一筋で生きて、それなのにお母さんが不倫だなんて。やっぱり両者成敗ね。嗚呼、わたしもいいかげんにこのトラウマを何とかしなきゃ。でもあれでしょう？　男のひとって飽きやすいのでしょ。明君はわたしの裸を見たとたんに冷めないかしら？　そしてみつる君はどう思って？
　翌日、明君と待ち合わせをして中学へ登校する。それはいつものこと。なんの代わり映えのしない毎日。それが当たり前のように感じたこともある。だけれど二人は長いことこうしてきたし、それはもう幼稚園からの仲なので、知らない部位と言えば恥毛くらい。
　セイラは恥毛を剃っていた。わき毛と同じく醜く見えたからだ。それに臭いがこもるのが嫌。あのむせかえす性器の匂いが汚らしく思っていたのである。もしかして、明君も剃っているのかしら？　時々訊きたくなる。でもそんなときは彼のわき毛を観れば済む話でしょ？　そう諦めている。みたくはない。
「なあ、最近おまえ変だけど。なんかクラスとかであったのか？」
　通学路を歩きながら明君は訊いてきた。彼とはクラス違い。セイラは咄嗟に返す。なんにもないけど？　その表情には曇りがあった。それを明君は察した様子。まあ、いいけど。あまり俺に隠し事とかすんなよ。たのむぜ。彼はそう返すのが精いっぱい。彼女はなんとなしに申し訳なく思う。そうでもない。
　別れたいの――。
　言えるはずもない。明君のことはとても大事だと思うし、只、単に女の浮気心としてはあまりにもひどすぎる話だからだ。こんな自分勝手な考え方をして、わたし、ほんとうに将来、幸せになれるのかしら？　いけない、いけない。と、心の中で拳骨をする。そう、そうよ。わたしには彼が居て、彼もわたしのことを思っててくれてる。それのどこが不幸なのかしら？　まるでわたしは欲求不満な痴女じゃない。もう一つげんこつする。心は痛くじんとした。涙が出てくる。情けない涙だ。それでも明君は〝どうした？〟と肩を寄せてくれて、そして抱きしめてくれる。大丈夫。そう発して。
　セイラは初めての人を明君と決めていた。そうでなければ彼にも悪いもの。そう思ってのこと。しかし、セックスへのトラウマがそれを拒み続けた。気が付けば中学を卒業だ。本当にこのままでいいの？　彼女は地団太にする。そう、早く言ってほしかった。彼から〝セックスをしよう〟と誘ってほしかったのだ。明君は部活で忙しい。しかしながら三年の二学期からは下級生へバトンを渡しており、部活は無いに等しかったものだから時間は十分にあった。あそこの場所でしょう。それからあそこの場所でしょう。セイラはひとり計画

を練る。それを口に出すことをしなかったけれども、あの空き家、あの公民館の一室。いろいろと場所はあったものだから、自然にそう言う思考が巡っていたのだ。やっぱりわたしって痴女なのかしら？　その痴女というのもなれない言葉よね。学校では教えてくれないもの。でも、その言葉を知っているわたしって変態なのかもしれない。

テスト勉強はセイラの部屋で明君を誘ってした。家庭教師は金銭の問題で出来なかったが、セイラは賢い子だったので事足りた。高校はみつる君も同じ志望だったことが、彼女にとって何かのいたずらとさえ思ったし、良くない方向へいざなわれるような気がしていた。今夜は覚悟を決めている。彼女の部屋で明君とセックスをするのだ。できなかった。嗚呼、このままだとほんとうに処女のまま高校生になっちゃう。焦る気持ちもある。明君も奥手だ。彼自ら歩み寄ろうとはしなかったものだから、セイラのこころは、訳の分からぬ欲求で、はちきれそう。愛液は出ている。おしっこのようにして。我慢できなかった。彼女はけっきょく明君に内緒でオナニーをした。トイレで。嗚呼、そういえば秋ちゃんもわたしと同じことしているのかな？　ふと考えたりもする。親友の彼女のことだからきっとそうよ。そうに決まってる。その決まり文句は宙を迷走したように感じた。秋ちゃんとはしばらく学校でしか会話してなかったものだから、こんどふたりで仲良く洋服のお買い物でも行こうかな？

「ねえ、相談なのだけれど……」

学校で秋ちゃんからその様なことをはじめて言われた。彼女は相談事を今までしていなかった。セイラはそれに気づくと、”わたしは本当に弱いのね。”と自ら叱責したほど。秋ちゃんは言う。

「じつはいうと、みつる君にわたし告白されたの――」

なんですって？　そのまさかがあり得るはずがなかった。だってそうでしょう？　わたしが先に彼へ惚れたのよ。なぜ他の子を――。そんなことは決して発せない。セイラはみつる君と話したことが無かったから。はずかしかった。初心。だからといって秋ちゃんも同じじゃない。彼女も話ししたことが無くてよ。どういうことなの？　まさか、わたしの見えないところで……。

「セイラ、ごめんね。わたし、付き合ってもよい？」

セイラはみつる君のことが好き。ひとめぼれだ。その事について秋ちゃんとは一学年の時に相談している。でも、それでも明君のことを裏切れない。秋ちゃんはそれも考察したうえでこの言葉を発したのだと言う事をセイラは理解していた。

「う、うん……。いいのではないかしら？」

それが精いっぱいの強がり。

「ありがとう。それじゃあ、高校合格したら付き合ってみるね」

「高校？」

「やだ！　みつる君もわたしもセイラと同じ高校志望しているじゃない。わすれたの？」

「あ、ああ！　そのことね」

「今は受験のことしか考えたくないから。彼とおたがいに合格したら付き合う」

「そ、それはいいかもしれない。が、がんばって！」

「うん、ありがとう。セイラも頑張ろうね！　でも、明君大丈夫かな？」

「か、彼も意外と頭がいいのよ。あまり教えることが無いくらい」

「そっか、そういえば一緒に受験勉強しているのだっけ？」

「う、うん……」

「わたしもセイラと勉強したいけれど家が反対方向で離れているものね……」
「そ、そうね」
「ねえ。エッチとか、したの？」
小声でにやりとして秋ちゃんは訊いてきた。セイラは答えなかった。
彼女は路頭に迷う。嗚呼、どうしてなの？　それは秋ちゃんの容姿がとてもかわいらしいから。わたしなんか普通の普通だものね、しかたがないわ。今いる階段口の下から風が舞いあがってくる。下駄箱のある玄関口からだろう。そこの入り口は上等の観音開きな遮音ドアになっており、アルミ製。取っ手は木製のながい棒が施されている。外の中庭にはプランターがいくつもあって、中央に枯れた噴水と小便小僧が立ち尽くす。考える像は一角の端の方にあった。非常に乾いた匂い。だけども、その中に潤う花々の香り。ミツバチさえも迷い込みそうなほど。じっさいに一匹ほど迷い込んでいる。
セイラは考えた。これまでのこと。いろんな出来事を、一まとめにしてみた。答えは分からない。いや、答えを探すために思考を巡らしているわけではなかった。なにかがおかしい。なにかがおかしいの。それがわからないのよ。ブツブツつぶやいた。え？　なに？　秋ちゃんが反応する。ごめん、今一人になりたいの。ああ、それならちょっとトイレに行ってくるわ。うん。セイラは孤独になる。孤島の王女様だ。他の生徒などのスリッパ音など気にならない。だれもかれもが彼女のうしろすがたを観ながら通り過ぎて行った。
あきらめましょう。そう、みつる君とは縁がなかったの。只、それだけの話じゃない。しかし事態は異なる。相手が秋ちゃんだからだ。その彼女とは縁を切るわけにいかない。セイラは何だか悲しくなってきた。秩序というものが苦しかった。嗚呼、どうせならみつる君のソーセージエッグマフィンをほおばってやりたいわ。あーんとしてひと口で食べてしまうの。いいでしょう？　だめ、だめよ。わたしには明君というアメリカンドッグがあるじゃない。そう。それでね、マスタードとケチャップをこしらえて両方食べてみるのがいいわ。それもそうね。悪魔と天使が手をつないだような気がした。しかし、そうもいかない。どうする――？
ただいま。秋ちゃんが戻ってきた。気をそらす。ああ……、と。やっぱり彼女のことは裏切れないわ。だって容姿がわたしよりもいいものね。性格だってとってもすき。それなのにこんな痴女のわたしと親友でいてくれるなんてとても幸せなことではないかしら？　そうよ、そうにきまってる。いまは教会へ行っていないけれど、マリヤ様の子孫だものね。いけないことはいけないことなのよ。そうでしょう？　イエスキリスト様。
セイラはおもわず天を仰いだ。ちかちかとした蛍光灯一本が、なんだか彼女の心に残る。それはただの気のせいだろうか？　答えは分からない。はっきりとしたことは、セイラが決して純粋な痴女ではないと言う事。もっと醜い陰険なる信仰者。聖職者だ。考えてみれば初潮を迎えてからおかしかった。そう、最初の入り口からこの道は用意されていたのである。淫乱痴女セイラ姫。いったいわたしを美味しくお食べになるのはどちら様でよくて？　嗚呼、そうよ。もっともっともっともっとわたしのかゆい膣を痙攣させて。そして襞をぴちょぴちょにすっぷって。おねがい、あなたしかいないの。出来ることが許されているのは明君。あなただけなのよ。さあ、思い切りよくアメリカンドッグをお入れなさいっ！　はぁん。そうよ、そう。もっとうごかして！　嗚呼――。
今夜もオナニーが激しかった。どんどん淫乱になってゆく自身の理性はほとほと破壊されているように感じたし、もうそんなものは必要なかった。わたしはだれ？　あなたは何者？　そう、分からないのよ。いったい何がほしいのか、わたしにはわからないの。いや

っ！　やめてっ！　そんな暗闇にわたしを閉じ込めないで！　いやっ――！

彼女は夢を見ていた。気絶した後に。昇天したさきに、この暗闇はあったのだ。その黒さはまるで独房のよう。なにやら腐敗臭が漂う。自身の膣あたりから。肛門から。その真下の床から。もちろん何も見えない。みえた。鼻で感じるのだ。嗅覚で光景がおのずと浮かび上がった。そうか、わたし、ひとりぼっちなんだ。でもどうして？　明君は？　みつる君は？　どうして！　ねえ、どうしてなの！　発狂する。嗚呼、わたし、もうここから出られないのだわ。どうしよう。ずっとひとりぼっちなの？　嫌――！

はあはあはあはあ。どこからともなく声が聞こえる。それはとても恐ろしかったし、何者なのかセイラにはわからなかった。だれ？　だれなの？　彼女はつぶやく。汚れた独房の暗闇の中で。ひとり、恐れていた。お、おれだよ。え？　わかるだろう？　おれはおれなのさ。気づかないかい？　わからない。わからないの。こ、この声を忘れたっていうのかい？　あんまりじゃないか。え？　でも……。

さあ、しごいてくれ。俺のペニスを。これでわかるだろう？　アメリカンビッグバーのほうの俺さ。あきら、明だよ。俺はおまえのいうところの明君だ。え？　明君なの？　どうして？　なのに、どうして声が違うの？　それはな、ザナドゥの世界だからだ。その世界の端に俺たちはいるんだよ。わかるかい？　此処は地獄の一丁目なんだ。声が変わるのも無理はないだろう？　ほら、しごけよ。はやく――！

嗚呼、こわい。こわいわ、明君。どうしちゃったの？　どうしてそんなに冷たく言うの？　罵るの？　わたしはやさしく抱いてほしいの。わかるでしょう？　それとも、女の子の扱い方も忘れちゃったの？　どうして？　ねえ、どうして――！

うんうん唸る。暗闇から出たい、暗闇から出たい。その一心で。光は届いた。一筋の光。心の目を見開く。そこは現実の朝。眠気眼でセイラは遮光カーテンを見やった。すきまからこちらへ光が届いている。この光だったのか。思った。ふと、体中が汗だくになっていることに気が付く。いま、彼女はパジャマを着けている。下着はつけていなかった。それどころか、上着のボタンはほどけ、ズボンはつけていない。オナニーをしたのだから当然。セイラは思い出す。そうか、きのう自慰をしたのだったわね、と。彼女はベッドから立ち上がると素っ裸になってカーテンを開いた。隣近所に見られても構いやしなかったけれど、目撃した住民は一人とていやしない。そう……。少々残念がる。そうでもなかった。

セイラは即座に部屋着をまとった。トレパンとTシャツ。下着もつけている。白い壁にぶら下がる掛け時計を観た。八時。今日は土曜日。学校は休みである。部屋から出てリビングに向かうと母がいた。おはよう。一声を発してから用意されているベーコンエッグと食パンを食べる。牛乳は成分無調整。濃くて美味かったし、今の彼女にはちょうど良かった。今日の予定を頭の中でめくる。今日は昼から受験勉強。いけない、恥ずかしい汗の香りのする部屋の空気入れ替えをしなきゃね。

昼過ぎに明君は訪れた。部屋に入れると、彼はなんだかうれしそうにしている。それは毎回のこと。恐らく彼は何かをいつも期待しているのだろうな。セイラは申し訳ない気持ちでいっぱいになった。夕方には帰る。

夕食を終えてから部屋に戻ると、彼女はベッドであおむけになった。今日はあとお風呂入って寝るだけ。明日も休みだし、明君とどこかへ行こうかな？　そんなことを考えていた。いや、それよりも、秋ちゃんともお買い物行きたいんだっけ。そうだ、電話してみようかしら――。

秋ちゃんとの待ち合わせ場所は小学校の校門前。そこからバスに乗って市街地へと行くつ

もり。片道六百五十円ほどで行ける。距離は少々遠かった。西野宮古（にしのみやこ）はこの県内でも有数の繁華街。海外からの移民者たちで発起されたこの街は、どちらかというと中華を思わせる街並みである。少し道を外れたところに渋谷のような場所がある。そのもう一つ先は南青山とそっくり。セイラと秋ちゃんはもちろん、渋谷が目当てであり、そしてまた、繁華街の名物まんじゅうも目的のひとつだったものだから、いくぶん腹を空かせるようにしてじんぐりと徘徊した。

かえりのこと。バスを降りてから近くの海岸へ寄った。買い物袋は少々程度。これなら邪魔（荷物）にはならない。砂浜へ寄ろうと発したのは秋ちゃんの方が先。なにやら少し話があるらしかった。山側の夕日も海から眺めたいし。彼女はそう言う。帰りは大丈夫？ セイラは訊く。黄昏時には家に着くわよ。大丈夫。このへんには変質者が居ないものね。そう、本当に平和な港町。そうね……。ねえねえ、セイラは明君とどこまで発展しているの？ エッチは、した？ してない。できないもん。そう……。わたしね、興味があるの。男の子の身体っていうの？ なんていうか大人の世界が。だからみつる君と高校で付き合ったらすぐにエッチするかも。え？ なんてね、冗談。でも、べつにいいじゃない。そんなことがあっても。そうね……。セイラはみつる君の事、思い出にしてくれてる？ 思い出って？ 中学一年の時に相談していたじゃない。明君よりも彼のことが好きなんだって。そのこと。ああ！ その事。だいじょうぶよ。昔の話だから秋ちゃんは気にしなくていいの。だいじょうぶだから。そう……。

秋ちゃんと別れを告げ、家路へ着く。夜になった。

セイラはシャワーを浴びてから夕食をとった。それから明君へ電話を掛ける。夜の八時。リビングから電話の子機を部屋へ持ち去り、会話の続きを話す。今夜も当たり障りのない大した会話ではなかったものだから、正直マンネリしていて飽き飽き。だけども、こうして交際を長らく続けるのも愛なのよ。と、セイラは自ら理性を奮い立たせた。これでいいのよ。もうみつる君は終い。早く忘れなきゃ。

次の日の学校帰り、セイラはいつものようにして明君と帰った。これから受験勉強を部屋でする予定になっている。今日、彼女はずっと考えていた。みつる君を忘れるには、わたしが早いところ明君に抱かれてしまう事。そうよ、それでいいのだわ。そうなのよ、そうに決まっている。

部屋で人魚姫に陥る。明君に糸をほどいてもらって、パンティーを脱いで。恥毛のないつるんつるんなあそこを彼に見せてあげるのよ。ハアハアハア……。勉強中、なぜだか興奮している彼女を彼は目の当たりにして、おい、大丈夫か？ 熱あるのかもしれないな？ どれ、触ってみよう。手を額に当てる。すぐさまセイラは彼へ抱き着いた。だ、だいて……。それから二人は生まれて初めてザナドゥーの世界を観た。感覚的にマヒしそう。気絶しそう。彼女は潮を吹き付ける。彼は精子をセイラの顔面へ叩きつける。それはもうこの世の果てを思わせた。じっさいそう。桃色の乳首は極まったように酷く勃起している。それに同調してクリトリスも膨張していた。

まいにちまいにちセックス三味と化した二人の猛勉強は、やがて地中深くまで潜るよう。二人は泳いだ。地下にたまる泉で。はしたないことは十分わかっている。だけども彼女は男根を欲した。思い切りよくしゃぶりついた。精子を飲んだ。赤く焼ける太陽は東から上がると思っていた。当然そうだ。そして落雷は地上に落ちる。晴れた青空の真上から叩きつけられた不思議な雷は、セイラの処女膜を痛いほど引き裂いた。もだく、あえぐ。さけぶ、うなだれる。一点の真っ白な世界にいざなわれた二人がそこで目にしたものと言えば、

なんともいえないザナドゥーの都。泉の都。水車があって風車もある。田んぼへ注がれる用水路は源流のようでいて青く透明。緑の草木が広がっている場所が片隅に広がる。大自然。香りをかぐと千切れた緑のかほりがそこには只々残されていた。

白いシーツの上で裸体の汗を乾かす。明君の脇の匂いを嗅ぐと男性フェロモンに悩殺されそう。それはじゃれたメス猫のような生理的現象。もう一回だけしたい。もう一回激しくしたいの。セイラはつぶやく。何回だってできた。こんなに気持ちの良い感覚は初めて。お互いにもっと濃密になりたかった。

嗚呼、わたし。もうだめなの。おれだって。ようやく行為を終えたころには夜の七時半。そろそろ帰らなきゃな。だめ、泊まっていって。もう離れないで。でも、お母さんはなんて言うかしら？　明君の両親だって心配するはずだし。今夜は我慢する。そうだな。

セイラは明君が帰った後、びしょびしょに濡れているシーツを洗濯機で回した。今夜中には乾かない。替えのシーツはなかった。だけども、彼女はそれでもよかったし、なんなら茶の間で寝てもよかったくらいだったけども、なんとなしに母親に顔を合わすのが嫌。行為を終えた後の正気が抜けた顔を見られたくはなかった。

受験は、セイラ、秋ちゃん、明君、みつる君ともに合格した。合格発表の日、秋ちゃんとみつる君が抱きしめあっているのが印象的。悔しくも見えたし、悲しくも感じた。明君はセイラの曇った表情を見て、何でうれしくないんだ？　と訊いてきたが、それについて彼女は答えなかった。セイラは一生懸命に明君でごまかそうとした。駄目。

春先は雨が多い。脳天はずだんだ（ぐづつくよりも暗い光景）ようにして雨雲が広がっていたセイラは、まいにちまいにち号泣した。嗚呼、こんなはずではないのに。でも、果たして明君と別れたところで、わたしにはみつる君を射止める余地はあったかしら？　自問とした結果はやはりぐづついた空模様。どちらにせよ縁がなかったのだわ。そう諦めるしかなかった。高校進学とともに秋ちゃんはみつる君と交際した。その事実について、時折、目を背きたくなる。けれど、セイラは彼女に対して敵対心を抱くことはなかった。そうでもない。

毎日がとても苦しくて仕方がない。嗚呼、みつる君。みつる君。心でつぶやく。出てくる表情は明君。いま、まじまじとセイラの顔色をうかがっている。おい、だいじょうぶか？　う、うん。だいじょうぶ。なんでもないから。ならいいけど。

わたしは明君。秋ちゃんはみつる君。やがて親友同士のすれ違いを見せる。高校二年へ上がるころには、セイラと秋ちゃんの関係は遠のく。しかし、ふたりは懸命に散り散りになることを嫌った。いやよ！　そんなのぜったいにいや！　地団太にしてみる。だけども糸が切れた凧のように、遠く消えてゆくようでもあった。親友とは、はかない。ひょんなことから関係がどんどん崩れてゆく。それは友達という一般的なつながりよりも、恐ろしくもろいかもしれないということに、セイラは気づかされたのだった。高校一年の時。

「ねえ。じつはいうと、きのうみつる君と初体験したの」

えっ――？　セイラは微動だにした。そんな、そんなまさか。何故そんなことをわたしに言うの？　ひどい……。頭をよぎったが平然を装う。そう……。それで？

「みつる君、凄いたくましいの。なかなか入らなくて大変だった」

この女はなんてことを口にしているのだろう？　腹立たしくもある。けれど、しかたのないことだものね。わたしは彼女の親友であり、彼女もわたしにオープンだわ。隠し事はしたくないものね。

「入れて三分くらいで、彼、逝っちゃったの。おかしいでしょ？　三分よ！」

「そう……」
「それでね、彼って酷いの」
「なにが？」
「顔に精子掛けられちゃって化粧が台無しになっちゃったの。ひどいでしょ？」
「そう……」
「え？　おかしくなかった？」
「ううん、おかしな話だわ。でも笑えないかな……」
「ああ、ごめん！　そんなつもりではないの。そっか、セイラも好きな人だったんだものね。ごめんなさい。もう彼の話はしない。ほんとうにごめんね」
「いいの、きにしないで」
セイラは思う。酷い女、酷い女。いっそのことあなたなんかジャンクハンバーグになってぷよぷよに太るがいいわ。それでね、風船みたいに空の彼方へ飛んでゆくの。あなたはまるで醜いアヒルちゃんだわ。そうよ、あなたはアヒルなの。アヒル肉ののジャンクハンバーグよ。誰がそんな代物たべると思って？　いいえ、ちがう。あなたにはもったいないの。みつる君はれっきとした人間なのだもの。釣り合いが取れないじゃない。いいわ、代わりにわたしが食べてあげる。みつる君を、彼の全てをあなたから奪い去るのよ。
「ねえ、どうしたの？　機嫌が悪そうだけど……？」
秋ちゃんが怖そうに言う。なんですって！　まだわからないの？　アヒルハンバーグってどうしてこうも頭が悪いのかしら？　わたしは怒っているの。許されないはずのあなたがみつる君のアメリカンビックバーで処女を喪失しただなんて、そうなこと、そんなことあってよい筈がないのだわ。チャンチャラ笑えちゃう。だっておかしいでしょう？　あなたのアヒルサイズでは膣が引き裂かれるだけじゃない。あなたの適正サイズは鳥獣類ですものね。当然だわ。三分だとかあなたはいうけれど、三分も昇天したアヒルなんて気絶というかショック死状態ではないかしら？　それなのにあなたはこうして生きている。まだまだみつる君の白い淡泊な汁を飲もうとしている。そんなことはさせないわ。いいえ、絶対に許しません。だって、彼の精子はすべて私の口の中へ注がれるのだから。そうよ、彼を滅茶苦茶に精根疲れ果てさせるの。生気を搾り取るのよ。出来ないとでも言うのかしら？わたしには自信があるの。あなたとは違う。だってわたしは人間ですもの。れっきとした人間なんですものね。
「セイラ、なんかこわい……」
秋ちゃんがつぶやく。セイラは言われてハッとした。
そうよね、親友ですもの。わたしったらいけない子。本当に醜いアヒルだわ。秋ちゃんはとてもいい子。そしてかわいい子。わたしなんて馬鹿みたいにやきもち焼きで、女々しくて、そしてとってもずだんだにした心を持ち合わせたジャンクハンバーグなのよ。すべては幻。ほんとうはわたしこそ人間ではないのだわ。酷い女。酷い女。
「ごめんね、秋ちゃん……」
「ううん、いいの。わたしこそ、ごめんなさい」
――なぜ謝るの？
セイラはなんだか頭に血が上りそう。必死でこらえる。落ち着いた。いま、海辺で話をしている。彼岸の過ぎた秋口。もうすぐ母の遠い従弟から干し柿が送られてくるだろう。それを食べるのが毎年の楽しみ。太陽の日差しは弱い。日暮れに差し掛かっていて、もうすぐ黄昏時を迎える。今まさに山中奥へと落陽しかかった。広い上空も秋色に染まりを見

せつけている。
「セイラさ、わたしたちずっと親友だよ」
「それなのだけれど……」
「だけど？」
「わたしたち、少し距離を置いた方がいいのかもしれない。お互いの彼氏のために」
「どうして？」
「わからない。でも、わたしたち親友だけれど、今は距離を置きたいの」
「それってセイラだけの望みじゃないの？　本当は彼氏とか、そんなの関係なくて」
「秋ちゃん、わかって。私も彼のこと好きだったのよ」
「それなら、もう話しないって約束したでしょ。でも、わかった……」
「ごめんね。少し整理ついたらわたしから連絡するわ」
　確か、あのころからだったわね……。高校二年のセイラは思った。いま、明君と一緒にあの海辺で散歩を楽しんでいる。寒々とした辺りにロングボードの人影がひっきりなしに見える。ここはダンパーの波がロングに押し寄せるポイントとして有名。冬になると移動式パーラーが何件か軒を連ねる。ハンバーグ、タコ焼き、体の温まるものは色々あった。明君とセイラのカップルもパーラーへと歩む。ホットドックとスープを選んでお金を払った。そういえば、明君とはあまり回数をこなしていない。セックスの話だ。セイラは何だか秋ちゃんの話をあのときに聞いてからというもの、すっかりと明君のことなど眼中になかった。第三者のように感じた。それについて彼は気が付いていたに違いなかったが、何も言ってこなかった。それがまた申し訳なく思う。
　――ねえ、わたしたち別れましょう。
　これで何度目だろう？　しかしながら口に出しては言えなかった。セイラは性に対して億劫になったわけではない。れっきとしてオナニーの数は増えている。それは毎晩のように潮を吹いていた。わたしは淫乱女。痴女なの。ねえ、明君。ほんとうはわたし変態なの。そんな話をできるはずもない。只、明君では物足りなさを感じた。何かが劣っているように思ったのだ。それはなに？　そう、それは相思相愛のセックスよ。わたしは明君の事、本当はもう好きではないの。でも、でも……。
　やがて黄昏時を迎えると、明はキスを要求してきた。とても浅い口づけを軽くかわしてその場を上手くやり過ごす。できなかった。彼が舌を伸ばして彼女の紅舌へと絡めてくるのだ。い、いや――！　でも、悪くはない。セイラは心のどこかで、その目覚めに気が付いた。わたし、もしかしてマゾヒストなのかしら？　でも、それでも時々は自分からリードしてみたいとも思う。しかしながら、どうやってその行動を起こせばいいのかはわからない。夢中に一生懸命リープキスをしてくる明君を押し倒して、それからたくましい男根を思いっきりすっぷればよいのかしら？　できない。ねえ、明君。わたしね、今だったらこの場所ですぐにセックスしてもいいと思っているの。さあ、砂浜の上でわたしを裸にして、そして、抱いて……。
　彼はとうとうアクションを起こした。キスをしながらセイラの胸を触ってくるのだ。思い切りよくもみしだかれる。嗚呼、感じる。感じちゃうの……。いいわ、明君。それじゃあ服の中に手を入れて。言いたかったが発せない。だがしかし、彼にはそれが伝わった。生で胸を触ろうとする。抵抗はしなかった。逆にブラのホックを自ら外したくらいだ。この行為を目撃している海の男ら（陸に上がっているサーファー連中）は比較的多かっただろう。見られても構わなかった。二人は今、無我夢中で獣と化していたのだから仕方がな

い。もうだれ一人とて止められるはずがなかった。明君はとうとうセイラから服を取り上げた。ぷるんと弾力のある豊満な胸が顔を表す。桃色の乳首ははずかしそうにしながら勃起していた。それを愛おしくすっぷる彼。はあん――！　もう止まらない。逝くまで行くしかないのだわ。彼の男根で。彼のテクニックで。そしてみんなの前で潮を吹くのよ。すてき……。痴女、セイラは覚醒したように性へ目覚めた瞬間。わたしは淫乱女なの。酷いスケベ女なのよ。さあ、明君。マゾヒストの私を素っ裸にして！　そして、入れてっ――！

「おい、おい、セイラ。大丈夫か？」

あ、ああ……。言われて我に返る彼女。今見ていた光景は妄想の世界だと気がついた。まあ、なんてわたし、はしたないのでしょう。でも、神様聞いて。わたしね、それでもいいと考えていたの。みんなが見ている前で、砂浜の上でセックスをしてもいいってことを。それなのに明君たら奥手で何もしてくれない。いいえ、それは違うわ。これまでに拒否していたのは、わたしのほうですもの。我慢しているのはよっぽど明君の方だわ。ごめんね、明君。もうわたしのこと好きにしていいのよ。

「なあ、セイラ。キス……しないか？」

「うん」

長いことふたりはディープキスを続けた。舌をからめて、唾液を転がして、濃厚に、濃密に、接吻をした。黄昏の海岸もやがては闇夜へと移り変わる。月は出ていない。今日は新月。いけない、もう帰らなきゃ。そうだな、遅くなっちまった。かえろう。いやよ、でも帰りたくはないの。どうして？　どうしても。それならどうする？　いえ、やっぱり帰りましょう。ここでは何もできないわ。人の目もあるしな。そう、そうよ。

街灯の明かりを頼りにしてセイラと明君は歩いた。いま、手をしっかりと握りあっている。その暖かさはこの冬への挑戦状のような、逆に利用しているような、そんな気がした。やがて腕を組み、寄り添い歩むふたり。大人へと変わりゆく高校生の中に、れっきとしてセイラと明君は居た。とても甘く匂いを発して存在していた。

＊

花々のかほりが漂うころ、セイラは大学へ進学せずにいた。

明君の方はというと、プロの野球選手をあきらめて宅配関係（クロネコヤマト）の職へと就いたらしい。それについてあまり相談を受けなかったものだから、あまりピンとくるものが無く、ああ、そう。だけで会話が途切れてしまった。

彼女の就職先はフランチャイズの衣料品店。その店舗の規模は、町で少し大きい方である。場所は目立った大道路沿いに面していた。

慣れない仕事に時が経過するのはとても遅かった。休日シフトは互いに合わせている。毎週月曜日がそれ。今日はその曜日である。明君の車へ乗車し、少し遠い繁華街へと出かける。ときどき気晴らしにバスを利用する。デートコースはほぼ決まっていて、東京ほど都会ではないこの県は、大人のカップルで楽しむ場所というのが、しごく限られていたものだから、仕方がないと言えばそこまで。それでも二人にとって飽きることなどないほど楽しむことができた。とても濃厚でいて淡い肉体を二人は欲していた。それについて互いに否定などしない。デートの仕上げは、毎回、ラブホテル。

ねえ、きょうは思い切りよくヴァギナを舌で責めて。嗚呼――！　狂おしいほど淫らに、そして濃厚に、ふたりは大人のセックスを楽しんだ。ときどきホテルのテレビでＢＳ放送

を確認する。もちろんアダルト番組を、だ。セックスの勉強をしたかった。
休憩三時間は四千五百円。した回数は二回、風呂場と回転ベッドで。有線放送はいつものイージーリスニング。ときおりハードコア。ミラーボールは踊るシャンゼリゼ。それらへ同調するように、裸の二人は乱れに乱れた。ホテルを出る。
まだ親元から独立していないセイラと明君の住まいは近い。車を使わない日は、ラブホテルから割り勘でタクシーを利用した。セイラの家で下車する。彼はここから徒歩で帰っていった。見送りはいいから家に入んな。彼の口癖がたまらなくうれしかった。
次の日。夜、明君から電話が掛かってきた。いつものことである。セイラは今夜も当たり障りのない会話を楽しむつもり。とにかく職場の文句は言うまいと決めていた。しかしながら話すことと言えば、やはり職場のことしかなくて、新入荷の品やセールの話などをする。
「なあ、なんか二人で趣味はじめてみないか――？」
趣味？　ああ、それはいいかも。でも、お金のかかるものはダメよ。わたしたち、お金持ちではないもの。それで？　なにがしたいの？　じつはいうとさ、写真はじめてみたいんだよなぁ。写真？　ああ、写真撮影。え？　お金かかるのではないの？　だめよ、そんなの。いや、それが安いんだよ。”チェキ”ってしってるか？　チェキ？　ああ、セイラはパソコンもってないんだよな？　今はやっているデジカメのポラノイドカメラだよ。ポラノイドカメラって？　即席カメラ。幻像しなくていいやつ。ああ！　カメラ屋さんに行かなくても大丈夫な奴？　そうそう！　で？　そのカメラいくらするの？　一万円そこそこ。いやさ、結構、画質とかもいいんだよ。安い方だと思う。やってみるか？　オーケーなら今度の休みに”カメラのキタムラ”へ行ってみようぜ――。
迎えた休日、カメラのキタムラへセイラと明君は向かった。住まいの町にはこの店舗がない為、先週と同じく少し遠い繁華街へとバスで流れた。この日、気分転換に乗用車は使わなかった。小刻みに揺れるバスの中、彼女はなぜにカメラを始めたいのかを訊いた。理由はあいまいだが、どうやらコンビニエンスストアで見かけたフォトブックが目に留まったからだ。と言う事には、納得がいった。
「”つぎはー、春日部城跡公園前ー。春日部城跡公園前ー。”」
アナウンスが流れる。繁華街へたどり着く前のバス停だ。今度、ここを散歩しよう。と、明君は提案してきた。ここは世界遺産に登録されている。見応えは十分だし、写真撮影にはもってこいだったものだから、セイラは気楽に合点した。再び景色は流れて繁華街へと着く。
バスはいい。ほぼ時刻通りに着く。車で繁華街だと渋滞でほとほと疲れるのだ．バスにはバスレーンという味方がいる。
セイラと明君は下車した後、ひとまず適当にテナントのトイレへと駆け込んだ。コンビニエンスストアは歩いて少し距離がある。テナントのショップは喫茶店だったので、気長に紅茶をすすってから出た。真っ白なショートケーキが美味しかった。その勘定は明君が取ってくれた。合計二千円と消費税。彼は”ごちそうさま。”と羽振りよさそうにしてレジ係へ支払っていた。セイラも会計へ言う。ごちそうさまでした。
広いアーケードへ入ってから二人はようやく手をつないだのだが、なにせ大通りの歩道は狭い。大手を振って歩けやしなかったものだから仕方がなかった。やっとお手々つなげたね♪　そう子供のようにはしゃぐセイラを見て明君はどう思っていたのだろうか？　そんなことは考えもしなかった。

アーケードを抜けて左の裏道へ曲がる。その先を出たところが繁華街の中央となっており、人だかりがあった。平日だと言うのに何処からあふれてきたのか？　そんなことは思いもしないが、只、似たような業種の人間ばかりだろうと言う事は、おおよそ見当がついた。カメラのキタムラに着く。

店内へ入った。ホール内に、いらっしゃいませ！　いらっしゃいませ！　とセールス音楽が流れている。それを聞くとなんだか〝来たな〟という気がした。明君が係りに訊く。〝チェキはありますか？〟ありますよ。こちらです。案内されたショーケースには確かにチェキがあった。ここでセイラは〝チェキ〟というのはボディーカラーが豊富だと知る。その中でもアイボリー色がいちばん目に留まった。レンズの周囲は焦げ茶色。彼の方はクラシカルな一眼レフデザインのやつを欲しがっている様子。互いに迷いがなかったためか、選択してレジへと向かうのに、あまり時間を必要としなかった。あっけない買い物と言えばそこまでかもしれない。もちろん機能については色々とカタログなどで調べたわけだが。専用フィルムは二本をサービスでもらえた。さっそくこれから撮影である。

買い物を済ませて繁華街へと出ると、明君がおもむろにセイラを被写体にしてテスト撮影した。「うん、やっぱりこいつはいいや♪」満足の表情を浮かべて彼女に写真を見せる彼。まるで子供がおもちゃを手に入れたような、そんなはしゃぎぶり。「わあ！　凄いきれいに撮れてる♪」セイラもはしゃいで相槌を打った。よし、城跡公園へ行こうぜ！　もう今すぐに行きたいんだ。そうね、いきましょう♪　お花撮りたいし。お花？　夏だし、あるかなぁ？　あるわよ、きっと♪　そうか？　そうよ♪

本日は軽やかな晴天なり。心はウキウキ和む。実に雲一つなく日本晴れ。真夏の陽光は痛いくらいに露出した肌へ差さっていた。街路樹の葉が西風でゆらゆらとかすかに踊っている。バイク、タクシー、乗用車に作業車両から、ひっきりなしにクラクションが鳴っていた。下りのバスに乗る。

車内はエアコンが利いていて快適そのもの。空気はドライで、汗ばんだシャツが一気に乾いてゆく。それと同調するように喉の渇きも激しかった。セイラと明君は自販機で買っておいたアクエリアスのプルタブを開く。そして飲んだ。じゅわっと身体の隅々まで行き渡るこの清涼感ときたら、たまらなく至福の時。

「〝つぎはー、春日部城跡公園前ー。春日部城跡公園前ー。〟」

下車すると、そこは公園の駐車場付近で、石畳の続く奥中へとくぐってゆかなければ曲輪（くるわ。〝郭〟とも書く）は見えなかった。この城跡は非常に古い代物で〝掘り〟がない。平和な時代に建造されたのだろう。そういう話を聞いたことがあった。第一の郭が見えた。歩いてきた石畳はあたかも城門へといざなうようにしてくねっている。それを抜けた。第二の郭、第三の郭へと上がってゆく。道中、〝火の神がまつられている〟とした案内標識を観た。むかしは火を起こすのが一苦労であったために、こうして年中火を焚いていたと書かれてあった。油はクジラの背脂である。第四の郭には殿舎跡があって、最上段の第五の郭に御嶽があった。御嶽からは西海岸が眺望できた。

おおまかに見学を終えたのち、撮影である。さて、何処で写真撮ろうか？　何処を撮ろうか？　色々相談した。けっきょくのところ、御嶽からの眺望と第一の郭から見上げた景色のみ写真を納めて、あとは公園敷地内の散歩道でお互いに写真を撮りあった。心霊写真うつってないよな？　嫌なこと言わないで。だってさ、ここ、そういうところだろ？　なんか心配だよな。だったらなぜここに来ようと言ったの？

「圧倒させられるような城壁の緻密さだとか、そう言う感動はないの？」

しまった――。セイラはそう思う。ついひとこと口走ってしまった。いけない……、わたし。でも、神様きいて。明君たらね、ひどいの。彼はまるで城跡公園に興味などなかったみたいにわたしばっかり撮るんです。背景に少し城壁だとか火の神だとか御獄なんかをね、撮っているの。メインはあくまでもわたし。しかも明君ったらね、なんだかカメラの視線がわたしの胸を中心にしているような気がするの。そう、それはまるでセイラの胸でいたずらする助平ペニス君。マシュマロにポテトを挟んで食べようとしているの。そう、マシュマロポテト。酷いでしょ？　最後には私の口めがけてチーズホンデュを注ぎこむのよ。まあ、なんて生臭いんでしょう。それでね神様、マリヤ様。おしまいなの。彼はそれだけで満足するのよ。わたしの身体はどうでもよくて？　わたしの立場ってなんなのかしら？　巫女？　性奴隷？　トイレットペーパー？　ふざけないで！　わたしだって一人の女なんです。ほしいの……。とってもほしいのよ。膣に、ヴァギナに。太い太いアメリカンポテトが欲しいのよ！　嗚呼、どうしてこうなったんだろう。わたし、ペニスなしじゃ、もう生きられない。耐えられないの。だってそうでしょう？　とってもとっても気持ちが良いのだから。そして美味しい味がするんですもの。匂いも臭くて好き。でもね、お風呂はきちんと入りたいわ。だって彼は酷い臭いが嫌いなんですもの。もし、わたしが生理だったらと思うと本当に怖い。こんな血生臭いヴァギナへおちんちんを入れるなんて、なんてことなのかしら？　神様、その場面の機会だけはどうか与えないでください。セイラはハッとした。いけない、また妄想しちゃった。

「今日はなんか楽しくて疲れたな。ラブホテル、どうする？　やめておこうか？」

どうして――？　帰りのバスの中、セイラは露頭を彷徨った。どうしてどうしてホテルに行かないの？　わたし、思い切りよくセックスがしたいの。ねえ、明君。このわたしの気持ちが伝わっていないの？　どういうこと？　ねえ、どういうことなのよ――！

「うん、今日はわたしも疲れちゃった。お家に帰りましょう」

「家に着いたら電話するか？　電話もやめておこうか？」

「うん……。そうして」

なんだかマンネリ化した行為をごみ箱へ捨てたような気持ち。おたがい飽きていたからこそ写真に走ったのかもしれない。そう考えると、この先に見えてくるものと言えば、やはりヌード写真を撮ると言う事。セックス写真を撮ると言う事になるのだろうか？　もっともっと過激へと走りたくなる。もはや理性は吹っ飛ぶかのようにして、その前触れを知らせているかのよう。

彼女は家まで送ってもらった後、直ぐにシャワーを浴びた。それからオナニーを浴槽の中で行う。お湯加減は熱めの四十二度。火照りたかった。火照っていた。汗を十分に放出して逝きたいところまで、逝ける場所まで、ザナドゥーの世界を体感したかった。それはどうして？　わからない。でも、わたしはもう大人なんですもの。理性を破壊するのはもはや仕方のないことなのかもしれない。ここまで来てしまえばなんだって恐怖を感じなかった。嗚呼、明君。わたしね、あなたに犯されたいの。犯したつもりでわたしを滅茶苦茶にしてほしいの。だってそうでしょう？　わたしは、わたしは獣の雌なんだもの。もうとまらない。この指がとまらないの。嗚呼――！　逝くぅ――！　はあはあはあと息を荒くする。のぼせたみたい……。でなきゃ……。

今夜は早めに寝ることにして早々とパジャマへ着替えたセイラは、一度だけ明君に電話を掛けようか悩んだ。でも、何を話せばよいのだろう？　今日はこれと言って話題がない。あるとすればデートの話だ。そう、そこで考えたヌードの件。やだやだ、わたしったら変

態じゃないの。どうしてわたしからヌードになりたいだなんて話さなければならないの？ おかしいわよ、ぜったい。

翌朝からいつもの一週間が始まる。仕事、電話、仕事、電話の毎日。社会人って本当につまらないものね。それでも生きて行かなきゃならなくて、なんだか矛盾も生じるけれど、しかたのないこと、そう、しかたのないことなのよね。嗚呼、まいにちプライベートプールで明君と浮かびたいな……。それは夢なのかしら？ それとも現実路線？ いえ、只の幻でしかないかもしれない。でも、いつかは楽がしたいわ。思いっきり楽しむの。スローセックスライフを。うふふ♪ わたしったら、またセックスのことばっかり考えてる。おかしな人♪

セイラは眠った。昏々と、だがしかし意識のある方向へといざなわれているかのように。それは夢だ。まったくの夢なのだ。それはザナドゥーの世界。泉があって芝が生い茂る川べり。裸の王様と裸のお姫様。いや、獣のままのオスとメスでしかない。ホモサピエンスなど存在しない世界だ。体毛に包まれた姿。それはまるで狐のよう。コンコン、コンコン。じゃれあう。言葉などない。鳴き声だけ。コンコン、コンコン。尻尾を振る二匹。キャッキャッとはしゃぐ子供のようにお互いくるくる回る。愛情表現。突然、言葉が出る。人間へと進化した瞬間だ。体毛が剥がれ落ちるとそいつは哺乳類。サルでもない。ゴリラでもない。容姿の綺麗な人間なのだ。嗚呼――！ 抱き合う。抱き合う。目が覚める。

起きた時、彼女はシーツが濡れていないか確認した。漏らしていないわね、よかった。今日はなんて目覚めがいいんでしょう。素敵な朝だわ。パジャマのままで食卓へと向かう。母は図書館のアルバイトで出ていた。セイラのほうが仕事へ行くのは遅い。だいぶ後。書き置きと朝食が用意されている。それをみつめると、なんだか申し訳ない気持ちでいっぱいになった。やっぱり一人暮らししたほうがいいのかな？ でも、わたし一人子だし、将来はお母さんの面倒をこの家でしなきゃいけない。いつまでも子供じゃないものね。そうよ、手がかからないように自分のことは自分でするようにしなきゃ。

今週は秋服への品替えで忙しい。夜はほとほと疲れ切って、なるだけ電話での会話はしたくなかった。一人の時間がほしいから。だけども、無料電話アプリを受けた。携帯なので逃げ場がない。仕方がないといえばそこまで。いつもの会話。今日の仕事、明日の予定に今夜の夕食。下らなすぎた。でも、それでも満たされるこの気持ちはいったいなんと呼べばよいのだろう？

休日は観光名所の写真撮影。地元の行けるところはすべて回ったし、あと残されているとすれば、記憶をたどる旅くらいのもの。その旅とは、過去の風景を写真に収めるということ。たとえば小学校などだ。学校はやめておこうぜ。ほら、校庭で生徒がうるさいだろ？ そうね、なにしているの？ だとか言って、集まってきそうだものね。それじゃあ、これからどうする？ 海岸の写真でも撮りにいくか？ うん。でも、少し休みたいし、パーラーで何か買ってから砂浜に座りましょう。写真はそのあとにしない？ そうだな。今日は歩き疲れたし、そうしよう。

波がややダンパー状に秋口の白浜を駆け上がると、上空を映し出す反射光がその表面に思い切りよく広がった。今日もロングボーダーが沖のほうから一直線に波乗りしてくる。中には立った状態でパドルを漕ぎ波乗りする者もいた。最近はやりなのかしら？ セイラは口にしたが、明君は、あまり関心が無さげだったものだから、彼女は訊いたことを後悔した。北風がすこしだけ冷たく感じる。二人は肩を寄せてホットスープを飲み干した。

行く当てがないというのはこういうこと。セイラと明はこれから何処へ写真を撮りに行

けばよいのか悩む。もちろん、海岸で記念写真を撮った後の計画だ。セックスは昨夜のラブホテル宿泊で済ませていた。とりあえず、散歩楽しんでから考えることにしましょう。そうだな。

記念写真を撮り終えて海岸線上を散歩している時。

「ねえ、わたしのこと好き？」

突飛な発言はしたくなかった。だけども、決着をつけるなら今だと思った。その決着とはなんなのか？　明君は困惑したように訊く。「どうした？　いきなり」と。

「ううん、なんでもない……。でも、学生のころはどうだった？」

セイラの言いたいことはそれ。これに終止符を打たなければ、いつまでもヌードになれないと決め込んでいたから。

「よけいにおかしなやつだな？　なんなんだよ？　ずっと好きだけど」

「わたしはね、わたしは浮気してたって言ったら？」

「え……？」

「わたしね、学生の頃、みつる君のことが好きだったの。秋ちゃんの彼氏。でも、ちがうの。きいて、同じくらい明君のことも大好きだったから」

「なるほど、そういう浮気か……」

「ごめんね。今はあなたのことだけ愛してるから……、だから許してくれる？」

どうせ彼は許すでしょう。そして次に出てくる言葉はあれなのよ。きっとそう。

「写真の前でヌードになってくれるか？　それでアイコにして許すよ。できるか？」

やっぱり――。セイラはその言葉こそすべてだと思っていた。彼は今まで我慢していたのよ。ずっとずっとわたしの裸を撮りたかった。だから写真を始めた。そうなのよ。わたしはね、とてもうれしいの。だってどうしようもないくらいに辱めを受けたかったんですもの。わたしはマゾヒスト。性的快楽はもはやここでしか手に入らないわ。でもね、待って。こんなに簡単に裸になってポーズをとるのだなんてやっぱりおかしいじゃない？　わたしはもう少し自分を大切にしておくべきなのかもしれないわね。けれど、もういいじゃない。カメラの前で裸になっても。それで？　それでどういう風にポーズを決めればよいのかしら？　胸をもんだ状態？　股を大きく開いた状態？　それともあなたのペニスを咥えている写真かしら？　まあ、なんてひどいさまなんでしょう。そんなことできないわ。だって恥ずかしいじゃない。一生残るのよ。その写真は一生ものなの。もっとエレガントなポーズってあるじゃない。そう、それでいいのよ。わたしは美術品。きもちは芸術の都、パリジェンヌ。うふふ❣　おかしなひと❣　私なんか一般的な容姿しかしていないのに、そんなに好きなのね❣　わたしが、わたしの裸体が。

「それで？　脱いでくれるのか――？」

あ、ああ……。我に返る。どうしよう、そんなことといけない。駄目よそんなこと！　でも、撮られたい。思い切りよく涎を垂らしてペニスをしゃぶりつくところを撮ってほしいの。ねえ？　わたしって淫乱でしょ？　痴女って言って。おねがい……。

「わかった。今回はなしな――」

え、ええ！　なんですって？　わたしはいいの。いいって思ってるじゃない！　何をいまさらそんなこと言うの？　これってお預けプレイというやつかしら？　ひどい！　ひどいわ、明君。あなたにそんな趣味があるだなんてとっても嬉しい。うれしい？　ちょっとまって。おかしいのではないかしら？　そんな考えおかしいじゃない。わたしは今すぐにでも脱げるの。おねがい！　脱いだわたしを撮って。大股を開いているわたしの膣を撮っ

てちょうだいな。さあ！　はやく洋服を取り上げて見せて！　嗚呼……、わたしおかしくなっちゃいそう。そうよ、もう変態なの。変態痴女はあなたの目の前にいるわ。セックスに目覚めた雌豚よ。わたしは豚でしかないの。獣というには図々しいわ。わたしはあなたの家畜。巫女なのよ。さあ、お好きにしなさいな。

「何、一人でぶつぶつ言ってんだよ？　大丈夫か――？」

え、ええ……。大丈夫、気にしないで。

「今日はもう帰ろう。あとで電話するよ」

「あ、そう……、電話待ってるね」

「うん。いこう、送っていくよ」

「いつもありがとう」

夜、電話がかかってきた。もしもし？　おれ、あきら。もしもし？　わたしよ。セイラ。なあ、きょうはごめんな？　ああ、あのこと。別に怒ってないけれど？　そうか、ならいいんだけど。気にしすぎよ。わたしだって……。え？　い、いえ、なんでもないわ。ねえ、今度、何処へ撮影行きましょうか？　そうだなぁ、ほとんど見て回ったよなぁ？　あるとすれば……。いや、なんでもない。もうこのことは忘れてしまおう。やだ？　またヌードのこと考えていたの？　エッチなんだから。ごめん。そんな人は知りませんよ。本当にごめん！　わかったわ、許してあげるね♪　うふふ♪　あはは。なあ、今度、遊園地行ってみないか？　ああ！　そこはまだいってなかったわね？　いきましょう♪　それじゃあ約束な？　ええ。電話を切った。

セイラは携帯電話をテーブルへ置くことも忘れてしまって一人立ち尽くした。愕然としていた。嗚呼、こんなはずではなかったのに……。わたし、わたし、ほんとうはヌードになりたいの。いますぐに被写体になりたい。勃起した乳首を撮ってほしいの。恥毛を剃った秘部を思い切りよくアップで撮ってほしいの。その写真は明君のもの。どうにだって好きに調理すればいいわ。でもね、誰にも見せてほしくないの。だって、特別なんですもの。あきら君は特別な存在。だからいいのよ、撮っても。わたしはね、わたしはヴィーナス像のように美しく演じればよいだけ。素っ裸で、写真の前で舞うのよ。そして昇天のあまり潮を吹きつけるの。あきら君の顔面へ。うふふ♪　それはちょっと言い過ぎかしら？　でもでも、わたしはそれくらいに興奮して、きっと赤面してしまうのよ。素敵ではないかしら？　これではまるで処女よ。そう、処女になりきってみせるの。いいでしょう？　明君。

セイラはたまらずオナニーをした。もはや世界はザナドゥーへと誘われている。頂点へ達するのに時間を必要としなかった。嗚呼――！　逝くっ――！

条々動物園は町はずれに存在していた。隣接する小さな遊園地。遊具などは湿った海風による塩害で多少なりと錆びつきが目立った。敷地の中央には観覧車が聳えており、そのゴンドラに乗るとガラガラと音を立てて広い眺望を確認することができた。動物園と遊園地は同所有主なのだが、経理上の問題からか、入場料をそれぞれ支払わなければならず、それに対して愚痴る客もいた。観覧車の次は決まってメリーゴーランドである。非常に高級な化粧が施されたこの遊具は、遊園地の中でもなかなかの人気商品だったために、搭乗券は割と安値であった。客はこぞって記念写真を撮っている。セイラと明君もその中の一組。次はゴーカート。屋根のあるカート場の路面はオイルが染み込まされており、走る車両ともどもスリップするのを悦びながら運転していた。それが売り。スピードは遅めなのだが、道幅が狭く密集しているためか、それでも早く感じた。壁や他車へぶつかるときは勢いよくどーんと衝突したが、首へ負担がかかるほどではなく安全に楽しむことができた。

少し屋台で休憩する。ドクターペッパーの上にソフトクリームが乗ったアイスクリームを食べてくつろいだ。動物園へ移動する。

動物園は正門のみならず、遊園地内からも中道を通って入場することができた。そこから入ると真っ先に見えるのは、フラミンゴが泳ぐ池である。飼育している野鳥が逃げないように周囲へ金網が施されていた。その見た目が悪く、写真を撮影する者はあまりいなかったのだが、セイラと明君はかまわず記念写真を撮りあった。奥へと進む。サル山で動物せんべいを放ると、サルはよろこんで取りに来た。かわいいね。ああ、そうだな。ボスざるは誰だろう？　あいつじゃないのか？　そうね、一回り大きいもの。うん。

「あら？　セイラ――！」

聞き覚えのある懐かしい美声がセイラの耳に届いた。そうだ、その声は！　秋ちゃん――！　とても久しぶりな彼女。秋ちゃん、どうしてこんなところにいるの？　大学の講義は？　ううん、単位取ってるから大丈夫なの。明君もこんにちは。こんにちは。あれ？　そうそう、みつる君も一緒なの。いま、動物せんべい買いに行ってるから。そう……。どう？　しごとのほうは。ええ、やっと慣れてきたところ。わたしったら、まだまだなの。へぇ、結構大変なんだ？　うん。秋ちゃんは？　大学どう？　うまくやってる？　うん、もう就職の話で盛り上がってるくらいよ。へぇ。

今日はよく晴れている。夏の終わりころに差し掛かった日差しは幾分やわらかい。それでもヒリヒリとした暑さは実感できる。大学も夏休みというものがあるのかしら？　ふと脳裏に浮かんだが、訊くのをやめておいた。だって聞いたところで何にもならないものね。逆に不快な思いをするだけかもしれないし。

「二人で会話でも楽しんで来いよ。俺はここにいとくから」

明君たら、余計な気を遣わなくてよいのに。わたしは秋ちゃんから離れたいの。ほんとうは口も利きたくないんだから。だってそうでしょう？　彼女は裏切ったのよ。わたしがみつる君のこと好きだって知っておきながら交際したの。でもちがう。それではまるで負け犬の遠吠えみたいでみっともないじゃない？　だから話しているの。そうよ、仕方のないこともあるものね。それよりも、みつる君が来る前にここを離れなきゃ。明君はその辺も考慮してくれたのかしら？　そうでもないわね。彼ったら単細胞の塊みたいなんですもの。そんなことまで考えないわよ。

「気を使ってくれてありがとう。それじゃ少し行ってくるわね」

「ああ」

秋ちゃんは明君へ会釈した。それから手を振る。セイラはそれがなんだか憎たらしく感じた。また奪う気なの？　と。

ふたりは園内をゆっくり散歩した。いろいろと話し込む。そのすべてが空白を埋めるような会話ばかり。秋ちゃんは何かを言いたがっている。セイラはそのことに気が付かなかった。次の瞬間である。

「わたしね、大学でたらみつる君と結婚しようと思っているの」

え――？　一瞬、セイラは真っ白になり、立ちくらみのような症状を発生させた。

なんですって！　結婚……？　みつる君と……？

突然の告白に、セイラの心中は絶望となった。どんどん心が落ちてゆく――。もう！　どうして？　どうしてなの？　みつる君は違うの。彼はあなたなんか眼中にないのよ。みつる君はわたしのもの。わたしの王子様なんだから！　でもちがう。彼は秋ちゃんという女性を選んでいるわ。なんということでしょう。そんなに彼女のくびれと顔面がお気に入り

かしら？　そんなみつる君なんか汚れた獣よ。クリスチャンの私にはふさわしくないわ。そう、秋ちゃん。そう言ってなさいな。あなたは結局、彼のペニスがお気に入りなのよ。みつる君はアメリカンビックバーですものね。でも、それは幻なのかも。本当はジャパニーズごぼうではないかしら？　いえ、ジャパニーズ人参くらいはありそうね。わたしの明君はね、ジャパニーズベーコンなのよ。あなた方はごぼうサンドにしかならないけれど、わたしと明君はベーコンにエッグがのっかったダブルチーズバーガーなんだから！　今に見てなさい。後悔するのはあなた方よ。今のうちに幸せのシンデレラを演じているがいいわ。

「セイラ、どうしたの――？」

ハッとする。い、いえ、なんでもないの。ごめんなさい。最近おかしいみたい。そう、それならいいのだけど。だいじょうぶ？　ええ、だいじょうぶよ。気にしないで。

「でもね、まだ子供はほしくないかなぁ？」

おもう。なんですって！　子供がほしくない？　どういうことなの？　それって、もしかしたらわたしに最後のチャンスを与えるってことなの？　それともこうかしら？　あなたがたの赤ちゃんだなんて、せいぜいごぼう抜きされるほどみじめな人生を送るからなの？　いえ、それはちがう。あなたがたはもったいぶってるだけ。本当は素敵な赤ちゃんが生まれるはずよ。なのになんて贅沢なのかしら？　そんなに自分の自由がほしいっていうの？　これじゃまるでわたしが惨めすぎるじゃないのかしら？

「社会へ出て所得が安全圏まで達するまではね……。ほら、初任給なんて知れてるじゃない？　それにわたしも家庭へ丸く収まるつもりもないし。専業主婦は嫌なの」

おもふ。専業主婦がいや？　ふざけないで！　あなたはみつる君をなんだと思っているの？　とんだ間抜け女ね。腹立たしすぎるわ。

「わたしね、彼でよかったのかなぁ？　そんなことも思う始末で。マリッジブルーなのかしら？　ごめんね、変な話しちゃった！」

思う。この女、一体、さっきからなんなの？　ゆるせないっ――！　感極まったセイラは、おもわずビンタを思い切りはたいて見せた。秋ちゃんはびっくりしたように目を見開く。なにするのよ！

「この泥棒猫！」

「なんですって！」

もみ合いのけんかになる。辺りがざわつきだす。それに気づいた二人は殴り合いをやめると、ふんっ！　とだけ発しその場から散り散りになった。明君のもとへ行くとみつる君がいると思いきや、いない。セイラはせかすように〝かえりましょう。〟と言って明君の腕をぐいぐい引っ張り動物園を後にした。

「秋ちゃんは？」

「しらない。途中で別れたから。ほら、みつる君を探しに行ったのかも」

「矛盾しているよ。それならサル山へ来たはずだろ？　どうしてセイラだけだったんだ？　まさか、喧嘩でもしたのか？」

「そうよ。彼女とはこれっきり。もういいでしょう？　この話はおしまい」

明君の愛車へ乗る。向かった先はラブホテル。入場口のボタンを押してシャッターを降ろす。ロック解除されたドアが開いて中へと入った。途端にムード系の音楽が小さく聞こえる。有線の音楽だ。明君はリモコンを両手に持っていつものやつへと切り替えた。今日は二人そろって風呂へと入ることにした。ジャグジーのお湯をいっぱいまで溜めるとバスク

リンを入れる。森林浴が楽しめるミントの香りというやつ。悪くない。ボディーソープを思い切りよく湯船の中へ。すると、たちまち泡ぶろ。裸になった二人はキスだけ済ませて広いバスの中へと入った。きもちよい時間。今日はゆっくりしたいな。セイラの言い分。早く忘れたいの。いいでしょう？

明君は何も返さない。その代わりとして、向き合った状態でつかる湯船の中、少しばかり彼女へいたずらをしてきた。きゃっ！　きゃっ！　言う。わざとだった。笑ってごまかすしかなかった。なにを？　みつる君のことを。

明君は乳首が好きだ。桃色の乳首がとてもすき。今回つまむのかな？　セイラの思惑は当たった。彼が手を伸ばしてから乳首をつまむ。そのやさしいちぎり方は、彼女へ性感の極みへと誘う。あん……。思わず発すると、明君はつよくつよく引きちぎった。嗚呼――！　痛さが快楽になる。こんな気持ちはなんなのだろうか？　やはりわたしはマゾヒストなんだわ。落ちてゆくのが大好きでたまらない人魚姫。さあ、強く激しくわたしの乳首をおなめなさい。すっぷられる。じゅるじゅると音を立てていやらしくしゃぶりつく明君は獣の雄。わたしはとっくに獣姫よ。さあ、はやくして。

ベッドインは静か。いつもなら押し倒されてる。彼はバスローブを着けたままペニスだけととびだたせた。さあ、舐めてくれ。セイラはほおばる。思い切り奥まで舐めまわす。舌を転がして先っぽをしゃぶりついた。仰――！　彼はうなった。

さあさあ、こんどはわたしのばんよ。バギナを思い切りよくしゃぶってちょうだいな。そうれっ！　バスローブを脱ぎ全裸になってみせる。明君も脱いだ。嗚呼、この筋肉、素敵……。それにたくましいおちんちん。まるで私好みよ。なめてっ！

明君はペニスを入れた。ジュクジュクに濡れたバギナは抵抗すら感じさせなかった。嗚呼、いいわ……。おねがい、出し入れして。嗚呼――！

仰――！　顔に、顔に出すぞ？　いいか？　顔だぞ！　ええ、いいわ。わたしの顔面を精子でいっぱいにして。嗚呼……。失神しそうだった。いくいくいく！　いっちゃう！　俺も逝くぞ！　いいか？　顔だぞっ！　嗚呼――！　神よ、我に力を！　マリヤ様、わたしに大輪を！　嗚呼――！　逝った。果てしなく遠くへと誘われた。力尽きた。途方もなく脱力感が襲い掛かった。逝った。逝った。

絶頂から気絶したセイラは夢の中にいた。ここはどこ？　わたしはだあれ？　そんなことどうだっていいじゃない。ほら、あそこをみなさい。清らかな泉がある。そこで水を飲むのよ。おいしいおいしい清水を飲むの。嗚呼、しごくおいしいわ。なんていえばいいんだろう？　とても冷たくて、ミネラルが豊富で、それでいて透明じゃない。そう、エメラルドブルーをしているの。なんて素敵なのかしら？　あら？　あちらから人が来る。だれだろう？　明君？　それともみつる君かしら？　はて、どうしてその名前がわかるの？　へんねえ。自分の名前はわからないのに……。そうか！　わたしはおとぎの国のシンデレラ姫。さあ、ガラスの靴を探さなきゃ。どうしましょう？　どこにもないわ。それよりもわたしったら全裸じゃない！　いやっ！　裸の男二人組だわ。どうしよう。犯されちゃう！　まって。そうよ、明君とみつる君ですもの。二人になら全然かまわない。素敵でたくましいアメリカンビックステーキでわたしをおつまみなさいな。そうよ、あなた方は下僕なの。ひれ伏せるがいいわ。なによっ！　ひどいじゃない。そうやってお預けプレイをして楽しむつもりなのね？　そうはいかないわ。ぜんぶわたしが食べちゃうんだから！　むしゃむしゃと食らいつくしてあげてよ。さあ、あーんしなさい。王子様、ちがうの。わたしは、わたしは、あなたの体がほしいの。そうよ、心ではなくてからだ。裸体をほおばりたくて

よ。むち打ちに耐えられるかしら？　そうれっ！　はうん♪
「おい、しっかりしろ。セイラ、大丈夫か？」
目を覚ました。めちゃくちゃな夢だった。思った。

＊

気が付けば、写真を始めてから五年が経過していた。リバーサルフィルムを保冷バッグに仕舞い込んでから今日の弁当を入れる。水筒の中身はポカリスエット。夏。海岸線の港へ寄ってから市民ビーチへ行くことになっていた。港は活魚店が構内にオープンしたばかり。それを狙っての撮影会。会といってもグループは二人だけ。明君とセイラ。他にはいらない。余計。
ふたりはチェキを卒業していて、いまでは一眼レフカメラをこさえていた。単焦点レンズは50mmと150mmの二本だけあればよい。150mmのほうにはソフトフォーカス機能がついていた。露出計は必須品。問題なくショルダーバッグに入れてある。抱えるバッグはふたつ。明君の車で行くので苦にはならなかった。
セイラはいまだにレンズの前で裸になることを拒んでいた。理由は明快。痴女の姿を記録に残したくはなかった。誰かに見られてしまったらおしまいだものね。わたし地元で働いているし。逃げ場所はいまさら探したくはない。わたしの居場所は地元ですもの。東京だとか無縁よ。いやだわ、行きたくない。明君が迎えに来た。
彼の車は旧式のワゴンR。銀色の車体がいかにも古めかしい。マフラーからはボボボと排気口のほかにも穴があいているような音がする。じっさいにあいていたのだろう。港町の車は錆びやすい。見たくれなんてものは必要なかった。走りさえすればそれでよい。アマチュアカメラマンらしい言葉。
活魚店は広い敷地面積だったものだから、それだけ魚の量も豊富である。アジにサバ、ブダイにアマダイ。それから天下を取ったようにして本マグロ。日本刀のような太刀包丁で解体ショーもやっている。電動ジグゾーでカシラやカマなども分断していた。カマトロは極秘中の極秘で漁師にしか手に入らない。
「おねえちゃん！　食ってみるかい？」
魚屋はマグロの中落ちを刺身でごちそうしてくれた。てんぷらにしてもおいしいんだよ。そうれ、一パック持っていきな。あそこに食堂があるだろ？　そこで調理してもらったらいい。直ぐすむ。ほんとうですか？　ありがとうございます！　お兄ちゃんにはこれな！　はい、ひとみちゃん♪　ええ？　めん玉食べられるんですか！　漁師だけの特権なんだけど、とくべつだぞ！　煮つけにしてもらえ。砂糖醤油だ。はい！　ありがとうございます！　食堂でのこと。
「うへぇ……。グロテスクだな……。本当にうまいのか？」
「魚屋は嘘つかないの！　ありがたくいただきましょう♪」
白くなって固まった眼球を避けて筋肉部分をいただく。
「う、うまい！」
「ほんとうね。目の筋肉が引き締まっておいしい。それにゼラチンも。コラーゲンかしら？　健康にもよさそうね♪」
「目の料理だから視力とかにいいかもな。ほら、心臓悪い人は心臓食うといいとか言うだろ？　それと同じようなもので」

「そうね、きっとそうかもしれない」
中落ちの天ぷらも口にする。うまい！　ほんとう、おいしい❣　女将さん！　瓶ビール。はあい――！　いいの？　捕まるわよ。いいんだよ。昼間は検問してないだろ。隣に座るわたしの身にもなってよ。じゃあ、飲むのやめるか？　俺はいただくけど？　わるいひとね。いただくわ。うふふ❣　ビール一本を開けってから食堂を出る。
ああ、おいしかった❣　ごちそうさま❣　いや、いいんだ。これくらいなら構いやしないよ。それよりビーチへは歩いていくか。近くだし。ええ！　こんなに暑いのに？　アルコール抜かすと思って付き合えよ。まったく……、はいはい。二人は近くのビーチへと向かう。盗撮だけはだめですよ！　分かってるって。それよりも目的は山に沈む夕日だろ？　ええ、そうよ。あら？　三脚忘れちゃった！　取りに戻るから居てて。ああ。なんかあったら携帯掛けるから。ああ。わたしのカメラ預かってて。わかった。セイラは車へと戻る。夕暮れはまだ遠い。ゆっくりで大丈夫。
突然、携帯が鳴った。画面を見やると緊急通話。いやな予感がした。着信音はてっきり明君だとばかり思っていた。お母さんは温泉旅行へ行っており家にはいない。慰安旅行はセイラからのプレゼント。いいから、友達とゆっくりしといでよ。そう？　それじゃあ、遠慮なく。ありがとう。いえいえ、こちらこそいつもありがとう。我に返る。はい、もしもし？　ええ……、はい……、え……？
母親は危篤で危険な状態だといわれた。来れますか？　はい、もちろんです！　母はどうやら渓谷から登山したらしい。高山病だという。お母さんったら！　年も考えないで登山だなんて！　思った。今夜発てるかしら？　ビーチに居る彼へ電話を掛ける。急いで戻ってきて！　お母さんが大変なの！
「心配だから俺も一緒にセイラのお母さんのところへ行くよ」
その言葉が頼もしかった。母親のいる県は飛行機で二時間ほどの場所である。空港へと急ぐ。キャンセル待ち。無事、チケット二枚確保できた。最終の便。二十時を過ぎている。着くのは二十二時だ。その県の電車は走っているだろうか？　いや、それよりもタクシーを利用したほうがいい。土地勘がないものだからそうするしかない。県立総合病院の集中治療室。生きているのか死んでいるのかすらわからない。とにかく早くたどり着かねば。その一心。飛行機が飛び立ち母のいる県へ。それからタクシーを拾ってから病院へ着く。
母親が死んだのは零時前。ご臨終です――。その言葉が遠くへ響いていた。涙も出ない。突然のことで思考は混乱していた。真っ白。泣いたのは翌朝。霊柩車で火葬場へと運ばれる。葬式などする場合ではない。ここは他県なのだ。灰になったお母さんを連れて帰宅する。家に着いたのは夕方。明君もつかれている。だがしかし彼は翌朝まで傍にいてくれた。セイラは泣いた。悔しいのと寂しいのと悲しいのとで精神がいっぱいになる。とてもやりきれなかった。
明け方、明君は家へ帰って仕事着へ着替えなければならない。セイラは行ってほしくなかったけども、ぐっとこらえた。いってくるよ。ええ、いってらっしゃい。ごめんな、こんな時に。謝るのはこっちのほう。本当に迷惑かけちゃった。ごめんね。いや、いいんだ。それよりも、変な気だけは起こすなよ。何言ってんだか。そんなことしたらお母さんが悲しむじゃない。死にませんよ。ならいいけど……。なるべく早く戻ってくるよ。うん。それじゃ。きをつけてね。
結婚を意識し始めたのこのころから。だからと言ってすぐに結婚したわけではない。婚約前にやらなければならないことは山のように積まれていた。まずは父親への電話。セイ

ラは母親の携帯電話から父親の電話番号を抜き出した。それから電話を掛ける。これがまた厄介。もう久しく会話をしていなければ、声さえどうだったか覚えてなかった。非常に勇気がいった。けども、とにかく話をしなければ。お母さんが亡くなったことを告げなければどうにも前へは進まない。仕送りのこともある。母と父はいまだに離婚していなかった。家の税金などは父親が出していたのだ。いえ、そんなことどうだってよいじゃない。ええ、そうではないの。確かにお金のこともだけれど、最愛の母が亡くなったと言うのに、父が知らずにいるのはどうしてもおかしいと思うのよ。

父は鹿児島に居た。左遷されて飛ばされたのだと言う。ちいさな港町だと話していた。お母さんの葬式はしていないの。とてもそれどころじゃないし、亡くなり方が酷いから。だってそうでしょう？　こんな亡くなり方ってあるのかしら。お父さん聞いて。お母さんは高山病で亡くなったのよ。ひどいでしょう？　わたしが旅行のプレゼントをしていなければこんなことにはなっていなかったの。そうよ、悪いのは全部わたしなの。嗚呼、お父さん、お母さんずっと待っていたと思う。どうして帰ってこなかったの？　酷い。酷いじゃない。でもそれもすべて終わった事よね。だってお母さんは死んじゃったんだもの。ええ、家はお父さん名義だから。だからわたしは出て行きます。え？　わたしがもらえって？　だめよ！　わたしじゃ税金を納めきれないもの。お父さんがいいなら引き払いましょう。お母さんの骨はわたしが預かります。引き払ったお金で墓を建てるの。立派な墓を。いいでしょう？　おとうさん。

結局、結婚式はあげなかった。そのかわりとして結婚写真だけはウエディングスタジオで撮っておいた。振袖で幸せそうな二人は写真の中に居る。それを毎朝眺めるのが好き。写真は掛け軸に収めて居間に飾ってある。実家住まいではなかった。明君の実家の近くにアパートを借りて新婚生活を送っていたのである。セイラの実家は払った。そのお金の一部でお母さんの墓を建ててやった。墓参りは毎月している。給与後に訪れていた。公園墓地に母はいる。そう思って頑張ってきたのだ。寂しかった。いまだに哀しかった。けれども前へ進まなければならない。それと異なる途方もない苦しみや悲しみはきっといつか訪れる。ここで挫けてばかりはいられなかった。もっと逞しくならなきゃ。そう言い聞かせて。

あれから父とは会っていない。もう終わったこと。とっくに過去の人となっていた。残された家のローンはしっかりと支払っていく。それだけは約束してくれた。セイラへの慰謝料のつもりだったのかもしれない。引き払ったお金をローン返済に充てることはなかった。父がかたくなに拒否したのだ。このお金はお前が使いなさい。これから先、どうしても必要になってくる。そのときのためにとっておきなさい。うれしかった。涙が止まらなかった。父もよき親だ。そもそも悪いのはお母さんのほうであるけども、セイラは何処か父を恨んでばかり。仕事ばかりしていなければ、ゴルフばかりしていなければ、母も浮気をすることはなかっただろう。何をいまさらそんなことを考えるの？　自身を叱咤する。もういいじゃない。全てを許してあげなきゃ。

明君は結婚後もやさしかった。何一つ変わることもなく順風満帆。文句のひとつくらい言えばよいのに。そう思うほど好青年。妊娠が発覚したのは同居から半年のこと。二人は喜んだし、これからのことを余計に話し合ったりしていた。女の子だったら2LDK以上じゃなきゃダメよ。そうだな、そのときは越せばいいか。明君とセイラの住まいはリビングのない2DK。そのぶん一部屋は居間で使用するしかなかったものだから、子供部屋まで用意できない。これからお金が少々必要になってくる。共働きは必須。

セイラの職場は育児休暇が取れない。つまりはやめざる得なかった。ぎりぎりまで働いたのちに辞めよう。そう決め込んでいた。一方の明君は残業をするようになり、帰りがいつも遅くなった。金銭的には問題ないが、しかしセイラは嫌な予感がした。これではわたしの両親と同じじゃないのかしら？　現実を考え始める。そうか、そういうことだったのか。結婚をしてようやく気づかされる真実。そんな中で父と母を責めたてた自分が何とも幼かったのだなと痛感した。申し訳なかった。すべてはわたしが誕生したことから始まっているのね。何もかも悪いのはわたしのほうじゃない。それなのにわたしったら……。でもね、私を誕生させたのは紛れもなく父と母の性交からだ。わたしだけが悪役だなんて考えるのもおかしな話ね。やっぱり責任自体は父と母にあるのだから。そんな中でグレもせずよく生きてきたものだ。彼女は自身を褒めたかった。ちょっとした反抗期もなかった。とにかくお母さんが可愛そうでけんか腰になるようなことはできないでいた。それは正解だった。万が一にも母を責めていたら、もしかしたら心中もあったかもしれない。家に火をつけて死んでいたかも。そうならずに済んだのは、わたしだけではなくてお母さんの我慢も当然ある。謙虚な人。だけども知らない男の愛人を演じていたしそうでもない面もある。非常に複雑だ。どうやって母の生涯を語ればよいのだろう？　思うときもある。けれども、そんなのはなさなければよいだけよ。と、黙ったまま。内緒。

おなかの赤ちゃんは順調です。来月になれば性別も判明しますが、いかがされますか？　産まれるまでとっておきましょうか？　担当医は訊いてきた。いえ、直ぐにでも知りたいです。女の子だといろいろ準備しなければならないので。そうですか、わかりました。上村産婦人科は丘の上にあった。車でないと少々つらい。バスは近くを走っていたのだが、とてもそんな気にはなれなかった。子供の形はまだできていない。心臓の鼓動が見えるくらいだ。非常に不安だった。マタニティーブルーなのだろうか？　そういえばそうかもしれない。しかし、そうひとことで尽きるわけでもなかった。非常に複雑な結婚。明君の両親は反対したしあまりいい目で見られなかった。それもそうだろう。まだ一人前として立派に働いているとは言い難かったから。働いてる？　そうじゃなくて給与のことよ。ぶつぶつ独り言を考えてはつぶやくセイラ。嗚呼、わたしったら完全にネガティブになってしまってるわ。なぜだろう？　いいえ、それは当然の事。分かりきった答えではないのかしら？　そうね、そうよね。

さいきん明君の帰りがさらに遅くなった。職場の仲間と飲み屋へ通っているのだ。収入が少し増えたと思ったらこれなんだから。あきれるセイラをよそに、彼はどんどんどんど彼女の中で好青年ではなくなっていった。そしてとうとう懸念していたことが起こる。浮気だ。ある日曜日。この日は夜のうちで明君はかえってこなかった。どういうことだろう？　いくら月曜日が休みだからって、それはないじゃない。男？　女？　あなたはカミングアウトでもしたのかしら？　それともこれからわたしが盆栽ばさみでぎっちょんしてやるのかしら？　さあ、言いなさいな。どこでどうして何をしたのか。洗いざらいお話よ！

セイラの精神はピークになる。胎児にも悪い影響が出ていることだろう。そんなことは分かっている。けれども、ストレスが否応なしに襲い掛かってくる今現在、逃れるすべはなかった。とつぜん、おなかが痛いと思った。よしよしおなかの赤ちゃんさん。お静かにおしなさいな。大丈夫よ、ママさんが付いているからね。あなたは世に出る子。もう少しの辛抱よ。さあ、おしずかにおしなさいな。痛い。痛む。痛み続ける。嗚呼、あかちゃんさん。あなたの名前はまだ決めていないけれど、由紀はどうかしら？　うふふ～　私の名前からして柏木由紀が芸名かしら？　そう。あなたはね、女の子になるの。きっと女の子な

んだわ。それでね、きいてちょうだい。あなたは将来、芸能人になるのよ。そしてアイドルになるの。すごいストロボの数とスポットライトがまばゆくて、衣装はキラキラのお姫様なのよ。どう？　すごいでしょう？　それとも佳子がいいかしら？　芸名は秋篠宮佳子。様を付けないと周囲が怒るのよ。うふふ❣　それでね、あなたは皇室に嫁ぐの。すてきでしょう？　あら？　そこまで畏まりたくないのね？　いいでしょう。それでは由紀で決まりね――。

「院長、患者の意識が戻りました――！」

「おお！　やっと回復したか。よかった……。旦那さん、もう大丈夫ですよ」

え――？　思う。一体、どういうことなの？　訳が分からない。セイラ、よかった。目を覚ましてくれて。かなりやばい状態だったんだ。出血がひどくてな……。ねえ？　明君。ここはどこ？　どうして院長先生がいるの？　いいか、何も言うな。ここは上村産婦人科。赤ちゃんは……、流れた。え？　流れたって？　どういうこと？　明君、どういうことなの？

「流産してしまったんだよ」

なんですって――？　セイラは記憶をたどる。おなかが痛くて、倒れて……。嗚呼！

「辛いだろうけど一緒に乗り越えような」

セイラは頬に伸ばしてくる明君の手を思い切りはたいた。

「ふざけないで！　全部あなたが……。あなたがぜんぶ悪いんじゃない！」

うわっと号泣する。泣き崩れた。涙声を出す。一生懸命に。わたし、わたし、名前を考えていたの。赤ちゃんの名前を決めていたのよ？　それなのにどうしてこんなことにならなきゃいけないの？　ひどいじゃない！　いったいわたしが何をしたっていうの？　名前なんか最初から考えるんじゃなかった。そうであればこんなに悲しまなくて済んだのに！　嗚呼！　由紀。佳子。ごめんね、ごめんね。ごめんなさい！　ほんとうにごめんなさい！

後日、退院する。夫婦は神社へ供養しに行った。セイラはいまだに酷く落ち込んでおり、明君とは阿吽の会話しかできない状態。非常に精神が狂いだしそうだった彼女は、ぼつぼつと独り言をつぶやきそうになったのだが、その意識を追い払うことなどできやしなかった。ときおり表情がひきつく。今まさに精神疾患との境目へ到達していた。その異変に明君は気づいているし、懸命に気を紛らわしてやろうとするのだが、セイラはそれが逆に腹立たしく感じる始末。

離婚しましょう――。言いたかった。発したかった。だけども今一人になると言う事は死を意味している。セイラの精神はそこまで追い詰められていた。けれど一人になりたかった。孤独に生活が送りたくなった。明君は好青年へ戻った。それが唯一の救いだ。そんなことわかっているわ。彼も悪かったと反省しているのよ。いい加減許してあげなくちゃ。でも、今は絶対に許してあげない。当然の報いだわ。それがせめてもの赤ちゃんへの償いよ。明君、覚悟しなさいな。

「なあ、さいきん塩が濃くないか？」

おだまり！　私はまだ許していないんだから。このままあなたを塩の塊にして、あわよくば海に流してやるんだから。今に見てなさい。これは完全犯罪なのよ。あなたはね、大罪を犯したの。ほんとうならば盆栽ばさみでおちんちんをぎっちょんなんだから。これくらい耐えられるわよね？　何が、塩が濃いよ。ふざけないで。おふざけあそばせ。わたしはあなたへ美味しいごはんなんか作る気は毛頭ないのよ。あなたはソーセージエッグマフィン。ハンバーグにされてカミングアウトしたアメリカさんに食べられてしまうのよ。そ

う、ハードゲイによ。嬉しいかしら？
「なあ、抱かれてくれないのか？」
何を言うのかしら？　あなたとは絶交なの。金輪際、あなたのペニスはわたしのバギナへ挿入されることはない。そう、私が許してあげるまでセックスレス夫婦を演じるのよ。よかったでしょう？　他の女の体はたいそうよかったでしょうね。その恨みも忘れてはいないんだから。あなたは浮気をした。赤ちゃんがお腹の中に居る時によ。こんなことってあるのかしら？　あなたは犯罪者。性教育をまともに受けていない只のモンキーマジックでしかないわ。いいえ、あなたはチンパンジーよ。何を贅沢に人間の女を欲するのかしら？　あなたが欲するべきものは台湾バナナよ。マレーシア産でもよくってよ。
「なあ、なぜに話聞いてくれないんだ？」
話を聞くですって？　わたしはあなたと会話がしたくないの。まだ気が付かないの？　わたしは離婚も考えたわ。だけれどできない自分がみじめなの。さあ、のたうち狂いなさいな。わたしの憂さ晴らしはあなたを苦しめる事。ほとほと嫌になるまで許さないんだから。さあ、盆栽ばさみでぎっちょんよ。
わたしは痴女。だけれど今は違う。セイラはふと思った。今までのわたしはなんだったのかしら？　笑いたくもなる。チャンチャラ可笑しかった。根源をたどるとお母さんに行きつく。それが嫌でたまらない。お母さんはお母さんの人生があって、わたしにはわたしの人生がある。影響を受けたと言いたいのは料理上手だとか愛嬌だとか萌だとか容姿に関してのみ。砕かれた運命については真似したつもりもないし、お母さんのせいにしたくないと言う心理が働いた。全てはわたしの責任。でもね、そう言ってしまえば簡単にかたずけられるものでもないのよ。複雑だわ。
緩いカーブに街路樹が並ぶ。いま、ひとりで散歩を楽しんでいた。商店街へたどり着くとコロッケ屋で野菜コロッケひとつ注文し、その場で食した。ほくほくとしたそれは、何だかお母さんの手作りを思い出す始末で、あのころの光景が懐かしくよみがえるのを抑えきれずにいた。この店に来るのは今週三回目だ。セイラは離職中で気力が抜けていたものだから、そう言った癒しは格段にありがたいと感じた。この街はいい。
日を追うごとに流産における傷は癒えてゆく。だけれど明君へ対する敵対心はいまだ濃かった。何故に離婚をしないのかしら？　わたしって、もしかしたら変な女なのかもしれない。そんなことわかってるじゃない。わたしは痴女なのよ。只、いまのところそれを休んでいるに過ぎないわ。でも、明君と離別しないということ自体が痴女そのものの本能ではなくて？　たとえばマゾヒストだとか。
「なあ、セイラ。今夜はちょっと飲みに行かないか？」
ちょうどいい、思った。それなら焼肉天国なんかどうかしら？　カルビにビビンバ。ロースにヒレ肉。そしてホルモンとあなたのジャパニーズウィンナー。あなたのおちんちんは焼肉屋の中華包丁でぎっちょんしてもらうの。ねえ、いいでしょう？　それからそれから塩と胡椒を振って、レモンを絞ればホットドックの出来上がり。わたしはスペアリブをいただくけれど、あなたの包茎ウィンナーは従業員の女の子へ咥えさせるのよ。そして訊くの。どう美味しいかしら？　女の子はね、言うの。アメリカンじゃなきゃダメってね。悔しいでしょう？　ぎっちょんされた上に屈辱を味わうなんてどんな心境かしら？
「生ビールふたつください」
「はい、かしこまりました。お肉はどうされますか？」
「適当に二人前お願いします」

「はい、承知いたしました」
バイキングの焼肉天国だって言ったのに、高級肉屋のカウンター席だなんて。よっぽどわたしと面と向き合えないのね。ひどいひと。そして情けない男。
この店は初めて来るな。たまにはいいだろ？　うん……。嫌だったか？　御免な、強引で。そんなこと、どうでもいいの。落ち着いて話がしたいと思ってな、それでここにした。会社の人から話を聞いていたんだ。この店は評判がいいって。ほら、この街に高級飲食店て少ないだろ？　だからといって値が張るわけでもない。そう……。まあ、ビールでも飲んでから気分良くしようぜ。たまにはな。そうね。明日やすみだから今夜はホテルだ。予約してある。ホテル？　ああ。そう、ホテルだ。家には帰らない。それでな、明日起きてからそのまま繁華街へ行こう。思い切りよく楽しむんだ。付き合ってる頃のように。結婚してからなかっただろ？　埋め合わせをさせてくれ。そう……。
セイラは流されるがまま身をもたげようと思った。なんだかわからないが、そうしたい気分へ陥った。明君に対して冷たい自分を演じるのに少々疲れていたのかもしれない。
暫くして酔いが回ってきた。腹も十分満たしている。嗚呼、わたしったらいけない。このまま眠ってしまいそう。だけれど、そのまえに、ホテルへお持ち帰りされるのだわ。お持ち帰りされると言うのも変な話よね。だって一緒に住んでいるのだもの。夫婦ですものね。久し振りのセックスは気持ちよいでしょうね。わたしの膣は未開発のままみたいにギュッと狭まんでいるのだわ。どう？　明君。きつきつかしら？　でも、男のひとはそれがよいのでしょう？　わたし？　わたしったら、もう駄目っ！　て、のたうち狂う予定よ。さあ、抱いてくださいな。好きにしてくださいな。わたしはまたしても痴女へと変貌するの。もうその時が訪れたのだわ。
タクシーはリバーサイドのシティーホテルへと誘われる。繁華街近くの高級ホテルだ。一泊三万円はする。ツインルームで四万。羽振りをきかしたのね。いけないひと。思う。でも、それでも素敵な人。もう十分。明君、分かったわ。ゆるしてあげましょう。そして今夜恋に落ちるのよ。愛にうろたえもがくの。懸命に腰を振って出し入れしてから顔中ザーメンまみれになって見せるわ。温かい精液。はぁん。いいでしょう？　あきらくん。
ベッドの上で二人の愛はぶつかり合った。激しく淫らに。オスとメスの交尾である。もはや獣の存在であった。嗚呼！　仰！　とってもきもちよいわ！　おれもだ！　いくいくいく！　いっちゃう！　嗚呼！　くっ！　俺も逝きそうだよ！　顔に出してぇ！　おねがい！　精液を顔中にばらまいてぇ！　何回も何回もセックス行為は続いた。一晩で三回はする。セイラの顔面は精液パック状態。生臭くて、温かくて、かゆかった。嗚呼……。とっても、とってもよかったわ……。ああ、俺もだよ。おねがい、キスして。ああ。
ふたりは二度目の風呂へ入る。ジャグジーから噴出する泡は、しごく疲れを癒した。そんな中で明君がセイラの乳首をつまむ。あん、いたい。もっと優しくつまんで。どうしてほしい？　もう、変態なんだから。お湯の中でまた、やる。湯を出た後はソープでマット（タイル）プレイだ。どう？　きもちよいでしょう？
結局、ダブルベッドで就寝したのは夜中の三時。朝の十時には部屋を出る。チェックアウトを済ませてからホテル内のレストランへ。バイキングもあるのだが、洋食のモーニングセットをいただいた。胃が持たれているからだ。軽く済ませたかった。本当ならば和食のモーニングセットの方が良い。しかし、それはメニューになかった。熱いコーヒーではなくてオレンジジュースを注文した。のどがカラカラに乾いている。コーヒーの量では足らないと思い、そうオーダーした。ホテルを出る。

繁華街は高級ホテルから歩いてすぐにある。車はそのまま駐車場に止めておき、徒歩で街中へ歩んだ。スクランブル交差点の信号を渡る。日曜日と比べて人数は少ないと思うが、それでも人の頭数は多く感じられた。どこへいく？　服屋がいいか？　ブランド物欲しいだろ？　今日は買ってもいいぞ。いえ、けっこうよ。それより香水が欲しいわ。なるほど。それじゃあブティックだな。ええ。ブティック店でシャネルの香水を買ってもらった。

久しぶりにカメラのキタムラに寄るか？　ああ！　そういえばカメラご無沙汰だったわね。いいわ、行きましょう。」リバーサルフィルムが切れているし、ケア商品もほしいわ。そうだな、カメラの手入れも大事だな。もしかしたらレンズにカビが生えてるかも！　そうだな、その時は分解してカビキラーだ。

カメラ屋で買い物を済ませると繁華街を往復し、昼前には車へ乗り込んでいた。まだ腹は減らしていない。むしろ疲れていた。帰宅路はハウスソングが流れている。ＦＭラジオだ。道中、正午の時報が鳴った。午後からはリクエスト方式で選曲される。この番組は、馴染み深いものがあった。昔から知っている。ディスクジョッキーは地元で人気のシェリーという女性。声がハスキー声である。それでいて大人の色っぽさがあった。家に着いた。

昼食は簡単に冷やしそうめんでいい？　セイラは訊いた。ああ、さっぱりしているし、そうしてくれ。それじゃあ、つくるわね。」ああ、ありがとう。二人の仲はすっかり元通りだ。明君もほっとしたことだろう。彼女はそう思った。天つゆを切らしている。しかし大丈夫。四、一、一の分量は簡単で、だしの元をといた水を四、醤油を一、砂糖一、で混ぜればよい。わたしね、他にも知っているんだから。」ポン酢しょうゆとかだろ？　ええ、そうよ。」他にもドレッシングだとか。はいはい。対面式キッチンで会話を楽しみながら調理をする。

ねえねえ、テレビ点けて。笑っていいとも観ましょう。」ワイドショーの方がいいだろ？　ほら、バイキングだとか。だめよ！　あの司会者、ギャンブル好きなんだもの。でも顔は男前ね。」おいおい、旦那の前でそれはないだろう？　あはは！　二人して笑う。今日は楽しいわ。」なんでもっと早く仲直りしてあげなかったのかしら？　わたしったら本当に痴女ね。マゾヒストでもありサディスティックでもあるだなんて。もう、本当にいけない女。うふふ。」

再び子供が欲しいと思ったのは二年後。そのあいだセイラと明君はセックスという快楽を大人目線で楽しんでいた。恋ではなく愛ではなく、というわけではない。逆にそれらを凝縮させた濃厚な蜂蜜を食パンへ塗りたくって舌で舐めるようにして食するといった具合の官能的エロスである。彼女はもがき苦しんだ。喘ぎ苦しんだ。愛おしいほど、狂おしいほど潮を吹く。嗚呼！　だめなのぉ――！　何が駄目なんだ？　こうしてそうして突いてやる。突っ込んでやる！　これでもか！　こうでもないか！　仰――！　二人は獣。これでは獣と獣の交尾他ならなかった。その先でザナドゥーを見る。只、真っ白で、それ以上の光があって、血液が破壊されたなにも残されない世界を、みた。

デートも頻繁に行く。繁華街に水族館。美術館にラブホテル。一眼レフカメラが似合う場所ならどこへだって出かけた。被写体は必ず決まってセイラだ。今夜はヌードを撮る約束になっている。やだ、はずかしい！　そんなことないだろ？　わ、わたしったら……。わたしったら……。

「〝わたし、変態で痴女なんです〟」

言えるわけもない。誰にそんなはしたないことが発せるというのだろうか？　考えても観てほしいの。わたしは淫乱だけれど淫乱ではないのよ。セイラはマザーテレサ。性欲も

ほどほどにしなくちゃだめなの。だってそうでしょう？　ここにおまんじゅうが二つあって、それがおっぱいに見えるだなんて。アメリカンビックバーがフランクフルトに見えるだなんてとんでもない話だわ。わたしはそこまで飢えた女ではなくてよ。

妊娠を知ったとき、ふたりは飛んでよろこんだ。産婦人科医院で抱きしめあった。明君、仕事なんて頑張らなくていいの。ちゃんと帰ってきて、ちゃんとご飯を食べて、ちゃんとわたしと眠って。今度こそ産んで魅せるんだから❣　うふふ❣　たのしみだわ。名前はなんにしようだとか、そういった楽しみだけではなくて、ピクニックやお遊戯。そんな楽しみもあるんですもの。これからは三人家族で明るくいくのよ。そうでしょう？　明君。

ねえ、名前考えたのだけれど、理央やお洒落にニコルだとかアニサなんてどうかしら？　いや、ハーフ系はダメだろ？　まるで俺の子じゃないみたいじゃないか。それではいじめの対象だ。理央は考えとくよ。いい名前だ。じゃあ、あなたが考えた名前はなに？　教えて❣　まだ何にも決めていないよ。性別が分からないからさ。それからでもいいんじゃないか？　男の子だったらどうする。そうね、男の子でもいいわ。ねえねえ、本当に楽しみだね❣　ああ。

胎児の成長と共に乳首が黒くなってゆく。それと胸の膨らみが〝たわわ〟となり母乳が出るように。明君はそれを好んで飲んだ。いつしかコップへと移し自家製チーズをこしらえたくらいだ。彼は変態である。セイラは痴女だ。まるで獣と獣なの❣　さあ、裸になってくれ。喘いでみせてくれ。

今回ばかりは明君とて好青年。きちんと帰ってきたし飲みにもいかなかった。お泊りなどとんでもない話だ。彼はセイラのことだけを愛し、彼女は明君を愛した。そして産まれてくる子供。あまり裕福な家庭ではないけれど、普通くらいならある。お金の心配はいらなかったし、愛情不足でもなかった。すくすくと育ちなさい。ふたりは赤ん坊へそう言い聞かせた。いよいよ誕生の日を迎える。

「性別は女の子です――」

おんなのこ？　本当に女の子なのね！　嗚呼、なんて事かしら。ねえ、明君。きいてちょうだい。名前はわたしが決めてよいのかしら？　それとも明君が決めてくれるの？　とっても大事なことだもの。やっぱり二人で考えて決めましょう❣　今日はなんて良い日なのかしら？　それもそうね。外は思い切りよく快晴ですもの。それだけじゃない。この医院内だって赤ちゃんに母乳を飲ます母親や、いろんなカップル。皆そうして微笑ましい顔つきをしているのですもの。優しさで溢れているわ。明君、いま、この場で踊ろうなんて言わないで。わたしはもうお腹が膨れているのよ。モダンダンスなんか踊れないわ。それよりもわたしね、甘いものを食べに行きたい。もちろん温かいものよ。中華料理なんかどうかしら？　中華は医食同源でデザートが温かいものね。体にやさしそうだわ。精力の付く物はダメよ。たとえばヤギ肉だとか。寄生虫の危険がある生色も危険ね。それを考えてみてもやっぱり中華料理じゃない？　そうでしょう？　明君。

二人は中華料理店へと向かう。そこでセイラは皿一杯に食べた。チャーハン、野菜炒め、フカヒレに何でもござれだ。あまりの食欲に明君はあっけにとられている様子だったが構いやしなかった。わたしね、太ったっていいと思ってるの。赤ちゃんの健康のためならわたしの容姿なんか気にならないわ。

いよいよ出産が近づいたころ、セックスに関してドクターストップがかかる。胎児の頭に当たるからという理由でだ。それは特別、明君が大きいだとかそう言うことではなくて、どのカップルに対してもこの時期になれば話すのだそう。マタニティーブックにもそう書

かれてある。お風呂の入れ方なども勉強したし、離乳食の勉強なんかもしていた。準備は万端だった。さあ、おなかの赤ちゃん。おいでになりなさい♪

産まれてきたのは2800gの赤ちゃん。性別、女の子。名前はテレビ番組のマインちゃんから取った"はるか"にした。母子ともに健康である。産婦人科の個室は建物の中央に並んでいたために外窓はなかったが、白熱灯がやわらかい明かりを灯していて綺麗。空調はもちろん快適で申し分なく、良く眠れた。出産は夜中の二時半ごろ。前夜の十時ころから唸っていた。共に精根疲れ果てた明君もシングルベッドでいっしょに寝ている。定期的に来る女の看護師がその寝顔を見てやさしく微笑んでいた。退院は一週間後。そのあいだにいろんな知人が病院へ訪問してきては"セイラにそっくり"だと発した。セイラはそれが嬉しくて仕方なかった。

はるかちゃんは産まれたころからあまり泣かない子。女の子はだいたいそうですよ。先生からはそう返ってきた。女の子はおとなしいのですよ。男の子だと手が掛かるくらいに泣きじゃくるのですがね――。

本当に、発見、発見、の連続。何もかもが初体験だ。仕方がないといえばそこまで。慣れない手つきでやり過ごすしかなく、時にはどうしようもなくなって泣いたこともあった。子育ての大変さを日々痛感する。睡眠もままならなかった。本当にわたしのお母さんは立派な人だったんだ……。お母さん、ありがとう。セイラはふたたび感極まって泣いた。泣いて泣いてほほえんでほほえむ毎日だ。

はるかちゃんが二歳になるころ、ようやく二本足で歩けるようになった。しかしまだまだおぼつかない。歩行練習がてら公園の芝でよく遊ばせた。明君も休みの日は一緒についてくる。手をつなぎながら、時には一人で、歩かせた。歩いた。

三歳になるころから保育園通い。保育園は近所にある。自転車で通える距離。時間にして五分。セイラが新しい仕事を探し始めたころのはなしである。はるかちゃんを産んでから再び教会へ行こうと考えていたセイラは、当初、教会の保育園へ通わそうと相談したのだが、近くの保育園よりも遠いという理由から明君が受け入れてくれず、結局、近所の保育園へと通わすことになっていた。新しい仕事はバイトでやることに。近所のスーパーである。惣菜係をすることになっていた。その中でもパン工房が持ち場。九時から二時までの五時間勤務である。保育園の送迎を考えると丁度良かった。これでおおよそ八万円は給与がある。かなり生活費の足しになった。明君の給与は二十万。贅沢はできないが貧困というわけではない普通の暮らしができた。

日曜はバイト休日だが明君と休みが合わない。明君は相変わらず月曜休みのまま。どうしても日曜はシフトが組めないということで仕方がないことでもある。なものだから、日曜の教会へは娘のはるかちゃんとセイラの二人で行くこととなった。それについて彼女は寂しくはなかったし、宗教行事に明君を巻き込みたくはないという気持ちもどこかしらあった。わたしはいいの。だって不幸続きだったから。これも呪いかしらって思ったこともあったわ。だから教会へ行くことに意味があるのよ。そう言うのが明君にはないでしょう？だから明君が一緒にいくことはないわ。結果的にわたしたちは今幸せなんだものね。

はるかちゃんの洗礼はまだ受けていない。まだまだ子供だ。洗礼をうけるかどうかは大人になってから自身で決めればよい。親が推し進めるものではないもの。彼女が大人になってからも信仰心があるのならば、そのときよ。そう、そうに決まっているじゃない。あわてる必要なんてないわ。その"慌てる必要"だとかそう言うのもまた変な話よね。

教会へは自転車ではなくて乗用車を使った。距離があるために自転車ではきついのと危

険がはらむからである。安全第一で行動したかった。よくあるミサへ行く途中でひき逃げ死亡事件だとかもっぱら御免。今現在の教会と言えば、セイラが子供の頃にいたキング牧師は定年を迎えて引退しており、その息子がピアノ伴奏の新妻と一緒に運営を切り盛りしていた。引退したキング牧師ならカナダの方へ中期滞在に出かけておりましてね。まあ元気なのですが、海外でいろいろとやり残したことがあるようです。そんなことを息子は話していた。今では代わりの宣教師もおらず息子夫婦だけで一日中礼拝をおこなっているというから大変だろうなと思った。

牧師はとても好青年。礼拝前に応接間ではるかと居ると、必ず急須に居れた温かいお茶と茶菓子を出してくれて、そのうえ談笑まで付き合ってくれる始末で気持ちは和んだ。嗚呼、芯から曇りが無くてとても良い人なんだな。そう思っていた。そういえば今現在お母さんが良く行っていた部屋の鍵は掛けれらている状態なのだが、それについてあれこれ聞いても何かしら都合が悪いのかも。そう思って訊けずにいた。まあ、それについては忘れることにした。しかし、ある日曜日、牧師の方から部屋へ案内された時はびっくりしたものだ。お母さんの世代からの関係であるセイラだけには見せておきたいとのこと。それがどういうことなのか？　彼女は案内されるまで知る由がなかった。

教会のステンドガラスから陽が入る。ホールはその光によって虹色掛かっているようにも見えた。礼拝もすてきで、牧師の通るような声は、後方座席へもマイクなしで届いた。

＊

部屋へ案内された日のことをセイラはいつまでも覚えていた。それ位に心へ焼きついたのだ。それは歓喜という感情よりも憎しみの方が上。そうか……。お母さんはお父さんと関係がこじれる前からそうだったのね。ひとつため息をつく。教会からの帰りは気持ちが重たかった。いつもなら長崎ちゃんぽんのリンガーハットへ寄ってから帰宅するのだが、今日に限っていく気がしないでいた。ねえ、ママ。お店いかないのぅ？　娘は楽しみにしていたが、そっぽむかれてご機嫌斜めになった。それを後であやすのは根気が要った。代わりで出した昼食はウナギのかば焼きだ。日曜も開いている寿司屋から出前で取った。セイラは何だか元気を出したくて大トロも一人前で注文していた。とにかく腹を満たして忘れてしまいたかった。嫌なことを。今日のことを。

もうあの教会へは行きたくないわ。だってそうでしょう？　そのあとの言葉を誰にも話せなくてセイラは参っていた。娘は毎週日曜の教会を楽しみにしている。アメリカのお菓子をたくさん食べれるからだ。それについては否定しない。きっと今の牧師は違うだろう。そう思うと失せていた教会へも足を運ぶ気持ちになれる。そうでもなかった。どうしましょうね？　娘は通いたいはずだし、わたしだって今の牧師さんには好感を抱いているものだから、キリストへの忠誠心として行くべきはずだわ。でもね、ちがうの。問題はそんなことではない。母の隠された秘密を思い出すのが嫌なだけなの。けれど、知れてよかったとも思っているわ。だってわたしだって痴女なんですもの。お母さんの血を受け継いだ淫乱女なんですもの。いつかこうなると思っていたわ。わたしが開花する時。本当のわたしが求めている場所。それがあの部屋にあるの。それをしてはいけないことだと分かっていても体が求めてしまうの。よだれを垂らして、愛液を吹いて。ほしいの。ほしいのよ。それを止めなきゃダメ。この邪心はいけないことなの。どうして神はわたしにこんな試練を与えたのかしら？　考えても観て。だっておかしいでしょう？

結局、日曜の礼拝へ参加した。何事もなかったように振舞うのは少々つらいものがあったのだが、何とか乗り切った。もうあの部屋の中は覗きたくない。たとえ牧師さんが誘ったとしても。今日は長崎ちゃんぽんを食べに行きましょう。あのラーメンのスープは娘も好きだものね。

外界は雨が降っている。突然、小雨のちらつきから土砂降りになった。リンガーハットの店内から外を眺める大きな窓は、薄い霜で落書きが出来た。セイラの娘はその遊びをしながら"きゃっきゃっ"とはしゃいでいる。何を書いているの？　訊くが、わかんないもん♪と返ってくる。お父さんとお母さんの顔？　ちがうもん♪　それじゃあ、お友達の顔かな？　ぴんぽーん♪　隣の女の子ははるかなのね？　そうだよ♪　うふふ♪　そっか……。はるかはこの年でもう恋を覚えたのね。

そう言えばわたしの初恋も同じようなものだったわね。セイラはふと考える。わたしの場合、最初から最後まで明君。初恋から結婚、出産まで明君なのだものね。凄いことだわ。考えてもみて。そんなの現実に起こりそうもないじゃない？　高校から一緒になることはよく聞くけれど、保育園から仲良かった人と結婚だなんて。え？　ちょっとまって。そうなのかしら？　もしかしてそう言うことなの？　わたしは、わたしの体はマンネリに飽きているということなのかも。いいえ、そうよ。きっとそうだわ。それはつまり、わたしが痴女の性に芽生え始めたころからなのかもしれない。ええ、そうよ。そうに決まっているわ。でも、だからなに？　わたしはわたしに浮気でもしろっていうの？　こんなにかわいい娘がいるのに？　禁じられた恋を自ら甘んじるということなの？　そうではないはずよ。そうではない。え？　ちょっと待って。だとしたら、もしかしてお母さんもそれだったのかしら？　お母さんはその悩みを牧師さんに懺悔（ざんげ）したの？　それであの部屋はあるの……？　その目的のための部屋なの――？　結局、セイラには分からなかった。何も解決しないまま、その日を終えた。

セイラと明君はセックスレスになったというわけではなかった。現に昨日だってしている。昨夜はとても淫乱。獣のように舞った。踊った。酔いしれたし、気絶だってした。不毛なことなど一切ない。これのどこから他のペニスを欲する気持ちが芽生えるというのだろうか？　彼女自身訳が分からなくなる。ええっとぉ？　わたしはシンデレラ姫で明君はジャパニーズハンバーグ。そしてそして、あの部屋はミキサー車。あら？　場違いかしら？　うふふ♪　その車、ほんとうはバキュームカーなのよ。絶対に。それでね、業務用の巨大バイブがバケツのところに付いているのだわ。それでね、わたしはそれを見ただけで失神しちゃうの。裂けちゃうからって。どう？　おかしいでしょう？　そうよ、それ位にへんてこりんな思考回路なのよ。このわたしが痴女だなんてどうかしてるわ。

もうこの話はおしまい。さっさと別のこと考えなきゃ……。セイラは何かこう、育児をしながら没頭できる趣味をしたくなった。出来るわけがない。育児とはそんな片手間で成せる技ではなかったものだから、それだけでストレスがピークに達した。たまには休日が欲しかった。母親というものは休みが無いのだ。アルバイトのこともある。起きてから寝るまで働いているようなもの。わたしのお母さんは本当にタフだったのね。それでも凧の糸が切れたように理性を失った。"それでも"というのはおかしいかもしれない。母親というものは正常と異常の境界線に居るようなものなのよ。常に爆弾を抱え込んでいるの。それがいつ爆発して精神疾患になるかわからない。そんなギリギリの世界なんだわ。改めて思う。母は淫乱だけれど最高な女性だったのね、と。

娘はアルバイト先からお土産で持ち帰るパンがとても大好き。その中でもホイップの入っ

たメロンパンは大好物だ。アルバイト先がパン工房なため、何はなくともパンには不自由しなかった。セイラはサツマイモが練り込まれた食パンが好きなのだが、それを時々牧師さんへおすそ分けしていた。牧師夫妻はとても喜んで礼を言ったが、バイト先の余り物ですので気にしないでください、とお返しを拒んだりもした。やっぱり保育園は教会のやつにすればよかったかしら？　そんなことも思う。だけどもこればかりは仕方ないものね。明君の言い分も一理あるし。などと、あきらめの方が答えの先に出てきた。

今日はよく晴れている。日曜日の礼拝は心が弾む説教。やはり教会は良いわね。無料でこんなに素晴らしい話が聞けるだなんてまるで夢のようだわ。あまりに気分が良いのでいつものリンガーハットへは寄らず、シーサイドのドライブインレストランへ足を運んでみた。この店にはあまり来ない。どちらかというと若いカップル向けのレストラン。車中ではなく店内で食事を済ませる。大きなガラス張りのむこうではロングボーダーが白波で波乗りを楽しんでるのが見えた。そういえばそう言うのはやったことが無かったわね。独身の時はカメラばかり。そしてセックス、セックス、セックス。振り返ってみればあまりにも単調。なんてことのないカップルだ。ごくありきたりのような交際関係。わたしの痴女的本能はそう言うところからも生じているのかもしれないわ。たとえばマンネリ。いやだ、この事はもう考えないって心に誓ったじゃない。わたしって本当にいけない子ね。いつかこの理性の鎖が解ける日が来るのかしら？　それは考えたくもないことだ。だってそうでしょう？　そのときは歴史の終わりに差し掛かるのよ。肝に銘じて、わたし。

「何かご家庭で困ったことがありましたか――？」

いつだっただろう？　牧師のその言葉はとても優しかった。あまりに突飛だったためにセイラは困惑したものだが、そう言われる筋合いはあった。顔つきがやつれてしまっていたのだ。牧師さんはそれを見逃していない様子だったものだから、思い切り恥ずかしかったし、心の病をとうとう発する時が来たのかとも思った。最初、セイラは我慢して言わなかったのだが、しかしながら鎖の解かれる日は身近に迫っていた。

「懺悔してみますか？」

え――？　ですから、主、イエスキリストへ心を開いてみるのです。大丈夫、気持ちはきっと晴れますよ。で、でも……。皆さん最初はそう言いますが、告白することで明るい表情へと誘われています。あなたも救われるべきです。神に。主、イエスキリストに。サイは投げられました。それでは共に懺悔室へ行きましょう。は、はい……。牧師の誘導する話術は完璧。流されるがまま向かった先はあの部屋。この部屋は――！　そうです、この部屋が懺悔室なのです。あなたのお母様も此処で懺悔をおやりになったのでしょう。そして私の父である元牧師に慰められていたのですよ。

懺悔室内は裸電球ひとつで少し暗い。床は全面コンクリートで、何かを洗う事に関して効果を発揮している様子。所々に褐色した血痕みたいな模様がある。恐らくそうだろうと思った。想像しただけで身が震える。部屋の隅には、騎乗の箇所に布が敷かれた三角木馬。十字架の身固器具。壁には鞭やろうそくなどが神棚のようなものに預けられていた。これらから察するに、ここは懺悔室でもあってＳＭルームであることが容易と判断できる。正にセイラの身へ危険が差し迫っているかのような圧力。

セイラは夢を見ていた。それは上等の羽毛布団にハミングの香り。見上げる天井には蛍光の星々が散らばったブラックライトシャンデリア。音楽は有線でロックバラード。隣には全裸で横たわる母の姿。さあ、お行きなさいな。あなたの夢心地、あなただけの世界を夢見るのよ。それは一体何かしら？　わたしと同じ運命だなんてうそ。セイラ、あなたに

はあなたの存在があるわ。人生があるのよ。運命がそうさせたのならばお行きなさいな。嗚呼、おかあさん、おかあさん。あなたは今幸せですか？　天国で何をしていますか？

千本山は筵地獄。アナルにもバギナにも、そして耳の穴にも鼻の穴にも物が出入りする。それは蟲地獄だろうか？　奇妙なもの。奇怪なもの。わたし、こんなの初めて。嗚呼、いたぶられて感じるなんて、すてきだわ。本能が目覚める。わたしはただの豚。家畜に過ぎない。これから向かう先はポークランチョンミート。ミンチ肉になって機械でプレスされてぐつぐつと熱を浴びるの。

突然思う。わたしは誰だっけ？　本当に人間から脱皮したのかしら？　ここは何処？　分からなくなる。識別できない。鏡もない世界。自身の形相をうかがい知るにはこの場所から逃げることしかなかった。逃げて、逃げるのよ。わたし逃げなきゃ。歩けない。縄の下着と薄手のショーツ。桃色の乳首にはピアスが施されていた。

「なあ、セイラ。最近、変わったな――」

え？　どこが？　だから、顔つきだよ。ああ、そう言うことね。くすくす笑う。なにがおかしい？　いえ、何でもないわ。そういえば最近ご無沙汰だな。はるかも寝ているし、いいだろ？　だめよ、しばらくしたくないの。どうしてだい？　とにかく、今日はしたくない。セイラは焦っていた。体中のいたるところに縄で縛った跡がある。それと尻には鞭の痕跡がくっきりと浮かんでいた。桃色の乳首にはピアスまでしている。おいおい、もう二ヶ月もしてないんだぞ。しかも突然だ。セックスレスにでもなったのか？　それとも浮気しているのか？　不倫か？　どうなんだ？　違うわ。じゃあ話すけれど、実はいうとね、牧師さんに言われているの。セックスはたまにしておいた方がいいって。その方が旦那様もお喜びになられるって。ほら、わたしたちってマンネリ化しているじゃない？　それについて相談したのよ。どうしてそんなことを他人に相談する？　恥ずかしくないのか？　まるで俺が恥さらしじゃないか！　違うの聞いて。わたしはね、懺悔を受けたのよ。だから牧師さんではなくて神にのみ相談したことなの。牧師さんが発したことは神の声でしかない。それについて理解できるかしら？　よく解らない女だな。教会っていうのもほどほどにしておかないと財産搾り取られるぞ！　宗教ってのはそう言うので運営していると聞いたことがあるしな。これっぽっちも財産なんてないけど、気を付けてくれよ。はいはい、分かっています。今夜はそれで切り抜けたと思った。そうではない。明君が強引にリープキスをしてきた。セックスの合図である。彼は相当したかったのだろう。ブレーキが壊れている様子。もはやストップは利かなかった。セイラは服を脱がされると胸を隠した。乳首のピアスだけは見られたくなかったのだ。しかし時は既に遅かった。どうしたんだ？　この跡は。縄か？　それと乳首のピアス……。おまえまさか――！　思い切りよくビンタされる。その痛みさえも快楽に感じる体になっていることにセイラはようやく気が付いた。はしたない女。はしたない女。

家庭崩壊は間もなく。そのまえに明君はやりたいことをやるつもりだったのだろう。セイラの体をこっぴどく痛めつけた。彼女は耐えた。セックスはもはや暴力と両立してあるようなもの。毎晩、調教される。教会へは行かせてもらえなかった。そうでもなかった。2LDKの住まいにSMができるほどのスペースは作れない。ましてや娘のはるかちゃんがいる。明君は自分も教会へ通い牧師と共にセイラを痛めつけることに徹した。彼も一人前になっている。世帯主ということも追い風となって休日シフトを日曜で取れた。明君にセイラはどう映っていたのだろうか？　もはや妻ではない感覚だっただろう。そして理性はぶっ飛んでいたに違いなかった。それもそのはず。そうでなければ牧師と共に彼女を調教

しようなどと考えるはずがない。普通ならば、娘を連れて離婚だ。そうならなかったのはセイラへの未練だと彼女は思った。嗚呼、彼はこんなにもわたしを愛してくれていたのね。それなのにわたしったらマンネリを良いことに懺悔するだなんて。いけない女、酷い女。

3 Play sex はたまらないと思った。実際、絶頂の極みのような世界だ。調教部屋の中はラブホテルに漂う密交の汗臭さがそのまま再現されたように充満している。それはつまり興奮剤ともいえるフェロモンの香りがエンドレスに脳内覚醒させているのと同じようなものだった。三人は狂った。獣の性行為のようなものだ。ここに法律など存在しなかった。あたかも女の黒人奴隷が白人のご主人様に買われたようなもの。

「ひぎぃぃぃ――！」

おまえはもう逃げられないんだよ！　ほうれっ！　旦那さん、まだまだ甘いですな。こいつはこうやるのですよぉ！　ほうれっ！　愛の鞭に蝋燭ちょんちょん。それはそれは至福の時間。セイラは上目使いになって涙を流していた。勿論、口元はにやけている。正にただのクレイジーミルクセーキだった。いっひっひ♪　わたしの毛穴から出る甘い甘いミルクセーキをどうぞ御免あそばせ♪

礼拝中はリモコンバイブで調教だ。傍には、はるかちゃんがいる。喘ぎ声など出せない。狂った奇声も発せなかった。嗚呼、お母さん。おかあさん。あなたはこう言うことをわたしの隣でしていたのね。なんということなんでしょう。結局、わたしは母の二の舞になってしまった。それは許されることかしら？　少なくともわたしにはご主人様が二人いて、その中に明君がいる。お母さんは牧師さん一人だったのでしょう？　それは違うのかしら？　意識が遠くなってゆく。セイラは失禁をして気を失った。

とある平日のことだ。ランジェリーはもっといやらしいやつがいいかしら――？　明君が購入したSM専門雑誌を一人で隠し読んでいる時、思った。途中途中で下着やら何やらの通信販売広告が目に留まったからだ。いまや明君のことをそう呼んではいけない仕来りになっている。いつでもどこでも“ご主人様”と呼ばなければならない。たとえリンガーハットでもそう呼ばされた。娘のはるかちゃんにはそれが何故なのかまだ分からない。あと十年もすればこの意味が娘にもわかるようになってくる。そのときの恥じらいも悦びとして受け止めるのでしょうね。わたしは本当に痴女だわ。明君は娘に手を出さないだなんてあるのかしら？　今の狂った状態なら彼女にも危害が加わるでしょうね。それだけは避けなければ。やっぱりこういう事はやめましょう。SMプレイも潮時。もう終いよ。

「何を言ってるんだ！　楽しみはこれからじゃないか――！」

「そうですよぅ。懺悔はまだまだこれからです」

今週の日曜。セイラの言い分は通りそうもなかった。彼女は浴びせられる鞭打ちと罵倒される怒号の中で強制的にマゾヒストの快楽を観た。ほとばしる鮮血には酷い汗が混じっている。口に嵌められた猿ぐつわの空気口からは唾液がいやらしくも淫らにしたたり落ちている。嗚呼、わたし。わたしは誰なの？　そんなことも考える余裕は一切ない。屈辱的で成敗的な懺悔とはまさにこのことを言うのだろう。魔女狩りのようなSMの後に思う事はそれ。

SMは次第にエスカレートしてゆく。気が付けばクリトリスにまでピアスの穴をあけられる始末で、おおよそ痛みの快楽には不自由しなかった。野外調教ではそのピアスと乳首ピアスをつなぐチェーンが施される。やることなすことすべてが羞恥プレイだ。セイラはとことん追いつめられたし、むき出しになった。嗚呼、わたし。こうして堕ちてゆくのね……。自分では止められない。この地獄快楽は一体何なのか後先にもわからなかった。酷すぎる

ご主人様たち。哀れな雌豚、性奴隷。聞こえはいいかもしれないが、エクスタシーを感じるかもしれないが、そうではなかったということ。極み中の極みの中で狂った涙とよだれが交錯していた。いっひっひっ！　クレイジーミートソース。どうぞ召し上がれ。もはや家畜化したセイラに人権など存在しなかった。やがて行き着いた先は糞食。越えてはいけない一線へたどり着いたと感じた時、彼女は思い切りよく奇声を上げた。重度な精神疾患へ陥ったのはそれから。

いぃひっひっ――。病院の待合室で奇声を発する。ここは精神科だ。ネジが外れた患者は他にもいたし、別に珍しくはない。入院が必要ですね――。医者の第一声はそれ。あっひゃっひゃっ！　わたじ（わたし）もう帰れないぃ！　ひゃっひゃっひゃっ。精神分裂病は深刻だ。この病気のことを別名「統合失調症（とうごうしっちょうしょう）」と呼ぶ。そんなことセイラはどうでもよかった。半分の意識がザナドゥへ飛んでいる。それをどうにしかして現実へ戻さなければならない。医者の力では薬治療法しか望みはなかった。リスパタールにインベガにジプレキサ。骨髄へ特大注射も打たれた。嗚呼！　ぢくびにもちゅうしゃじでぇ（乳首にも注射して）！

明君と牧師はいない。知らぬ存ぜんでいつもの生活を送っていた。それについてセイラは意識を向けることができない。狂っているからだ。あへ？　あなだはだれ（あなたは誰）？　ごごはどこ（此処は何処）？

酷いありさまだった。格子と言っても鉄格子。床はコンクリートで端にトイレ便器とベッドがある。食事と散歩こそ外へ出れたが、一日のほとんどが監禁室の中。担当医と看護師はなかなか回復しないセイラを見捨てたりはしないが、客観的に距離を置いている。プライベートは許されない。全ての行動がビデオと紙で記録されていた。

あれから三か月が経とうとしている。彼女は非常に強力な薬の量で意識が朦朧としていた。よだれも垂れっ放し。副作用で体重が増え肥満体型。もはや昔のセイラは何処にもなかった。”とりあえず一般病室へ移しましょう。”奇声を発しなくなったことで、だった。ようやくだ。一般的な治療はこれからやっと始まる。その段階まで来た。これから二年ほどかけて薬の調整をしてゆく。それから様子を見て退院だ。勿論、通院は絶対条件としてある。症状が悪化すれば強制入院だ。その契約書にサインをしなければならない。

半年が過ぎたころ、敷地内にある広い庭への外出が許可された。おもむろにガットギター（クラシックギター）を弾く若者がいる。ソロギターではなく弾き語りというやつだ。歌を唄っていた。何故にアコースティックギターではなくガットギターなのか？　そんな事には興味が無い。セイラは楽器に疎いので種類を知らなかった。ストロークで音を奏で歌う彼は「長渕剛」の「さよならの唄」を繰り返し繰り返し演奏していた。朦朧としているセイラにはよく解らなかったが、生気の抜けた表情をしながらも、その曲に合わせてパチパチと手拍子をした。よだれは垂れていなかった。

彼女は売店へ行きマルボロメンソールとライターを購入してから喫煙所でそれを吹かした。タバコの味にはまだ慣れていないが気晴らしにはなる。小遣いは担当の看護師から受け取っていた。その看護師は明君から毎月一万円ほど預かっており、それで生活に必要なものを用意している。例えば石鹸だとか歯磨き粉など、だ。入院費などは自立支援を頼っていた。しかし明君は役所手続きこそするが、面会をしない。酷いありさまの彼女を見るのが辛かったのだろう。セイラは障碍者手帳一級である。娘とも会っていない。

離婚の話が出たのは二年後の退院間際。体調は順調に回復しており、障碍者手帳も三級まで落ちていた。”娘のためにも離婚してくれ。”それを聞いたとき、大粒の涙が出た。裏切

られたと思ったし、心底、ご主人様二人を恨んだりもした。けども、これもそれもセイラの痴女的本能から生じた悲劇だったと考えると黙ってサインするしかなかった。おかげで退院は白紙撤回となり、さらに二年入院することになった。

退院後、セイラの帰る家は何処にもない。あるのは家を売り払った預金だけだ。それもあるのかないのか怪しいもの。通帳はすべて明君が預かっている。もしかしたら養育費として没収されたかもしれない。それでもかまわないと思った。彼女はそれに頼る気になれない。親の財産など糞くらえだと思ったからだ。わたしがこうなったのも遺伝子のせいよ。それと環境。小さいころからセックスと縁があった。それはたとえ喘ぎ声だけだったとしても、幼児には強烈に響いたもの。生活費に関しては、幸いにも障がい者年金がある。貧乏暮らしになるが、細々と一から人生をやり直そうと考えていた。とりあえず明君の実家へ行って印鑑と通帳を取りに行かねばなるまいて。はるかには会わせてもらえないでしょうけど、今のわたしを見せたくないという気持ちもある。もう少し病気が良くなってから、彼女が大人になってからでも遅くはないわ。そんなことを思った。それじゃあ明君にも会いたくないわね。向こうの親に話を付けましょうか？　そうね、そうしたほうがお互いにいいのかも。

むこうの親元から預金通帳と印鑑を受け取る。面倒なので姓を変えるつもりはなかった。なのでそのまま使用できる。思った通り通帳からお金はそっくり抜き取られていた。残された預金額はアパート代の足しになる十五万円だけだ。抜き取られた日付は離婚前日。障がい者年金は離婚後にＡＴＭから没収されていた。

セイラは退院前にケースワーカーから県営団地を勧められていた。優遇されて部屋を用意された。紙で住所と地図を受け取っている。そこに向かう途中でどこかの飼い犬に吠えられた。精神が弱っている彼女にとってそれは相当な恐怖を感じた。慢性的なうつ症状も深刻だということ。それと社会不安障害。リスパタールのほかにパキシルも処方された。途端に肝臓が血液検査で引っかかるようになる。酒は飲まないでください。死にますよ。釘をさすように言われた。

障がい者年金十五万円。自立支援と県営団地住まいでなければ到底やりきれない金額だ。上等なベッドもなければエアコンもついていない。真夏は扇風機で涼しみ、真冬は炬燵で温いだ。一人暮らしは慣れてなかったものだから、とても寂しく感じた。今度、拾い猫でも飼おうかしら？　考える。でもエサ代が大変ですものね。キャットフード？　それすら買ってあげられないもの。余裕がないのよ。

衣類は暫く購入していない。バス停二つほどで衣料スーパーがあるのだが、肥満体型から戻った体と年齢は、古着と言う馴染みの服を好むよう。それから十年。セイラの年齢は四十歳。実にあっという間。三十を迎えてから早いと思ったが本当にそうだった為に、ため息も深くなる。わたしこのまま死ぬのかしら？　はるかに会いたいわ。もう良いでしょう？　明さん。娘へ会いたい気持ちは募るばかり。しかしながら彼女は新しい家庭の元に居る。恐らく父子家庭ではないだろう。女の直感がそう思わせた。セイラは息が苦しくなり思わず詰まった。嗚呼、はるかごめんね……。ごめんね……。

考えてみれば、娘は成人式を終えているころだ。もしかしたら結婚をしているかもしれない。大学へは進学したのかしら？　高校はちゃんと行ったの？　不安と期待が交錯する。情報が一切耳へ入ってこない絶縁状態の中でこれらを考えることは精神的に負担がかかる。考えないようにしても親だもの。考えて当然じゃないのかしら？　それとも考えるわたしがいけないっていうの？　担当医に泣き付く。それに関して先生は答えを慎重に選んでい

るかの様子。
所詮、わたしは天涯孤独に生きてゆくのだわ。嗚呼、なんてことなの？　一体なんてことなの――！　狂い叫びたくもなる。しかし、許されなかった。ある意味、保護観察状態（重度の疾患へ戻れば強制入院となる契約を交わしている。）の身では、騒ぎだてる事とは警察への通報、強制入院、につながるということ。それについて頭へしっかり叩き込んでいる。とうとう叔母さんになって余命も半生ほど。再入院は御免。病院へ叩きこまれればすべての希望が失われてしまう。わずかな可能性を信じたかった。はるかと再会すること。話をすること。ハグをすることを。
「何か外で行う趣味でもやってみませんか？　気持ちが晴れるかもしれません」
担当医の口調は真剣だったが柔らか味がある。それについてセイラは好感を持つようになっていた。趣味、か……。徒歩で帰宅する中、考えてみる。趣味と言えばカメラ……。そうだ！　カメラがあるじゃない！　でも……。そうよね。フィルムを買う余裕もないんだったと諦める。ひとつため息をついた。――お金のかからない趣味。そんなものあるのかしら？　走ることとか？　まあいいわ。それも悪くはないもの。とりあえず、ウォーキングすることを趣味としてやってみよう。あら？　もうすでに歩いているじゃないのかしら？　うふふ♪　自転車を買う余裕もないものね。バス代も節約したいし、病院は近いもの。それにしても静かな町だわ。リハビリにはもってこいね。
セイラの住まいは明の実家から二町分はなれている。あの港町よりも田舎寄り。病院は丘の中にひっそりとある。盆地だ。だがしかし、そんな山の中にある町というわけでもない。バスもあればタクシーも普通に拾えるほどの交通量はある。テナントの少ない町と言うだけの話だ。何々商店がまだまだ現役と言えばよいだろうか？　スーパーも勿論あるのだが、店舗が少なかった。勿論、デパートなどない。ラーメン屋すら無かった。それは大げさすぎるが、あるのは住宅だけ。そんな田舎町だ。
これまで新しい出会いがなかったわけではない。あのギター青年と寝たし、入院中世話になった看護師とも、やった。向精神薬は覚醒作用があってエクスタシーを感じるのだが、鎮静作用のある精神薬も処方されていたために逝くことが無かった。まるでヘビの生殺し状態と言っていい。オナニーは欠かせなかった。
新しいご主人様――。乳首とクリトリスのピアスは今でも装着している。心の準備は万端だった。あとは優しいご主人様を探すだけ。糞食をさせないご主人様へ忠誠を誓うの。それってとっても素敵でしょう？　それでね、ご主人様はいうの。俺だけのシンデレラになってくれって♪　うふふ♪　さあ、乳首のピアスを引っ張りなさいな。クリトリスのピアスを引きちぎりなさいな。
どんどんどんどん男を欲する。太くて逞しい男根を欲した。わたしのサイズに合う極太ペニスは何処かしら？　もしかしたらあの御爺ちゃん逞しいかも♪　御爺ちゃんっていうとアナルを好みそうだわ。アナルはもう御免なさい♪　わたし、うんこちゃんは出したくないの。白くて濃厚なザーメンを垂らしたいのよ♪　わかるでしょう？　ご主人様。
「嗚呼――！」
セイラはとうとう見つけた。新しいご主人様を。太くてたくましい男根を、見つけた。意外にもご近所さんのニートお兄さんがそれ。親の筋かじりな浪人生である。いや、もはや浪人生ではないらしい。大学はあきらめたと話していた。金銭的な理由でだ。一回きりのチャレンジだったらしい。それしか親は持ち合わせてなかったという。それもそうだろう。県営団地に住んでいるものは貧困世帯だ。所得が多い層は入居できない取り決めにな

っている。若しくは家賃がマンションよりも高額になる為、申し込みは一切ない。
男の名前は徹（とおる）。無精ひげとロングヘアーが印象的だ。それに眼鏡もかけている。一見するからにお宅のニートだと分かった。徹のチャームポイントは太い男根。それだけである。身長もあまり高くなくてセイラと同じか少し高いくらいだったものだから、おおよそペニスは小さそうに見える。しかし、脱ぐと凄かった。彼は変態中の変態なのだ。アダルトビデオがそうさせたのか、アダルトコミックスがそうさせたのか、それについてどうなのかわからないが、とにかく現実ではありえない変態プレーを強要した。それがマゾヒストのセイラにはちょうどよく感じたのだが、次第にエスカレートしてゆく徹のプレーに何かしら不安はあった。そう、あの毎日。SMプレーは御免なの。
「乳首とクリトリスにピアスなんかつけているくせに何をいまさら！」
嗚呼、そうではないの。わたし、SMプレイを好んでいるわけではないのよ。でも待って。それならどうしてわたしは〝ご主人様〟だなんて呼ぶのかしら？　考えてみれば、わたしの羞恥プレーはもう再開していたの。あの日にノーブラのノーパンで玄関を出て居なければ徹君とは会話してなかったし、こんなことにはなっていなかったわ。彼は直ぐに気が付いた。それもそうよね。あの時、わたしのスカートはミニだったんだもの。上着は乳首の目立つTシャツ。ほんとうにわたしはどうかしてる。まだ痴女的本能が残されているだなんて。あの日々のことを忘れてしまったのかしら？　そのおかげで精神病気になったんじゃない。何がいけなかったのって、痴女だからこそ行き着いた先だったのよ。わたしは元に戻りたいの？　もっと病気を酷くしたいの？　再入院したいのかしら？　でもちょっと待って。わたしは確かにSMはもう御免だと言った。張り切っているのは徹君だけなの。だってそうでしょう？　わたしはもう自由でいたいの。静かに暮らしたいのよ。性の目覚め？　ありえないはずなのに、また同じ過ちを犯そうとしている。それってとても惨めよね。徹君、慰めてくれるかしら？
「なあ、今日で何日目になる？」
「はい、五日目です。ご主人様ぁ♪」
パンティータイプのリモコンバイブを装着してから五日。セイラの膣はもはや獣のように酷く臭っていた。徹はそれがたまらないのか、彼女を風呂へ入れることなく全身を舌で舐めまわした。臭い女だ。酷いバギナだ。そう発してはビンタを張った。おい、聞いているか？　おまえは腐ったミカンなんだよ！　俺に拾われてうれしいか？　はいぃ！　ご主人様ぁ！　SMはあれほど嫌だと言っていたのに体は素直だ。いたぶられてエクスタシーを感じるセイラは痴女。そんなことは分かっている。彼女は痴女だ。変質者だ。変態だ。基地外でもある。だからなに？　もはや糞食さえなければ構わないとさえ思った。どうぞお好きにしなさいな。わたしの体を滅茶苦茶にしなさいな。だけどね、わたしはあなたの理性を崩壊させてやるんだから♪　それがわたしからのお仕置きよ♪
「こんなにガバガバになりやがって！　ほうれ！　大根の味はどうだ？」
「はいぃ！　美味しいです、ご主人様ぁ！」
膣は拡張されてフィストファックだってできる。もう通常の男では彼女に満足はしないだろう。徹はそれが狙いだったのだろうか？　セイラにはわからなかった。狂った二人の行きつく先は最終処分場。糞食プレイ間近だ。わたし、どうなっちゃうの？　嗚呼――！
ポークランチョンミートセックスは酷くなってゆくばかり。もはや豚同士のセックスだった。いつしかセイラは白色のふんどしを着けさせられたことがある。前掛けには〝家畜、性奴隷〟を書かれた。ブラは外している。桃色の乳首にはゴールドのピアスが光っていた。

その状態でデジタル写真を収めたのだ。誰なのかわからないように襷で目隠しはされている。ニートの彼はパソコンを持っていてオンラインにつながっていたものだから、そのデジタル写真を自身のウェブサイトで自慢げに公開した。俺の女だと。無修正アフィリエイト（広告）サイトだった。そこでは掲示板もやっている。それのトップ固定（最上段に固定表示）にも写真を載せた。瞬く間に人気へ火が付く。一日のPV数は十億回を行った。広告に影響が出ないわけがない。広告の収入は一日当たり十万。一ヵ月で三百万である。

「もっと大胆なポージングしますから、早く大きいおちんちんください。ご主人様ぁ♪」

とても淫らで、激しくて、咽て、痛くて、気持ちの良い。それでいて快楽、官能。極楽浄土とはこのことを言うのかもしれないわ。セイラは思った。だけどもここは地獄の三丁目。そう、筵の山はすぐそこにあるのである。彼女はそれが怖いとも思った。大変恐ろしかった。目を瞑ってみる。気持ちが良い以外に何も見えない。嗚呼、これが地獄というものなのね？　蜘蛛の糸は降りてくるのかしら？

彼氏の精子中出しには危惧するものがある。赤ちゃんができたらどうしよう？　だとか、わたしたちに子供は必要ないわ。だとか考えた。それにね、許されることではないの。わたしはバツイチ。一度の離婚経験がある。もっと家庭的な男性が欲しかった。愛妻家が欲しかった。前の旦那である明さんは良い人だったわ。狂いだすまでは。だけども歯車はおかしくなっちゃったの。今回もそれの二の舞になるはずだわ。だから結婚はしたくないの。子供だって欲しくないの。でもどうして？　どうしてなの？　こうして生理が止まっちゃったってことは妊娠しているということなのでしょう？　いつ話す――？　毎日そればかり考えるようになる。もはや調教どころではない。感じて喘いでいる場合ではないのだ。嗚呼、どうせまた同じ悲劇を繰り返すのでしょうね。繰り返し繰り返し思う。あなたは良いパパになんかなれなくてよ。それを一番よく知っているのはわたしじゃない。確かに財力はある。広告の仕事が順調だ。だけれどいつ駄目になるかわかったものではない。それに彼は浮気をするだろう。セイラなんか捨てられてしまうかもしれない。いや、捨てるはずだ。そのとき財産分与をちゃんとしてくれるのか？　そこまで思考は回らなかったが、とにかく子供を産むことに関して不安でいっぱいだった。彼はわたしのことを家畜としてしか考えていない。そう思うのも無理はなかった。もう別れてしまいましょう。そう交錯するけれど、なかなか言えたものではない。二人はどっぷりと性の快楽に溺れてしまっているから。だからなに？　そうよ。子供を産まずに結婚もしなければいいじゃない。わたしは結局、新しい世界が怖いだけなのよ。そうでなかったら何とも思わないわ。最高じゃない。でも、おろす金があるわけでもなかった。十万はセイラにとって大金である。彼から貰うわけにはいかない。妊娠がばれてしまうからだ。どうすればいいの？　やっぱりちゃんと相談するべきかしら？

「産めよ。俺たち結婚しよう」

え――？　考えたくもない答えが返ってきたとき、一瞬だが寒気のようなものが走った。とてもとても恐ろしいことが始まろうとしている。そう思ったし、この男は軽率に何を言うのだ？　とも感じた。だってそうでしょう？　仮に一緒になったってご主人様と性奴隷の関係は変わらないの。これってどういう事かしら？　つまりは対等でない。夫婦げんかも出来なければ、わたしからあなたを抱きたいともいえない。娘を、もしくは息子を連れ出して散歩行くときだって首輪とチェーンを着けさせられるのはまっぴらごめんだわ。そんな恥ずかしいことできるわけがないでしょう？　それでも彼ならお構いなしよ。絶対に命令するに決まっている。そのときどうすればよいのかしら？

「ご主人様、ひとりで散歩へ行かせてください――」
散歩は気持ちが良い。昼間では久し振りの散歩だ。しかも一人ときた。命令されることもおしっこを電柱にすることもしなくていいのよ。素敵なものだわね。思う。嗚呼、わたしったら今までなんに対して感じていたのだろう？　これまでのことは快楽とは別世界なのよ。そんなんじゃなかったのだわ。だけども体が反応してしまう。乳首が反応してしまう。バギナがよだれを垂らしてしまう。こんなことってあるのかしら？　わたしは痴女。性奴隷。ええ、確かにそうね。でも、わたしは逃げなかった。それが駄目だったといえばそこまでだけれど、でも一直線に進んできたのですものね。だからなに？　それと誇ることとはまた別問題よ。そうよね。ねえ聞いて私。わたしは私。わたしは痴女であり性奴隷。ちょっと頭をひねれば脱出することは容易かも知れないわ。逃げましょう。逃げるのよ。でもお金がないわね。住むところだって見つからないし、いっそのこと彼を家の中に入れないことくらいかしら？　彼はもう上がり込んでいる。一緒には住んでいないけれど、半同棲みたいなものね。嗚呼、中途半端だわ。本当に半端者。早く彼に別の女が出来ないかしら？　何故にわたしへ夢中なの？　どうかしているでしょう？　わたしは普通の容姿。決して恵まれているわけじゃない。痴女っていうのはそれほど魅力があるのかしら？　そんな女と結婚したいですって？　やっぱり彼はどうかしているわ。
公園に着いてから細長いベンチへ腰かけてみる。やや遠方に目をやった。鬱蒼と茂った藪が見える。その上空にはカラスが飛んでいた。ラジコン飛行機をやるような広場しかない公園。それでもなんだか丁度良く感じた。くもり空なためか、太陽はおぼろに柔らかく、残暑と言っても辺りは涼しく感じた。清涼飲料水を購入している。そのプルタブを開いてからサワーをひと口ふたくち流し込んだ。三ツ矢サイダー。少しだけげっぷを吐いてみると、頭のてっぺんが熱くなるのを実感した。
「こんなわたしが再婚、か……」
信じられないような気持ちでいっぱいだ。セイラは障害者手帳を持つ立派な障がい者である。服用している薬の量も少ないとは言い切れなかった。恐らく胎児に影響があるはずよね。そんなことは分かっていた。だけども日増しに“産みたい”という気持ちが大きくなってゆくのに気が付くと、“嗚呼、愛しい子。愛おしい子。”呟く始末で、それについてはゲノムの段階で母性本能が働いているものであることが明白であった。いけない。タバコを止めなくちゃ……。ゆっくりと立ち上がる。ゆらゆらとゴミ箱へ向かうと安タバコをライターごとポイ捨てした。少しばかりのまともな時間。休息。
「子供が産みたいです。ご主人様ぁ♡」
正常な心理状態は遠い向こうへかい離して、セイラは再びネジが一本取れた状態で発した。すると、ご主人様は喜んで“そうか。”と返してくれた。それじゃあ結婚するか。子供はたくさんほしい。いいだろ？　はい、ご主人様ぁ♡　乱れた関係はそのままに結ばれると言う事はとても恐ろしい。そんなことはどうでもよかった。子供を産むために忠誠を誓う。子供を育てるために巫女となりて性奴隷となす。セイラの精神はそれでよかった。良いと思った。

＊

妊娠六か月が過ぎたころ、赤ちゃんの性別が分かるようになる。女の子。嗚呼、なんと言う事でしょう。まさかとは思ったけれど、やっぱり女の子だなんて。どうしてこうなるの？

だってそうでしょう？　わたしは性的虐待の恐れがない男の子が欲しかったの。もしも容姿の綺麗な女の子が生まれてみなさいな。わたしと同じ性奴隷にされてしまうかもしれない。そんなの嫌！　ぜったいに嫌よ！　いっそのことピルを飲んで流産しようかしら？　いいえ、駄目よ。薬剤師が妊婦に売るわけがないじゃない。そもそも薬局にあるのかしら？　病院へ行かなければ駄目なのではないの？　それじゃあ、あの小説の物語のようにハンガーで赤ん坊の頭をぐちゃぐちゃにしてしまって中から取り出してみようかしら？　それも駄目ね。じゃあどうすればいいの？　わたしにどうしろっていうの？　ねえ神様、どうしてなんですか？　どうしてわたしにそんな罰をお与えになるのでしょう？　めっきり教会へ行かなくなったからですか？　でもね、それには理由があるんです。わたし、もう元に戻らないから。わたしの精神は元通りにはならないの。お分かりでしょう？　さあ、私に明確な答えを教えてくださいな。さあ！

腹は膨れ始めている。これをどうにかへっこめるには事故を起こすしかないと思った。そうよ、わたし交通事故に遭って死んでしまえばよいのだわ。胎児ごとあの世へおさらばするの。素敵でしょう？　誰がそうさせたのかって？　それは紛れもなく明さんと牧師じゃない。わたしの本能はあの時に開花してしてしまったのよ。痴女的本能というやつが。今の旦那さんのせいなんかじゃない。全ては作られた現実だったの。わたしの運命がそうであったかのように。

セイラは病院近くの国道で飛び出した。しかし、轢かれなかった。もともと車の通りは多くない。相手が車線を変更すれば容易にかわせた。ぽつんと立ちすくむ。馬鹿らしくなって発作的に笑いが起きた。わたしってやっぱり馬鹿じゃない。馬鹿だから痴女になんかなるのよ。そもそも痴女ってなにかしら？　まるで現代病だわ。可笑しい。もっともっと笑い転げたくなる。思考が吹っ飛んだ。統合失調症の症状が出る。ひゃっはっはっ！　と、笑い転げた。よだれを垂らして発狂した。独り言をぶつぶつ発してひゃっひゃっひゃっと狂うその様は、まるで戦争体験でおかしくなってしまったアメリカ兵のようなものだ。ハンバーガーヒルは此処にもあってよ。ひゃっはっはっ！

飛び降り自殺を試みたこともある。必ず止が入った。いつも誰かがいるのだ。統合失調症は酷くなるばかり。薬の量も元に戻ってゆく。胎児に影響を与えていることは確か。服用するたびに子宮辺りが痛くなる。結果的に流産。嗚呼、嗚呼、嗚呼……。そんなことわかっていたことではないのかしら？　でもね、酷い話でしょう？　いったいわたしが何をしたっていうの？　痴女になると言う事はそれだけリスクが高いということかしら？　これって絶体絶命よね。わたし、もう生きてゆけない。だってそうでしょう？　もうおかしくなってるのだもの。全てが破壊されてしまっているのよ。どうして生きられるっていうのかしら？　酷い話。酷い話……。もはや涙も枯れてしまっている。余分が無かった。水を補給してみる。なんだ、涙は赤血球のない血なのか？　それに気が付くこともなく、水分を補給した。補給しまくった。

容赦のない調教はいまだに続いている。泣いてみても叫んでみても快楽に喘いでいるからだと判断される始末でどうにもならなかった。子供を下ろしたというのに彼は狂っている。わたしだってそう。本当は乳首のピアスを引っ張られて感じているのだわ。なんていけない女なんでしょう。嗚呼、マリヤ様。こんなわたしをお許しくださいませ。わたしは、わたしは……。多量に潮を吹きだす。もはや尿。小便だ。お漏らしだ。いけない、わたしったら大人のつもりでいても本当は子供だったのね。いたいけな少女セーラ姫。あれはたしか小公女だったわ。あたしなんか溝水のネズミでしかない。ドブネズミ。臭くて汚くて

いつも怯えている腐った死体なのよ。わたしは生きていないですって？　そうよ、死んでしまっているの。もう駄目なのよ。わたしは二度と助からない。だってそうでしょう？　アクメ顔で失神する。此処は何処わたしは誰――？

離婚は必然的ともいえるけれども中々そうもいかない。彼とセイラは性の果てで共にいる。この世界で頼る人間などなかった。負のスパイラルとはその事で、それはまるでループしたエンドレスレーンのよう。次は終着駅でございます。やっとたどり着いたか？　そうではなかった。ザナドゥ、ザナドゥでございます。

性に溺れたのは人生最大のミステイク。理性が崩壊したのは自分自身が崩れゆくということ。何が良くて悪いのか今なら判断できる。過去には戻れない。だけども逃げ出すことは可能。やはり別れるしかないのだ。大好き、愛している、と、気持ちよいは異なるのだから。快楽とは所詮、大人の遊びでしかない。それは愛ではなかったと気づいたセイラは荷物をまとめた。

バスを乗り継いで市街地へと出る。懐かしみのある光景だ。昔、明さんとよく来たんだっけ……。あのころは楽しかった。新鮮。青春のようでもあった。今回、離婚届は郵便で送りつけるつもりだ。印鑑はしっかり押してある。あの人ったらきっと驚くでしょうね。だって途端に性奴隷が居なくなるんですもの。当然だわ。

この街に居候の宛てがあるわけではない。只、遠いかなたへ越す前に立ち寄っておきたかった。後程バスターミナルから北方向の田舎集落へと向かう予定である。預金はご主人様から預かっていた通帳から半分くすねていてだいぶ余裕がある。それが犯罪なのかどうかは知らないけども、少なくとも慰謝料みたいな気持ちで盗った事は確か。

カメラのキタムラへ寄ったのはチェキのフィルムと一万円台の中古ノートパソコンが目当て。これからさらに田舎の町へと越す。それにはインターネットは欠かせないと思ったし、通販を利用してチェキのフィルムを購入しなければならない。遠い遠い彼方へ逃避行するには必須アイテムのようなものだと思った。ついでにプロバイダーのチラシも入手しておく。そこは抜かりない。

これまでのわたしはご主人様に撮られた調教の姿ばかりネットに晒してきたけれど、これからは風景をブログへアップしてゆくのよ。掲示板はいらないわ。早く忘れてしまいたいの。いたいけなわたしのことを。痴女姿の自分を。もうセックスとはおさらば。それで病気が良くなれば叶ったりだわ。本当に静かなところへ越すのよ。人も住んでいないようなところへ。でも、そんな場所にオンライン環境なんて整っているかしら？　線は引かれているの？　でも、今の時代はきっと大丈夫よ。繋がらないところなんてない筈だわ。最悪、携帯を使えばいいじゃない。発作的に症状が出る。

頑なに独り言をつぶやいていた。バスの中で。今、世界は別にある。黄ばみかかった空模様。雨雲ではない黒い雲が浮かんでいる。なんだろう？　そう感じた。その光景に赤い鳩が飛んでいて不可思議だ。白い虹はぐにゃりと曲がりくねっている。けったいな代物だ。その絵を見た人間はそう言うに違いない。それほどにこの世界はおかしかった。さあさあ、御ねんねの時間ですよ。いっしょにお昼寝しましょうね。ゆりかごの赤ん坊を見やる。顔が鬼の仮面をかぶったように恐怖じみていた。これはサスペンスなの？　ミステリーなの？　サイコパスかしら？　それともホラー？　分からない。まったくわからない。

セイラは叫んだ。嗚呼――！　バスの乗客は少ないが、ほとんど全員が彼女へ顔を向ける。おまけにバスの運転手まで大きなバックミラーでこちらを目視しているではないか。たまらずもう一度叫ぶ。嗚呼――！　いっひっひっ！　けったいな世界じゃて。けったいな世界

じゃて。
　北区にもバスターミナルがある。小規模だが、ここからさらに細かく路線があるのだ。セイラは正気に戻っていた。控えの紙を確認してみる。安曇野森（あずみのもり）へ行くには105番線に乗ればいいんだったわね……。乗り換えの始発を待つ。四時間に一本のバスだった。あと二時間ばかり待たなければならない。彼女は腕時計のbabyGを見た。色は緑のクリスタル。お気に入りである。お腹が空いたわね……。バックバックにおにぎりを持参していたのを思いだし、そいつを取り出した。昆布佃煮のおにぎり。そのほかに高菜塩漬けおにぎり。色彩がきれい。腰かけているベンチはコカコーラの社名が入っている。木製。景色は何もない。只、緑があるだけ。空気はきれい。太陽は頃合が良く、とても気持ちが良かった。セイラは両足をトントンと弾ませながら、おにぎりを食べつくした。
　十四時ころから揺られること一時間の場所に田園の村はあった。とても寂しそうな雰囲気に飲まれそうになる。いけない、負けてはいけないのだわ。思わず拳を握りしめた。停留所は小さな商店の前にあった。店内へ入ってみる。好物の三ツ矢サイダーが飲みたい気分だった。それとタバコも切らしている。ごめんください――。
「おや、見ない顔だぎゃ？」
「南から来ました。あの、タバコありますか？」
「ここは観光村じゃないぞい。まさか移住がや？」
　セイラはやりとりに嫌気がさした。よそ者を干渉する癖はどの田舎も同じだ。警戒されてしまう。あまり歓迎されていないみたいだと分かった。お釣りは良いです。そう言うとサイダー瓶とタバコを持ち店を出た。まずはサイダーをひと口注ぐ。瓶なのでしごく美味い。続いてバッグからライターを取り出し安煙草へ火をつけた。味はまずいが吸えないことはない。マイナーの銘柄ね。この辺にしかないものなのかしら？
　住まいはあらかじめ手配している。一軒家の貸家。田舎なので中は広い。庭には畑までついていた。これで三万円は安すぎると感じたし、そんなものよね。とも思った。玄関は開いている。居間のテーブルに鍵は置かれていた。以前から空き家だったらしく、家具と床は高い響音を立てて軋んでいた。家電は新調してある。もう余生はここに住むつもりでいた。夏は快適そうだが、冬は覚悟しておかなければならないだろう。板張りの外壁は隙間だらけ。それにしても一人で住むには広すぎる。本当はアパートが良かったけれど、そんなものはない集落なものだから仕方がなかった。
　今日はもう一回商店へ行かなければならない。夕飯の買い出しのためだ。そう考えると憂鬱になる。さて、これから細かい計画を立てなければ。例えば通院のことだとか、そう言った事を考えなければなるまいて。病院は近くにない。この辺の人は何処へ行っているのかさえ分からない。それを商店の人に訊けばたやすいのだが、中々気恥ずかしいものがある。そうでもなかった。釣銭を受け取らなかったのは正解だったわね。セイラは思う。少しは警戒の目を緩めてくれたかしら？
　セイラは少しばかり体を休めてからあの商店へ向かう。太陽は落ちて夕暮れ時だけどもまだ開いていた。よかったわ。こんな田舎じゃ小さな商店でも助かるわね。さっそく笑顔を作って店内へ入る。ごめんください――。
「ああ！　昼来た人だっぺ？」
「はい！　覚えててくれたんですか？」
「釣銭受け取らねえんだもの！　当然さー！」
　警戒していない――。そう思うと元気になった。病院の話などは今後するとして、とりあ

えず夕飯の材料を買いましょう。何か世間話でもしたほうがいいかしら？　でも、わたし毎日セックスしかしてなかったから何を話せばよいのだろう？　すると、店主の婆ちゃんが〝夕飯の買い出しけ？〟と訊いてきた。はい、そうですけど。返すと〝こいつもってけ。それと、イノシシ汁あるからそいつも持ってけろ。〟そう発してから鍋ごと渡す寛大さに、ああ、ここの人は優しいのだな。と感じた。いい村だわね。夕食を一人でとりながら思う。店主とは仲良くなれた。これから先の生活が楽しくなりそうだわ。思わずウキウキと心が弾んだ。

「姉ちゃん、何処から来たんだ？」

標準語だが、なまりのある言葉だ。無理して使ったのだと分かる。本当は方言ではなしたいだろうに。今、田園の農道を歩いている。トラクター二台は通れるくらいの幅はあった。中学の野球少年団との出会いは、ひょんなことから。

「綺麗な姉ちゃんが田圃道歩いているんだものぉ！　誰だってぇ声かけるべさ！」

出くわしたとき、彼らは自転車に乗っていて、白い練習着から野球の帰りだと察せた。野球ができるほど集落に子供がいるわけではない。しかし着けていたのだ。それについてセイラはあまり深く考えなかった。

「野球部員五人しかいねえからよぉ、姉ちゃんも一緒にすんべよ！」

「でも、したことないし……」

「だいじょうぶだぁ。ピッチャーしてくれればよかっぺよ！」

「ピッチャー？」

「たま投げる人だべよ！」

商店へ着く。アイスバーをおごってやったら喜んでくれた。そう言えばこの村へ来てから精神病気が良くなっている。独り言は一人で物思いに老けているときだけだ。意識的にハッとなってこちらの世界へ戻れるようにはなっていた。ついでに夕飯の買い出しも済ませる。店主の婆ちゃんは相変わらず愛嬌が良かった。ここへきて二週間ばかり経つ。インターネットは回線が通るまで少々時間がかかるそうだ。しばらくは散歩ばかりになるわね。写真を撮りだめておこうかしら？　そうね、そうしましょう。

日曜日の野球練習は楽しかった。約束通り打撃ピッチャーをしてみる。打ちっぱなしのバッティングセンター最低時速設定よりもかなり低いスピードの球は、球児らにとって格好の餌食。次々にホームランをあてる。グラウンドは広くない。しかしホームランはホームラン。打者は満面の笑みを浮かべた。歓喜の声がセイラの耳に届くと、彼女も跳ねて喜んでみせた。お姉ちゃん素質あるぜよ！　だって、慣れてないのにストライク放れるんだもの！　まあ、下手（ソフトボール投法）からだけどな。うふふ〟　ありがとう。それじゃみんなで球拾いすっぺ！　だっぺだっぺ！

昼食はセイラが用意した。オードブルのような弁当だ。使い捨てのオードブル皿で持ってきた。鳥のから揚げに、魚肉ソーセージといんげんを合わせた天ぷら。巻きずしと厚揚げは定番だ。皆、喜んで完食してくれた。嬉しかった。水筒は持参させている。売店にキーパーは売ってなかったし、あったとしても二つあるオードブル皿だけしか持ち運べない。それはふたをして重ね二段で運んだ。自分の水筒は肩から下げた。中には三ツ矢サイダーが入っている。だけども失敗したと思った。昼食タイムへなるころにはすっかり温くなっていてまずく感じたのだ。やっぱりお茶ね。今度からそうしましょう。

午後からは球児らのキャッチボールと守備練習が始まった。セイラは休んで眺めているだけ。それでも楽しく感じた。嗚呼、本当にこの村は平和でいいわね……。ひとつ深呼吸

してから青空を見上げる。太陽がまぶしくて気持ちよかった。グラウンドの端にはブランコがある。彼女はゆっくり立ち上がりそこへ移動した。二股のチェーンで支えられている古タイヤの尻着きに乗ってみる。幅は狭いが小尻なので大丈夫。フィットした。上手いこと足を使って動かす。楽しい。ブランコは久し振りで楽しいのだ。なんだか懐かしい記憶を思い出す始末。あれは保育園の時の思い出――。明さんのことを君付けで呼んでたのよね……。

思い出を振り返っているうちに独り言をぶつぶつとつぶやいている。表情もネジが外れたようにけったいだ。ええっとぉ……、ご主人様はクラッシックバーガーで、わたしはマリッジブルー。そうよ、まるでハンバーガーに胃がもたれた花嫁みたいなものなのよ。それでこうでしょう？　それからそれから、ああでしょう？　これってなんなの？　わたしはいったい……。声が聞こえる。おまえは痴女なんだよ！　え？　その声って少年たちじゃない。どうして君たちにわかるの？　いやよ！　そんなのぜったいにいや！　何故に理やり服を脱がそうとするの？　あなたたち、わたしを犯そうとしているのね？　調教しようとしているの？　やめて！　離して！　パンティーをはぎ取られる。ブラジャーもなく丸裸だ。一糸まとわぬ巫女である。性奴隷。そう言うにふさわしかった。痴女のセイラは叫ぶ。いやぁ――！

太陽は海原先にある東から上がると思っていた。芝生の上を、上空を通り過ぎ行き、やがては山の向こうの西に沈む太陽。陽は東から上がる。そのはずだった。しかし違う。天をひっくり返したようにしてあざ笑う雷。痛みが伴う。ペニスを挿入するには早すぎた。わたし、わたしは……。呟く。やがてひくついた唇が発した。わたしを滅茶苦茶にしてぇ！　嗚呼、なんと言うことだろう。太陽が西から上がったように、運命も逆方向へと遡る。これに何の意味があるというのか？　狂ってしまったセイラにはわからなかった。

――ねえちゃん。ねえちゃん。ハッとする。おい、姉ちゃん大丈夫か？　そうだった。わたしは芝生へ横になっていたのじゃなくブランコに乗っていたのだっけ？　それで一人で発狂してた。あれは空想の中の世界。そうだったのね。良かった……。そうではない。

セイラは自分が怖くなっていた。もしもこの村で痴女ということをあからさまにした時、果たしてどうなるのだろう――？　太古の泉より湧き上がってくるこの思い（痴女的本能）をどれくらいまで抑えることができるのか？　計算してみる。不可能だった。

ならばどうすればいいっていうの？　このまま田舎の百姓にご主人様を演じてもらうしかないのかしら？　それとも少年たちに犯されてしまう方が先なの？　いいえ、そうじゃない。もし、だった場合、わたしの乳首とクリトリスはカマでギッチョンにされてしまう。それからそれからイカの塩辛にされて胃の中に納まってしまうのよ。それはどういうこと？　殺されるということよ。嫌！　そんなのぜったいにいや――！

「諦めなさい。君の人生はもう終わったのです」

だ、誰？　その声は誰なの？　分からないかね？　ええ、分からないわ。だから教えてちょうだいな。あなたはいったい誰なのかを。君のこころだよ。君の魂から声は聞こえているのだ。いいかい？　君はもはや屍になるしか方法はないのだよ。ようやく来たじゃないか。本当はうれしいのではないのかね？　何を言っているの？　死ぬことが嬉しいですって？　それに、どうしてあなたは男の声なの？　これがわたしの声なら女性であって当然なのに訳が分からないわ。あなたは嘘を発しているのでしょう？　ほんとうは神。あなたは神様なのね？　そうでしょう？　何をとぼけたことを言っているのかね。私は君であって神ではないのだよ。魂はひとつしかないようにね。君は男に生まれるべきだった。そ

う思っているのだろう？　だから私の声が男だと勘違いするのだよ。いいかね？　君は私であって私は君なのだから。黙って！　ちがう！　本当はわたし死にたくなんかないの！　だってそうでしょう？　もうわたしは自由になったの！　これからなの！　なのに、どうして死ななきゃならないの？

「君はもう一つの世界を知っているかね？」

もう一つの世界……？　なんのこと？　人生には第三の運命があるということだよ。分からないかね？　そんな事言われても……。ああだこうだうるさい子だ。いいかね？　私は君に意見なんか求めていないのだよ。知っているのか知らないのか、只、それについて答えてくれればよろしい。第三の運命のことを？　そうだよ、セイラ君。そんなの決まってるじゃない！　ないわ。無いに決まっているでしょう？　どうして言い切れるのかね？　わたしはもう御免なの！　せいせいしているわ！　どうせあれでしょう？　シンデレラストーリーが何ちゃらって、そんなおとぎ話あるわけないじゃない。わたしは現実を見たの。もう駄目なんだってことを。もう疲れてしまっているのよ。だからおねがい、静かに生きさせて。納得をしているのだね？　そうよ。痴女の末路はこんなもの。そう思っているのだね？　そう……。でもまって！　第三の世界があったとして、それはどんな物語なのかだけは知りたいわ。行かなくてもいい。行けなくても良いから。ねえ、おねがい。教えて。そんなに知りたいのかね？　ええ。君も可哀そうな女だ。もしかして君はハイカラさんにでもなれると思っているのかね？　シンデレラストーリー？　何を馬鹿なことを。そんなものではないのだよ。地獄の次にまた地獄が用意されているようにね。君は一生報われることはないのだよ。それでも聞きたいかね？　わ、わたしは……。聞かなくていいことも世の中にはあるのだよ。それではこの話はなかったことにしよう。さようなら。さようなら？　ちょっとお待ちなさいな！　貴女は紳士ぶっているけれど、とんだ皮肉れオオカミね。でも教えて。わたしが最後にすることは？　これからするべきことはなんなのかしら？　知りたいかね？　ええ。ならば教えてあげよう。それはずばり死ぬということだ。さあ、楽になろうではないか。静かに絶とうではないか。君はとっとと自殺してしまいなさい。それが世の中のためなのだよ。さあ、死ねぇ――！

セイラは首をつって自殺を試みた。もうこの世とはおさらば。痴女のわたしなんか、この結末でよかったのよ。涙も溢れてきやしない。絶望中の絶望だ。ドアノブにタオルを巻いて、そいつに首をもたげる。上手いこといった。両手を離してみる。首に負担がかかった。その瞬間。バキンという音と共にセイラの頭はフローリングの床へ叩きつけられた。古かったのだろう。ドアノブが持ちこたえきれなかったようだ。あまりの衝撃とショック状態で彼女は気を失った。それから。長い夢を見たのは。

素っ裸のセイラが今いる世界は幻。だけどもどこか懐かしさの匂いがする。はて、ここは何処だっただろうか？　記憶をさかのぼってみる。まるで思い出せなかった。どうしてでしょう？　わたしったら記憶を失ってしまったのかしら？　自問する。分からない。とにかくここは眩しかった。太陽がメラメラに燃えているようで夏場の暑さが実感できる。片手には三ツ矢サイダー。もう片方にはコカコーラを握りしめていた。さて、どれを先に飲もうか？　いいえ、これは贅沢をしろと言っているのよ。二つ混ぜて飲んでしまえばよいのだわ。どうやって？　ほっぺた一杯に両方注ぎ込むということよ。

広い芝生の庭が足元に爽快さを与えた。はだしのセイラは全裸のまま横たわると、背中に滴の冷たさが走った。気持ちよい……。見上げる青空にちぎれ雲がひとつふたつ浮かんでいる。遠い向こうからカッコウの鳴き声が聞こえてきた。それもそうね。この場所へは

来たことが無いもの。思い出せないのも無理はないわ。
ふと、せせら流れる川の音に気が付いた。セイラは芝生から立ち上がると、その音色のほうへ近づいてみる。青く澄んだ淡水。はて、真水とはこんなにも青色をしていたのだっけ？ 首をかしげてみる。けれど彼女はそのきれいな水を口へ含みたくなった。サイダーとコーラはもうない。ここは夏場。既に喉はカラカラである。セイラは脛（すね）まで小川へ浸かると、すぐさま両手で水を一掬いした。一気に飲み干す。おいしい……！ そのときだ。"おかあさん――。"え？ 一瞬だが硬直する。他にも人が居たの？ 振り返ってみる。だが誰一人としていやしなかった。おかしいわね。気のせいだったのかしら？ 自身の病気を思い出す。まさか幻聴？ この世界にも幻聴があるっていうの？
「おかあさん――！」
まただ。いけない、わたしそろそろ昼寝しなきゃ。きっと慣れない世界に頭が疲れているのよ。木陰を探して眠りましょう。
「おかあさん、わたしよ。はるか。覚えてくれてる？」
それは幻想的と言えた。水面に伸びているセイラの姿こそが彼女である。"はるか"なのである。最初、その姿は、記憶にある小さいころの"はるか"。しかしひとつ瞬きをするたびに大きくなってゆく。最後は二十歳頃であろうはるかが映し出されていたものだから、セイラは感極まって指先を相当震えさせた。
「は、はるか……。本当にあなたは"はるか"なの？」
「ええ、そうよ。おかあさん」
とても信じられない出来事だ。直ぐには信用できなかったが、目の当たりにした現象は夢ではないような気がしてならない。嗚呼、どうしましょう？ 夢の中で夢を見るなんて嘘よ。だからこれは現実なのね。でも、ちょっと待って。ちがう。これはやっぱり夢なのだわ。だってそうでしょう？ 夢の中で現実をみれば、はるかという存在は幻なの。夢の夢ならほんとうの現実なのだわ。そうなるとおかしな話よね？ いいえ、ちっともおかしくなんてない。ここでは"はるか"の存在は夢なのだから、それでいいのよ。これからはるかが何を言っても驚きはしないわ。そういうことでしょう？ イエスキリストさま。
「おかあさん、ほら、みて。わたしも裸なのよ」
それがどうしたというのだろうか？ この世界では逆に服を着けている方が不自然というやつではなかろうか。自問する。ここには大自然がこうしてある。立派に見せつけている。服なんかしてたらそれこそ失礼だわ。
「さあ、おかあさん。わたしを幻影（水面反射）から引っ張り出して」
それはできない相談だ。だけども、どうにかしてはるかに触れたかった。抱きしめたかった。髪の匂いを嗅ぎたかった。彼女は人間。決して幻影で終わってはいけない存在。だから連れ出すのよ。どうにかして。引っ張り出して逃げるの。その事に関してあらかじめはるかに謝っておかなければならなかった。遠い記憶の中で。過去の思い出で。失敗したと思った。はるかはわたしが面倒見るべきだったのかもしれない。でも、ちがう。あの時は仕方がなかった。わたしは狂っていたのだから。それは今でも変わることはない。セイラはいつまでも痴女である。変態女だ。だから苦しい。死にたいと思うのだ。その結果がこれである。わたしは自殺を図ったの。はるかはそのことを知っているのかしら？
カッコウの声が遠い遠い存在になるころである。もはや意識の中に存在しない。それほどにセイラは"はるか"の存在に集中していた。逃げることは許されない。まって、なぜ逃げなくちゃいけないの？ わたしは彼女のお母さんでしょう？ こわいの？ これから知る

事実が恐ろしくてたまらないというのね？　仕方がないのね？　わたしはいつからこんなに弱くなったのだろう。やはり死んで正解だったのだわ。でも生きてる。自殺は失敗に終わったじゃない。

「おかあさん、わたしをこの世界に連れ出せないの？　おかあさん、そうなの？」

たじろくセイラ。もう駄目よ。わたし、おかしくなっちゃいそうだわ。ほら、お行きなさいな。何も言わずにお行きなさいな。彼女は感じている。はるかはもう生きていないことに。現実の世界に存在しないことに。薄々と感づいている。女の直感？　母親としての予感？　そうではない。そんなものと違う何かを感じるのだ。このはるかの姿にそう思うのだ。確かにはるかは何か妙だ。それが何なのかはっきりとわからないものだから余計に奇妙だと思った。

「おかあさん。わたしね、もう生きてないの」

やっぱり――！　その理由はなんなの？　二十代そこそこで亡くなるだなんておかしいじゃない。どうして死んじゃったの？　はるか、もう助からないの？　嘘だといいなさい。お母さんに冗談は通じないものなのよ。さあ、言いなさいな。全てはジョークだと言って笑いなさいな。

「わたし、お父さんに殺されちゃった」

なんですって？　本当に馬鹿な亭主だわ。でも、明さんはそんな人じゃない。だけども馬鹿なのね？　どうして殺したの？　明さん、あなたは最大の悪魔です。鬼よ。死神よ！　わたしは許さない。命を刺し違えてでも仇を打ってやるんだから。それで、はるか。どうして殺されたの？　すべてを話しなさい。お母さんはもう驚かない。全てを受け止めます。悪いのはわたしの方かもしれないのだから。

「自殺したの。お父さんがあまりにもひどくて」

自殺？　嗚呼、なんてことなの。あなたの人生はこれからじゃない。それはあなたが一番分かっていたことのはずよ。それでも自ら死を選んだ。何故？　それはなぜなの？　教えてちょうだいな。はるか、自殺なんてたいそうなこと神さまは許さないのよ。あなたは地獄へ行きたいの？　違うでしょう？　はるかが向かうべきは天国。きっとザナドゥーの泉なのよ。どうしてもったいないことをするの？

「おかあさん。わたし、ずっとお父さんに犯されてたの。開発されていたのよ」

開発ですって？　それは違うわ。はるか、いいかしら？　それはあなたを性奴隷にするための罠だったのよ。明さんははるかを痴女に仕立て上げようとしていただけ。わたしと同じ運命を歩ませようとしていたのよ。違う、そうじゃない。もしかしたらもっと酷いことを企んでいたのかもしれないわ。例えば……。

「そう、おかあさん。わたしね、とってもいけない商売をしていたの」

やっぱりそうだったのね！　なんて酷いことを……。これじゃあんまりじゃない！　はるか、この先は話さないで。お母さん哀しすぎて居ても立ってもいられなくなるから……。まったく明さん、最悪なことを娘にしてくれたわね。この恨みはわたしが、敵はわたしが取ってやるんだから！　でも、どうすれば現実の世界へ戻れるのかしら？　この世界に居る限り、明さんを殺すことなどできやしないわ。一体どうすれば……。

「おかあさん、きいて。お父さんはわたしが死んだ後、自動車事故で亡くなったのよ」

なんですって！　明さんも死んだ？　そうだったのか……。とうとうあの人も死んでしまったのね。なんてことなの？　どうしてそんな仕打ちをするの？　嗚呼、嗚呼……。

突然、穴の開いた風船人形のように体の力が抜ける。もはや脱力感しか湧いてこない。

そう……、ようやく終わったのね。わたしたち家族は終わってしまった。それならわたしはもう現実へ戻らない方がいいのかもしれない。だってそうでしょう？　もはや生きる力がないも等しいんですもの。仕方がないわ。これから先、何のために生きればよいのか。生き延びたところでいつかは死んでしまってすべては抹消されるのよ。なかったことになるの。それじゃあんまりでしょう？　わたしだけヘビの生殺しだなんてイエスキリストもとんだ皮肉れ坊やだわ。何が神よ！　もう何も信じない。絶対にリスペクトなんかしないわ。さあ、わたしも完全に死んでしまいましょう。この世界で死んでしまえば現実から逃れられるかもしれない。でも違うのよ。この世界からいなくなると言う事は、ここで見る夢が現実であるように、死んだ瞬間から生き延びてしまうのだわ。それじゃ、どうしろっていうの？

「おかあさん、わたしと来て。さあ、はるかの手を握って……」

はるか……。

言われたとおりにセイラは両手をはるかへ伸ばす。彼女は不思議にも水面反射して映りこんでいるはるかの手を握ることができた。その指はまるで生気のあるがごとく温かい。これが本当の愛というものなのね。セイラは遠い記憶に忘れかけていた感情を今、たしかに感じた。安どと共になんだか深い眠りにつくような錯覚に陥る。だが決して幻なんかではなかった。

おわり